
上田自由大学の成立とその展開

はじめに

自由大学運動は、1920年代はじめから30年代はじめにかけて、長野県・新潟県を中心に全国各地で展開された、地域民衆の自己教育運動として知られている。

この自由大学運動については、すでに戦前、この運動の当事者であるタカクラ・テルが、「これほど程度の高い農村の社会教育機関が全く農民の手によつて経営されたという事わ世界のどこの歴史にも殆ど前例の無い事だ。それわ教育史の上に特筆されなければならない」と述べていたが（高倉 1937：61）、いつしか忘れられ、かえりみられることはなかった。1970年代に入って、自由大学運動は、戦前日本における民衆の自己教育運動の先駆的实践の1つとして注目を集めるようになり、それにもなつて自由大学運動に関する研究は積み重ねられ著しい進展をみせている(1)。

ここで私が検討の対象とするのは、この自由大学運動の起点となつた上田自由大学（創設時は信濃自由大学）の学習運動である。上田自由大学は、長野県上田・小県地域でほぼ10年間にわたつて学習運動を展開したが、その歴史は大きく2期にわけることができる。第1期は、主としてこの運動の理念を構築した土田杏村の協力のもとに学習運動をすすめていった時期で、1921年に創設されてから26年に中断するまでの数年間であり、第2期は、主としてタカクラ・テルの協力のもとに農民運動との関わりをふかめつつ学習運動をすすめていった時期で、1928年に再建されてから31年に消滅するまでの数年間である。

私は、一応そのように分けられる上田自由大学の歴史を、できるかぎり具体的にえがいてゆくことにしたい。上田自由大学については多くの研究が蓄積されている。その研究成果を踏まえ、また、比較的最近の新しい研究動向にも留意しながら、上田自由大学の歴史を再構成し、それを地域の歴史の展開の中に位置づけることを意図している。

1. 上田・小県地域の青年たち

自由大学運動の出発点となつた上田自由大学の創設は、上田・小県地域で創造的に生きようとしていた金井正・山越脩蔵・猪坂直一という3人の青年たちと、新しい文化運動の実現に意欲を示していた在野の哲学者である土田杏村との人間的な交流の中からつくりだされたものである。

長野県は、蚕種・養蚕・製糸業が盛んで、「蚕糸王国」の地位を確立していたが、その中で上田は「蚕都上田」とよばれ、とくに蚕種業の中心となつていた（上田小県近現代史研究会 2008）。

第一次世界大戦を契機に日本農業は好況にめぐまれ顕著な発展をとげ、自小作中農層の農業経営もまた上向きの傾向を示していた（竹村 1971：381-382）。上田小県地域の農家も、蚕糸業の発展に

支えられて比較的富裕な農家が多く、それに支えられて青年たちの間には新しい知識や技術、経営への意欲が生まれ、青年として自立することへの願望も強まることになった（田嶋 2019：66）。青年たちの新しい社会・文化への志向が強まり、デモクラシーの機運とともに、青年会活動や政治運動、文化運動も活発となった。

この地域の青年たちは、大正デモクラシーの思潮にもっとも敏感に反応し、青年会による文庫・図書館活動の活発化、各町村における「時報」の刊行、信濃黎明会の普選運動、山本鼎の自由画教育と農民美術運動など、さまざまな地域変革への試みをおこしていた。上田自由大学の学習運動は、そうしたこの地域の青年たちの動きと絡み合いながら形成され、展開されていった（上田小県近現代史研究会 2022）。

青年会がもっとも力を入れた文化活動は文庫・図書館の運営であった。とくに上田小県地域では、文庫・図書館の設置率が高く、1923年3月当時、長野県下の私立文庫・図書館114館のうち、上田・小県郡が32館で長野県全体の約28%を占めていた（上田市誌編さん委員会編 2001：15）。この文庫・図書館は、青年夜学会とともに経済的事情や家業を継ぐために進学できなかった青年たちの学びを支える場となっていた。

青年たちは、夜学や文庫・図書館の文化活動の上にいっせいに「時報」というメディアをつくりだし、それを通じて村の自治に主体的に関わりはじめていた。川辺村青年会長の小林泰一は、『川辺時報』の発刊にあたり、「時報」を「村の生活態を基礎としてそこに生れた出来事を多少時間は要するも正確に報導し研究する、村自治の融和と向上を使命とする機関」と位置づけ、「村内に於ける公私公益機関の事業扱等、或は全村民の叫び時事問題評論より倫理道德の振作に至る迄、自由に大胆に理性の発動するがまゝに厳正公平、当に不偏不党相互了解の下に村自治の発展と充実に貢献せんとするものである」と訴えていた（小林 1925）。「時報」とは原則として月1回発行されていた一種の町村報である。その意味では、それは自治体の機関紙であるが、実質的には青年会が発行を担当し、町村により「時報」の性格に違いがあったとはいえ、おおむね発足当初のなかば官製的な性格をしないで脱却して、青年自身の自己主張、学習の場としていった。「時報」刊行の先頭をきったのは塩尻村の『塩尻時報』（1919年2月創刊）であったが、小県郡3町31村のうち「時報」を刊行したのは30町村に及んでいる（小平 2001：175-188）。この事実、この地域の青年たちが、第一次世界大戦の終了とともに顕在化した社会の閉塞状況のもとで、自分たちの生活の前途を模索し、その鬱積した想念を表現せずにはおかなかったこと、また村落支配層による堅固な村の秩序の中で、自立への希求がいかに強かったかをものがたっている（鹿野 1973：99-100；山野1978：173-174）。

こうした状況のもと、上田・小県地域では町村段階での青年会の組織化が完了し、20年1月に上田市に上田市連合青年会、2月には小県郡連合青年団が結成されていた。とくに小県郡連青の官製的な体質に飽きたらず、民本主義に共鳴していた青年たちは、自主的な青年団体の結成を構想していく。川辺村の小林泰一が中心となり、「小県郡立憲青年団」の結成が試みられ、各町村の青年会長クラスの青年たちの賛同を得ている。その構想は、4月に東大新人会の長野遊説旅行による講演会が上田で開催されたのを機に吉野作造や新人会と連絡を取る中で具体化する。小林は、吉野に手紙を出すと7月に、「御計画の義は東京の新人会と同趣旨と存じ候ニ付之と連絡を取られる方可然存候」との返信が届き（小林泰一宛吉野作造の手紙、1920年7月14日）、次に新人会に手紙を書き送ると、新人会からは、「弊害極まれる現下の状態に、革新の熱意やみがたく、真理と正義と愛とを追求して、運動を起さんとせられる御精神は、我々全人の共鳴措く能はざるところであります」、「是非とも支部結成の為め、御尽力の程願上げます」との返信とともに、綱領等を掲載した機関紙『先駆』が送られてきた（小林泰一宛新人会の手紙、1920年8月3日）。小県郡連合青年団の役員会があった9月17日に小林は、郡下の青年たちが集まったこの機会に「有志を以て青年会とは別の立場で社会民主化団体を作る

う」と発議し、そこで団体名を信濃黎明会とすることが決められた。そして10月2日、信濃黎明会の発会式兼講演会が開かれ、正式に結成された。信濃黎明会は、「人類ノ自己実現」と「現代日本ノ正当ナル改造」を目標に掲げたように、新人会にその綱領を借り、黎明会にその名を借りている。その会員の多くは、中農以上の中学校や蚕業学校を卒業した農村青年で、「官製青年会にあきたらず、近時のデモクラシー気運に若い血汐をたぎらせて飛びまわろう」という人たちであった（猪坂 1967：12-14）。そして、馬場恒吾・永井柳太郎・中野正剛や尾崎行雄らを招いて講演会を開き、この地域での普通選挙、軍備縮小運動の中心となって、活動を展開していった(2)。

このような農村青年たちの中に神川村で地域のデモクラシー状況を切りひらき、いかに生きるかを模索していた2人の青年、金井正(3)と山越脩蔵(4)がいた。金井の父一平は国分銀行頭取で田畑と養蚕・蚕種製造を営み、また、山越の父元三郎は神川銀行常務で田畑と養蚕・蚕種製造を営んでおり、金井・山越は村内の資産家であるのみならず上田周辺でも有力な富をもつ農家の青年で、きわめて似た境遇にある文化的志向の強い青年であった（上條 1979：85-86）。

金井は、上田中学卒業後は大学進学を望んでいたが、長男の生まれつきの病弱、次兄の夭逝によって家業を継がざるを得なくなった。この精神的な閉塞感・煩悶を乗り越えようと宗教書や哲学書を読み始め、1905年には「平民新聞」を定期購読して読者会を開いている。また翌年には金沢の四高に進学した友人新田隣平から西田幾多郎の存在を知らされ、その講義録を読み西田哲学への関心を深めている。07年には同人雑誌『国分寺の鐘韻』を創刊、翌年には神川小学校に蔵書を寄託し「神川読書会」を設立している。徴兵検査前には上京して平民社を訪問し、堺利彦や石川三四郎と会い、輜重輸卒として教育招集された際には、村の歓送会で徴兵忌避と軍縮を訴えている。その後、1913年3月には、読書会員とともに神川青年会を設立し、同時に神川文庫を神川小学校内に設置している。会長は小学校長としたが、自身は青年会読書部のリーダーとして村内巡回文庫を計画実施し、18年には神川文庫に蔵書を委託し一般に公開している（小崎 1974：57-59；渡辺 1994：35-36）。

山越は、上田中学を卒業すると家業を継ぎ、8歳年上の金井の科学の日常化、知識と実用性との統一性、それを生み出す視野の広さと深さに圧倒され、哲学や諸科学のとの関係に関心を持ち、勉強するようになり、いつしか金井と行動をともにするようになった（小平 2006：41-42）。

この2人の青年が行った共同作業の第一歩は、1915年、金井が神川村内の上田中学校同窓生を組織した学会会で手がけた村内の生産力調査であった。このとき、山越だけが調査を実施して、金井の期待に応えている。2人の活動が先ず村の生産力の増強に求められたことは、その後の2人の地域でのさまざまな活動の底辺に地域の農民の生活向上への希求があったことを示している（上條 1979：86）。

1916年の8月、金井正は、小学校教員の集団である信濃教育会小県支部が哲学講習会を開くことを知ると、西田幾多郎を招くならば、その費用を負担すると申し出た。早くから西田に注目し、『善の研究』（1911年）や論文にふれてきていたからである。この講習会は上田中学校講堂で3日間開かれ、西田が「現代哲学における科学的真理の概念」の講義を行った。また、翌17年には、金井の負担によって、田辺元の哲学講習会が開かれている。山越脩蔵は、金井が費用を負担したのは、「西田や田辺の学才に対する評価などで、この若い学者を地方の教育界に紹介したかった」からだとしているが（山越 1978：4-5）、金井自身、大学進学断念の無念を、西田や田辺を自分の住む土地に招くことによって、知的欲求をみたそうという想いもあったにちがいない。中学時代から哲学に親しんでいた金井は、当時の日本の哲学界の専門書ばかりでなく、欧米のジェイムズやベルグソンなどの著書原書や英訳本で読む努力をし、『哲学雑誌』『哲学研究』等の学術雑誌や『中央公論』等の総合雑誌を愛読していた。山越も、金井に誘われて西田や田辺の講義を聴講し、西田の宿を訪ねて親しく話を聞く機会を得たりして、哲学への関心を深め（山越 1972：54-55）、西田幾多郎、田辺元、リッケル

ト、ヴィンデルバンドを愛読し、カント、ラッセル、レーニンなどを英語で読み、ドイツ語の勉強も始める哲学青年になっていた（上木 1982：58-59）。

1917年2月4日、金井正は、前年12月にフランス留学から帰国し、父親が医院を開業していた神川村大屋に戻っていた画家・山本鼎⁽⁵⁾を招待して山越脩蔵とともに留学中の話を聞く機会をもった。山本は、帰国の途次ロシアに立ち寄り、その地で農民美術蒐集館と児童自由画展覧会を見て、農民美術と自由画教育を日本で実施する使命感をいだくようになっていた。そこで、2人にモスクワで見た児童自由画に感銘したこと、日本の図画教育に何らかの改革を行いたいことを話した。金井と山越は、山本の意見を聞いて、「意味の重大さを認めて、児童画の改革運動に参加することを約束」した（山越 1978：6）⁽⁶⁾。

金井正は、教育問題について、「人は誰でもいいものを有つて居る。只そのいいものを導き出す緒口^{いとぐち}が誰でもには与へられて居ない。又すべての人が自分のいいものに気付いて居るとは言へない。教育と云ふことはこのいいものを導き出す機会を与へること、銘々のもつて居るいいものに気付かせることだ」と書き（金井 1921：53）、子どものもつ可能性をひきだすところに教育の本質をみ、人間を鑄型にはめるような教育に対して批判的な考え方をもっていた。また山越脩蔵も、「実際、社会改造とか云つても、根本的にやらなければ改造ではありません。決極教育^{ママ}の力でなければ駄目です」と、教育による社会改造を考えていた（山越 1921：78）。教育へのこのような想いがあったゆえ、かれらは教育改造にかかわったのであった。

1918年12月、山本鼎は、神川小学校で「児童自由画の奨励」と題する講演を行った。この講演は、校長の岡崎袈裟男が、金井・山越から聞いた山本の体験談に共鳴し、1クラスか2クラスに限って自由画を描かせる授業を担当の教員に行わせ、その実験的な授業の成果に立って、山本に依頼したものであった（平野 1966：3）。

1919年3月、山本鼎の起草になる『児童自由画展覧会趣意書』が小県郡内外の学校に配布された。趣意書には、次のように書かれていた（山本 1919：1-3）。

「従来の教導によりますと、児童は粗悪な印刷に付せられた大人の画（それも多くは下手な画家がぞんざいに描いたもの）を模写する時間が、自然から直接に、形なり彩^{いろ}なりを汲み取る時間よりも多いのでありますが、これはいけない事と思ひます。何故ならば、例へば臨本に示された一本の下らない線が、一本の美しい、活きた樹木の線と同じ力を以て児童の頭に働きかけるからです。彼れ等はどんなものをも正直に摂取するのです。ですから、いぢけた臨本を与へれば、其通りいぢけてしまひます。児童の眼を豊富なる自然界へ誘へば、彼れ等の心と手は生き活きとして来るのです。」

この趣意書にもとづくわが国最初の児童自由画展覧会は、19年4月27、28の両日、神川小学校を会場に、小県郡34校・郡外20校などから9800点の作品を集めて開かれた。子どもが自分の眼で見たまま、感じたままを表現する自由画の展覧会は、教科書の絵を手本に模写させる方法をとってきた、それまでの臨本主義の図画教育に対する反逆であった。岡崎袈裟男は、この展覧会について、「安価な臨本主義に泥^{なす}んで形式的残骸品の羅列に止まる我国従来の単なる成績品展覧会に対しての、強い目覚めの第一矢である。併もこの重大な使命を帯びた展覧会の第一回が文化の中心地なりと称せらるる大都市に於てでなく、この信州の一地方に生み出されたといふ事は更に一般の強い何物かを感じしめる」と述べた（岡崎 1919：25）。展覧会の模様は、地元の『信濃毎日新聞』をはじめ『読売新聞』が日曜版付録の一面を提供するなど、ジャーナリズムを通じて紹介され、教育者・芸術家の関心を集め、自由画教育は全国に急速にひろがった⁽⁷⁾。7月には、運動の全国化をめざして、山本鼎・片上伸・岸辺福雄・金井正・山越脩蔵その他によって日本児童自由画協会が設立され、つづいて9月にはおなじ長野県の下伊那郡竜丘小学校で第2回展覧会が催された。さらに20年12月には、日本児童自由画協会は日本自由教育協会と改称され、それを機会に北原白秋・弘田竜太郎などが参加して、芸術教

育運動の全国的な組織となり、翌年1月からは雑誌『芸術自由教育』が刊行された。

自由画教育運動が大きな反響をもって世に迎えられると、これに勇気づけられた山本鼎と金井正・山越脩蔵の3人は、もう1つの運動、農民美術運動を開始する。児童自由画展覧会から半年おくれて1919年11月、神川村の各戸には、山本の起草した小冊子『農民美術建業之趣意』が配布された。そこには、「農民美術とは、農民の手によって作られた美術工芸品の事であって、民族的若くは地方的な意匠—素朴な細工—作品の堅牢、等が其特長とせらるゝのである」とされ、農民美術「建業の目的は、汎く農民をして農務の余暇を好む処の美術的手工に投ぜしめて、各種の手工品を穫、是れを販売流布しつゝ、終に民族と時代とを代表するに足るPEASANT ART IN JAPANを完成し、以て美術趣味と国力とに裨益せんとするのである」と、その目的が述べられていた（山本・金井 1919：1-4）。そして12月から翌20年の春にかけて神川小学校の教室で農美講習会がおこなわれたが、その費用は金井が負担した。講習会が終わった4月には、神川小学校を会場に、講習で製作された1153点の作品を集めて第1回製作品展覧会が開催され、その後東京や大阪の百貨店で作品展示即売会が開かれ、その作品の多くが買い取られるという成功をおさめた。そして山本は、旧友倉田白羊を農民美術の指導者として招き、また23年には神川村大屋に日本農民美術研究所を建設して、みずからも指導に力を入れた。

農民美術は、この地域の主要産業である養蚕業が1920年の戦後恐慌をさかいに行き詰まりの傾向が明瞭となった中で、農閑期利用の副業として注目され、長野県や農商務省はこれに補助金を出して援助した。このため農民美術運動は急速に県内外の各地にひろがっていった(8)。

山越脩蔵は、農民美術について、「吾々は、この美術的活動が単に美術家の特産物でないことを平気で主張することが出来る。即ち誰れもが、真善美を認識することが出来るからである」（山越 1921：55）と主張し、また農美講習生の吉池勝が「俺は農夫にも詩もあり美もあり感じもあるむしろ詩人文人と言はるる人と同じに強い感じを持って居ると思ふ」、「此産業的趣味ある有利な事業が社会に普及され俺達農夫が副業として利用したならば農家経済ばかりでなく百姓の品位が向上し、どれだけ百姓生活が意義あるものになるかわからない」（吉池 1921：64）と述べている。農民美術運動は、農閑期の農民に経済的安定を与えることと、それにとまなう美を農民の生活の中から生み出そうとする試みであった。そうしてそこには、これまで民衆とは絶縁した存在と思われていた芸術を、専門家の専有物から解き放ち、民衆の手に取り戻そうとする方向が示されていた（山野 1978：138-139）。

山本鼎との〈出会い〉を契機に教育・芸術の領域で始まった2つの運動は、大きな展開をみせていくことになるが、もう1人、在野の哲学者・土田杏村(9)との〈出会い〉を起点として、自由大学が創設されていくことになる。

2. 上田自由大学の形成過程

普通選挙運動は、1919年に入ると東京をはじめ全国各地で大衆集会やデモが行われ、全国的な規模で展開されるようになった。この普選運動の昂揚を背景に、42議会では憲政会・国民党などが普通選挙法案を提出すると、とき原敬内閣は、20年2月、突如として議会解散を断行した（松尾 1989：139-183）。

1920年5月の総選挙では、原敬内閣のもとでの普通選挙をめぐる、時期尚早とする政友会と普選即行を主張する憲政会・国民党とが対立したが、上田・小県地域では普通選挙を求める青年たちは、憲政派の山辺常重を支持し、政友派の現職・工藤善助を破り、当選させている。この選挙のとき金井

正は、憲政会から立候補した神川村出身の山辺の選挙参謀に推され会計責任者となった。また、当時神川青年会の会長であった山越脩蔵は、「普選に対する啓蒙運動をすべく、檄文を撒布して選挙の側面活動」を行った（山越 1978：7）。山越の作成した檄文には、次のように書かれていた（山野 1972：144-145）。

「国民の幸福を増進し国家の文明を向上させるのには私共青年の力によることが偉大であります。

此世の中を住み易くしたいと云ふのは誰しも望んで居ることであります。

普通選挙は世の中をより良く住みやすくする第一歩であります。

良いことと思つたならば一日も早く実行するのが私共青年の意気であり任務であると信じます。

何事も一人では出来ません。皆さんの御賛同を得て一日も早く此問題を解決して、改造の第一歩に入らうではありませんか。」

山越は、この檄文を広く配布する一方、「現在の政界や将来への展望と有権者の態度とでもいうような話を聴くのも大切なことではないか」と考え、講演会の開催を計画した。「普通選挙制度が実施される時代が来た場合」に、「選挙民がはたして選挙権を有効に行使出来るまでに成長し得るかどうかの疑問」をもっていたからであった。そして山越が講演を依頼したのが、土田杏村であった。個人雑誌『文化』や著書の『象徴の哲学』（1919年）、『哲学研究』『中央公論』『改造』などでの多方面にわたる評論・論説や哲学的な研究に注目していたからである（山越 1978：7）。

土田杏村は、このときのことを、次のように書いている（土田 1921a：11）。

「昨年（大正9年－引用者）春の事であった。私は当時著しく自分の健康を害し、読書も何もかもすっかり禁ぜられて了って、明石の海岸に転住し、病褥中の人となって居た。或る日私のところへ山越脩蔵といふ未知の青年から手紙が参り、其れによると普通選挙運動の為に私に郡内の数個所で演説をさせようと思ふから即刻出て来ないかと云ふ事である。」

しかし、当時肺炎カタルのために兵庫県明石で転地療養中であつた土田は、療養中のため出かけられない旨を電報で伝えるとともに、そのすぐ後の手紙で、「若し其の講演会の席でお読み上げになり、多少でもお役に立ちましたら結構と存じまして…」と、文化主義の立場から政治の変革を訴える一文を書き送った（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1920年4月19日、山越 1978：.8-9）。

土田は、手紙の中で、「我々はどうしても政治や経済の生活を無視するわけには参りません。ただ失望させられたのは従来の政治や経済であり、我々の魂の生きて行く可き其新しい政治や経済ではありません。私は確く信じます。芸術と言ひ宗教と言ひ、将た政治と言ひ、経済と言ひ、此れは皆な我々が生きて行く上の欠くことの出来ない諸様相であつて、其等の一を無視して人間は生きることが出来ないと同時に、人間としてのつとめを果す上には、諸生活の何れをもよりよく生かさなければならぬ義務を我々は荷って居るものであると、随つて我々は政治や経済の中に芸術や宗教を見、芸術や宗教の中に政治や経済やを見なければ已まないものであります。本当に芸術を愛好する人は、政治の中に正真の芸術を見出すに相違ありません。又本当に政治を愛する人は芸術の中に正真の政治を見出すに相違ありません。／此んな考へは単に空想に過ぎないでありませうか。我々は決してそうは信じません。確かに此のことは実現せられるに相違無いです。ただそれが現在の普選運動が其れを実現し得るかどうかは甚だ疑問です」と述べて、現在の政治家が進める普選運動には期待を寄せていないが、現在の政治家とは「全然異つた人達によって組織せられた新政治、即ち文化政治、哲人政治を興望し、且其れに努力して居ますが、其の新政治にするには、何としても普選を実行す可きです」と、普選の実現を主張し、「政治に人間性あれ」と、結んでいる。

この普選運動に対する理想主義的な考え方を披瀝した手紙は、講演会が実現しなかつたために、公表はされなかつた。

その後山越は、土田の手紙が「想像以上の信頼に足る人柄であることを深めた」こともあり（山越

1978：9)、総選挙も終わったので、「政治の根本問題を理解できるような」講演会を開くことを計画し、その旨の手紙を土田に送った(山越脩蔵氏より聴取、1972年3月27日)。

土田は、ほぼ健康を取り戻していたため、8月14日、山越の求めに応じて、「御手紙の御用事の趣、大変光榮に存じます。今度は身体も大分よくなって居りますので、参上出来ます。併し私が貴兄方の御満足出来る様な、講演が出来るかどうか甚だ疑問でそれを危ぶんで居ります。日限は一週間位に結局なるかも知れませんが、先づ五日間ということにしておいて下さい」と、返信している(山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1920年8月14日、山越 1978：10)。

さらに9月に入って土田は、講演の日程と内容を知らせる葉書を送り、「二十二日に参上致し、二十三日に三時間あまり、文化主義論をやり、(一般に)二十四日から四日間現代哲学の深い方面のお話を致し時々それと政治経済とを関係させませう」と、書いている(山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1920年9月6日、山越 1978：10-11)。

山越は、上田中学の2年先輩で、小学校教員をしている金井栄に協力を依頼し、また、金井正にもこれまでの土田杏村とのいきさつを語り、哲学講習会への協力を依頼し、快諾を得た。

土田杏村の哲学講習会は、20年9月23日から信濃国分寺の客殿を会場に開かれた。参加者からは聴講料3円を徴収したが、32名の聴講者があった(山越 1972b：41)。

山越は、この第1回の哲学講習会について、次のように回想している(山越 2006：201) (10)。

「講義は午前十時から十二時迄であった。先生を案内して会場に行った。聴講生は十数名見えて居た。これは全く独断的な、仕事であったのでどう経済的に結末がつくか見当がつかなかった。もとより自分でも講義をきくのが主要で、機を一に求める同好の志だけで結構と思って居たのだから何んでもないが、然し神川の先生方に依頼し又土田先生に対してあまり失礼にならない程度的人员は欲しかった。幸ひ此頃(注、日の誤り－引用者)の聴講生は、三十名ほどに達し意外の好成績であった。講義は聴講生を非常に喜ばせた。由来哲学といふのは、書物や、雑誌では、初心者には難解であって、ことに雑誌などになると問題の一部しか取扱はれて居ないから初心者には理解出来難い。それなのに、平易に且つ西欧哲学の鳥瞰図を展開して其思想の諸関係を順を追ふて展り広げられたので、初心の者も西洋哲学の概略をつかむ事が出来たかに伺はれた。

この講習会は成功に終わった。土田氏も田舎の先生や、青年達に接して好感をもたれ、この様な講習会を引き続いて行ふことに積極的に賛成された。」

土田は、このときのことを、「青年Y(注、山越脩蔵－引用者)から、吾々農民が哲学の講義を聞きたいから来てくれと言つたので、私は農民と哲学と余りにその対照が面白いので、その秋出張することにしました。そして哲学の初歩手ほどきのようなものを致しました」と書き(土田 1922：27)、さらに村の好学の青年を発見したよろこびを、次のように書いている(土田 1922a：12-13)。

「大正九年の秋、私は長野県小県郡神川村－山本鼎氏が農民美術の経営をしてみられる村－を中心としての青年達に招かれて哲学の講習に参りました。村の青年が哲学の講習を聞く。非常に喫驚したのである。が行つて見ると成るほどと思つた。その計画を立てた、中心になつてゐる二人の青年は、家業に熱心なのは言ふまでもないか、その忙しい家業のひまひまに実によく読書をしてゐる。羨しいほどの読書をしてゐる。その蔵書を見ても、ちよつとした学者の書齋ほど沢山の哲学書を備へ付けて居る。

何にせよ大したものです。聞きに来た人達は主として小学校の教職員諸君であつたが、その熱心さも又大したものです。午後の学課を終へてから、一里許りの途を息せき切つて通つて来て講義を聞き、夕方遅くに帰つて行くのですから偉いものです。中には非常の遠方から汽車で通はれる方もありました。私が或る教員の会合に招かれて、二里許り遠方で午前に講演をし、大急ぎで車で帰つて午後の講義をする時には、両方かけ持ちで聴いてくれるといふ、私としては誠にどう感謝してよ

いか分からない、熱心さを示してくれたりしました。」

土田が哲学講習会に出講したのは、山越から熱心に勧められてであったが、それだけではなく、かれの日本文化学院を拠点とする文化運動の啓蒙を意図するものでもあった⁽¹¹⁾。すでに前年の1919年、土田は自らの文化運動の拠点として日本文化学院の設立を宣言し、個人雑誌『文化』（1920年1月創刊）を刊行し始めていた。土田は、自己の思想的立場について、「余輩は民主主義者にあらず、又社会主義者にあらず、現時の状況に対応し、強いて余輩の執らんとする手段の方針を命名せば、或は此を文化主義と名づけて可ならんか」（土田 1920）と、述べていたが、その文化主義とは「社会主義とアナキズムの統一としての文化主義」（土田 1921b）を意味するものであった。それは、当時の社会主義及び労働運動において問題となっていたアナ・ボル論争に対応し、それらを統一する思想的な立場を表明するものに他ならなかった。そうした立場から日本文化学院を設立した土田にとって、哲学講習会に出講し地方の青年と接触する機会をもつことは、その啓蒙の絶好の機会であったに違いない。哲学講習会の日程を打ち合わせた手紙の中で、「なほその期間内に一夕文化学院設立のための宣伝演説を何処ぞでやる（成るべく多衆に）ことが出来ましたら仕合せです」（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1920年9月6日、山越 1978：11）と書いたのは、そうしたかれの意図を示している。哲学講習会は、予想以上に好評であったことから、1回だけのものにせず、継続していくことになり、講習会の名称を小県哲学会と名乗ることになった。

その第2回講習会は、翌21年2月24日から5日間、上田市の上田高等女学校の一室を借りて行われた。土田杏村は、長野に行く打ち合わせの手紙の中で、「講習の方は、御好意誠に感謝の外無く、実は今度だけは辞しようかと思つたのですが、人生意気に感ず。あへて出かけませう。時日は来月下旬に致して下さい。中旬だと一寸準備が出来ませんから。それからその期間はやはり五日間にして下さい」と、山越脩蔵らの期待に応える気持ちを綴り、講義の内容については、「講義は『現代奥国学派の哲学』といふ事にでもしておきませうか。フッサアル、マイノング等々詳しい講義をして見ようかと思つて居ります。それともウインデルバンドの『哲学概論』にしようかとも思つて居ります」と書き送っている（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1921年1月25日、山越 1978：15）。

聴講者は60名を超えて盛会であった。山越は、この講習会について、「独奥学派、ボルツァノ、ブレンターノ、マイノング、フッサアルなど、この派の展開を詳述された。このような講義は全く貴重な講義で、五日間の時間がとれたので、大学の一年分にも匹敵するものであった」と回想している（山越 1972b：42）。

講習会の2日目、2月25日の午前、土田は、山越の案内で、金井正の蚕室で開かれていた農民美術練習所を訪れている。そのときは山本鼎が小杉放庵を案内していたため、席を改め、国分寺客殿で土田と山本は初めて顔を合わせた。初対面の挨拶を終えると、山本は、土田の兄麦僊の創作態度や、土田の評論活動に敬意を表したのに対し、土田は、山本の自由画教育、農民美術運動の精力的活動の労をねぎらうとともに、全面的な支持を伝えた（山越 1978：16）。

講習会を終えた土田杏村は、「誠によい感銘を受けて帰って参りました」という書き出しで始まる手紙を山越に書き送り、その中で次のように書いている（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年3月4日、山越 1978：16-17）。

「哲学会も文化運動も旨くよくやって下さい。哲学の方は未だ未だ本当のところはみんなに分つて居ない様ですが、熱心にやるうちに屹度いいものを得るに相違ないと思ひます。僕も出来るだけ御尽力申しませう。いろいろの方法で連絡をとる工夫を考へて見ませう。

僕は何処までもアカデミックの学風を嫌ふので、ああして一般の民衆に講演するのが何より愉快なのです。一般の民衆さへ哲学化して来たら、アカデミイの連中が却つて覚醒させられて了ふだらう。

若し今度又参る様の事があつたら、それまで研究会なり何なりで、分らなかつた様の点を書いて
予め送つておいて戴いて、私が参つた節其れを私のわかる範囲で申し上げる事に致しませう。そん
な事でも又新しい方法がいくらかでも考えへつきます。

文化運動の方も大いに信頼して居ます。新しい人達のまどみをつくつて下さい。ガサガサした
労働運動などにはうんざりして了ふのです。」

ここには、土田が、哲学会員が地道に哲学を勉強していくことに期待を寄せ、また、「文化運動」
すなわち自由画教育や農民美術運動にも深い共感と期待を寄せていたことが知られる。日本自由教育
協会の機関紙として1921年1月から『芸術自由教育』が刊行されると土田は、山本の原稿依頼に応じ、
第3号・第4号に分載された「ホルムスの自由教育論」をはじめ毎号のように寄稿して、協力を
惜しまなかつた（山野 1993：99-100）。

哲学講習会の経験は、5日間程度の講義を継続的に開くこと、聴講者から聴講料を徴収して講座の
運営にあてることなどの方法をとつたことで、1回限りの講演会とは違い、継続的に学習することを
可能にし、また、哲学だけでなく法学や文学など他の学問分野の講座をも開催できる可能性を生み出
していた。

山越脩蔵は、哲学講習会が盛会のうちに終えたことに力を得て、「哲学ばかりでなく、人間として
均衡のとれた円満な完成を期し」、倫理学や法学、文学、社会学、経済学、政治学など「文化全般に
わたる学問を総合的に勉強できる機関を組織」したらどうかと考えるようになる。そうすれば、「個
人の充実をはかり、延いては社会の建設に意義をもたらす」と思われ、それはまた、「普通選挙施行
の意義を積極的に発展させる能力に、国民の文化水準を高める役に立つものになりはしないか」と思
われたからである（山越 1972b：42）。

土田杏村は、4月20日の山越宛ての手紙の中で、次のように呼びかけている（山越脩蔵宛土田杏
村の葉書、1921年4月20日、山越 1978：17-18）。

「青年の文化運動を起さなければならぬことを痛切に感じます。文化学院からパンフレットを出さ
うかと思ひましたが、これはやはり単独にやるよりは、地方の青年の六七名の連名で出す方が面白
い様です。従来議員を排斥して青年の政治を始める、といふ趣旨の宣言書、パンフレットを発し
ようではありませんか。」

山越は、これに応えるかたちで、総合的な学習機関の構想を、青年議会のことなどとともに、土田
に提言し、そのさい学習機関の名称を「自由大学」としていたことが、次の土田の手紙から読み取れ
る。土田は、「自由大学、青年議会、みんな面白い。しっかりやって下さい。僕ももっともっと活動
したいのですがどうも同志のよいのが無いので弱っています」と、書き送っている（山越脩蔵宛土田
杏村の葉書、1921年4月28日、山越 1978：19）。しかし、この葉書には、自由大学の提言に対する
土田の具体的な反応はなかつた。

5月になると、土田から、雑誌『改造』の夏期特別号で各地の新しい村を紹介する特集を組むこと
になり、改造社の山本実彦社長から一文を執筆するよう依頼があつたとし、神川村を紹介するので、
「農美のこと、青年団のこと、哲学会のこと」など、「一切の材料」を送ってくれるようにとの手紙
が来ている（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年5月9日、山越 1978：21）⁽¹²⁾。

この依頼を受けて山越は、自由画教育・農民美術・青年会・小県哲学会・国分農事組合などの資料
とともに自由大学の構想についても書き送つた。これらの資料をもとに土田杏村が執筆した「哲人村
としての信州神川」（『改造』1921年7月号）には、自由大学について、次のように書かれている（土
田 1921a：15）。

「金井・山越両君は更らに此研究会（注、小県哲学会のこと－引用者）を延長して大学教育の一般
化を目的とした自由大学を創設しようと計画中である。農閑期六箇月許りの間に一講座一週間位の

五六講座を開講し、主として文化哲学的及文化科学的研究をやらうといふのださうである。」

5月段階になると山越の自由大学構想がかなり具体的なものになっていたことが知られる。

土田は、5月20日の手紙で、「長い材料をお送り下さって有り難う」と、山越にお礼を述べるとともに、パンフレットの発行について、「山越君も何か意見を考へておいて下さい。材料は何でもよいですが、兎に角若々しい地方青年、実際従業者の中から改造案を出すといふ態度のもとに。共産組合の組織を（自分の理想的に考へて居る）お書き下さればなほ結構です。」と、「改造案」の提出を依頼している（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年5月20日、山越：1978、p.20）。

この「改造案」の要請に対して山越は、教育による社会改造が根本的なものと考えていたがゆえに、具体的な計画にもとづく自由大学の構想を提起し、土田に協力を求めたものと思われる。これに対して土田は、6月20日付の葉書の中で、次のように書いている（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1921年6月20日、山越 1978：22）。

「御計画とに角大賛成です。いろいろ気づいたことをこの次に申し上げます。ただ時間は一週間はみんな都合が出来ない様です。自分の学校をそうした他の仕事でサボルことが出来ないものですから、此の辺のところの難点を切りぬけるのが一骨折りです。」

ここには、山越が4月の段階から提示していた自由大学構想に対して、土田が積極的に協力する意向が示されている。土田の積極的な姿勢を受けて山越は、土田のいう「難点」に対して、1週間程度の講義ができる講師を、たとえ「二講座でも三講座でもいい」から揃え、自由大学の実現にこぎ着けたいという趣旨の手紙を書き送ったものと思われる。これに対して土田は、6月26日付の手紙で、次のように書いている（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、山越 1978：23）。

「お手紙拝見しました。

二講座でも三講座でもいいといふのは賛成です。それじゃあ直ぐに成立します。実際最初はその位のつもりでおいて、直ぐに自由大学の名をつけておく方がよいと思ふ。僕が一つ持って、高倉輝君（「改造」に劇をかいた人、ロシア文学の専攻）が一講座持つ、これは学校のない連中だからよい。高倉君はもう承知して居りますから、それであと誰れかを休みの時に廻して三講座はもう大丈夫出来ます。さうして居るうちに彼れ此れ承知してくれる事と思ふ。

「じゃあそれで愈々やりませう。規定の様なものを直ぐに考へて、愚見を数日中にお届けしませう。」

次いで土田は、6月30日、「自由大学」趣意書の草案を作成して、次のような手紙とともに山越に送っている（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年6月30日、山越 1978：23-25）。

「ゆっくりとした気分で、趣意書風のものをかいて見ました。別封を見て下さい。これは現代式に、第何条でなく、自由の様式で書いて見ました。各条御参考に供します。大体こんな具合のものだったらどうですか。本当の成案が出来たら一度印刷前に見せて下さい。日本最初の試みだから趣意書など馬鹿にされないものにしたいですから。（中略）此れが全国に波及したらどんなに嬉しいかと存じて喜びにたへません。」

そして講師の依頼についても、趣意書の「印刷の出来た処で新聞にも発表し、その印刷と新聞と一緒にして講師のところへ送る」方が講師の依頼には得策であり、出講の「依頼状の見本も私がかいてお送りしませう。講師の名前や住処かいてお送りします」と書き添えて、山越の方から講師の依頼をするように指示している。講師の現状については、「恒藤と高倉と僕とだけは大丈夫だと思ひます。あとは同志社大学の教授によい人を物色しようと思ひます」と、述べ、「八月には千葉から越后へ行く途中、一寸上田へお立寄り出来ると思つて居たら、早大の講演に取られて、お目にかかれません。併し廿二日頃から南佐久へ参ります。その節お目にかかれませう。いろいろ打ち合せませう」と、書き送っている。土田が積極的に自由大学の実現に向けて動いていることが知られる。

土田の協力を取りつけた山越は、金井正と相談し、「これまでの哲学会の単純な運営では、賄いき

れないことを、予測して、独立した事務局の必要を認め、協力者を得ることにした（山越 1976：23-24）。そこで山越が意向を打診したのが、信濃黎明会で知り合い、蚕糸雑誌社の主筆をしていた猪坂直一であった。猪坂は信濃黎明会の宣伝部長、山越は修養部長を担当していた。猪坂「の意向を打診すべく、伊勢宮町にある社を訪ねた」ところ、「彼と彼の協力者の松前七五郎がいた。哲学会の経過を話し、今度その発展とも言うべき自由大学構想を説明し、経営の一員となってくれることを要請した。幸い松前も助言してくれたので猪坂も応諾してくれた」のである（山越 1976：24）。

その後山越は、金井と猪坂とは面識がなかったので、蚕糸雑誌社に猪坂を訪ねて、金井と猪坂を引き合わせ、そこで猪坂に自由大学の事務所を猪坂宅に置くことと専務理事を引き受けてもらうことの承諾を得た（山越 1978：25-26）⁽¹³⁾。

土田杏村が執筆した趣意書の草案は、山越が「金井、猪坂と協議の結果、趣意書は結構だから別に加除の必要なく」（山越 1976：24）、そのまま印刷に付され、21年7月、「信濃自由大学趣意書」（上田市立図書館所蔵）として一般に公開された。趣意書の内容は、次のようなものであった。

「 信濃自由大学趣意書

設立の趣意

学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受ける機会を得んがために、総合長期の講座を開き、主として文化学的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致しますが、従来の夏期講習等に於ける如く断片短期的の研究となる事無く統一連続的研究に努め、且つ開講時以外に於ける会員の自学自習の指導にも関与する事を務めます。

組 織

一、講座の種類

哲 学 哲学史 倫 理 学 美 学 社会学 心 理 学
宗教学 教育学 文学概論 法 学 経済学 社会政策

講座は此れを総合的とし、聴講は此れを完全に聴講する事によつて統一的に文化学的研究をなすを得る様に致しますが、場合によつてはの講座を選定して聴講する事をも許します。

二、開講の時期

聴講生の産業を顧慮して大体次の如く開講します。

十月、十一月、十二月、一月、二月、三月、四月

以上各月の十日以内を一講座の連続開講時期とし、その講義を翌年度に延長します。

三、自学自習

講座の開かれて居ない期間の聴講生の自学自習を尊重し、此れが指導に適當の方策を講じます。

四、講座の年限

一講座は三年乃至四年を以て終ることにします。

五、短期講習

長期連続の講座の外に、別に短期に数講座を並立した講習会を開く事もあります。

経 費

自由大学経営の経費は聴講料と及び寄附金を以て此れに充てます。

聴 講 生

講義を理解し得る各自の自信に信頼して、聴講生の資格に一切の制限を置かず、且つ男たると女たるとを問いません。単に申込を以て聴講生の資格を得ます。

役 員

- 一、講師 自由大学の趣旨に賛せられを諾せられた学者に講師たることを嘱託致します。
- 二、理事 自由大学経営に関する一切の事務を担当致します。
- 三、委員 自由大学経営に関する主要の事務を協議します。
- 四、顧問 自由大学の趣旨に賛せられ、その経営に声援を与へらるる諸士に顧問たることを依頼致します。

計 画

本年十月より開講し、同学年度中に少くも三乃至五講座を開講し、翌学年度より更にその数を増加する運びに致したと思ひます。

経費の一部を蓄積して、将来講師の自由に宿泊せらるべき宿舎を設け以て講師と聴講生との関係の密接を計り、更らに講義のための校舎をも設備するに至りたい予定です。

尚ほこの自由大学運動を全国に波及して、到る処にその設備を見、以て地方文化の程度を著しく向上せしめんが為めに、全国の青年と提携することを努めます。

大正十年七月 日

長野県上田市横町（猪坂直一方）

信濃自由大学事務所 』

趣意書はまず、「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受くる機会を得んが為めに、総合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と、設立の趣旨を述べ、講座の種類として「哲学、哲学史、倫理学、美学、社会学、心理学、宗教学、教育学、文学概論、法学、経済学、社会政策」の12講座をあげ、「講座は此れを総合的とし、聴講は此れを完全に聴講する事によつて、統一的に文化的研究をなすを得る様に致しますが、場合によつては、その講座を選定して聴講する事をも許します」と、述べている。また、開講の時期は、「聴講生の産業を顧慮」して、10月から4月にかけての農閑期とし、その「各月の十日以内を一講座の連続開講時期とし、その講義を翌年度に延長する」としている。聴講生の資格については、「講義を理解し得る各自の自信に信頼して、聴講生の資格に一切の制限を置かず、且つ男たると女たるとを問いません」とし、最後に、今後の計画として、「経費の一部を蓄積して、将来講師の自由に宿泊せらるべき宿舎を設け以て講師と聴講生との関係の密接を計り、更らに講義のための校舎をも設備するに至りたい」こと、「この自由大学運動を全国に波及して、到る処にその設備を見、以て地方文化の程度を著しく向上せしめんが為めに、全国の青年と提携すること」をあげている。

この趣意書が公開されたあと、山越を中心に自由大学の創設に向けて準備が進められていった。この頃の様子について、『芸術自由教育』第1巻第8号（1921年8月）の「自由教育協会消息」では次のように伝えている。

「山越君は体が弱つて居るのに、なかなかじつとしては居ない。村の同志と農事組合を作つたり、自由大学を計画したりして着々それを進めて居る、二つとも極めて順潮に捗つて居る様子だ。」

土田杏村から7月8日付の手紙で、「一生懸命にやませう。」「南佐久の方は二十一二十二日としました」と、南佐久での講演日程が8月20日から22日 となつことが知らされたことから（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年7月8日、山越 1978：26）、8月22日の夜に、金井、山越、猪坂の3人は、土田を上田市海野町の上村旅館に訪問した⁽¹⁴⁾。猪坂が土田に会つたのはこれが初めてである。猪坂の回想によれば、このとき土田は、「当時文部省が肝入りでやつてみた成人教育なるものの愚を指摘し、もつと系統的且つ組織的な民衆教育機関の必要と其の可能性を熱心に説いた、という（猪坂 1935：5）。協議の結果、自由大学の事務所を猪坂宅に置くこと、役員として、猪坂が専務理事、土田、金井、山越が理事となること、開講の日取りは10月1日を目標として諸準備を進めること、講

師の斡旋は土田がすることなどが正式に決められ（山越 1976：25）、ここに信濃自由大学が成立した。

上田・小県地域の青年たちが学習意欲にもえ自由大学の創造に意欲的であったのは、おそらく2つの理由があったと思われる。

その1つは、第一次世界大戦中の好況とそれにつづく経済情勢の激変という経済的な条件であった。この地域の農家にとっての主要産業である養蚕－製糸業には、1920年の戦後恐慌をさかいに、ゆきづまりの傾向があきらかになりつつあった。いまこの地域の繭価をみれば、3.75キログラムあたりの平均価格は、19年－12円36銭、20年－6円4銭、21年－7円49銭、22年－10円83銭、23年10円71銭、24年9円85銭、25年－11円73銭、26年－9円50銭であり、大戦中の好況はきえうせたのである（上田市史編さん委員会編 1970：402）。このような養蚕業の動向を、山越脩蔵も鋭敏に感じとっていたひとりであって、のちに、19年の「常規を逸した高景気」の反動として「社会不安はやがて深酷に現れるだろう」と考えた、と回想している（山越 1972a：57）。この「養蚕業をとりまく状況がきびしくなるにつれて、人びとの意識は、それだけつよく未来へのみちをさぐらざるをえなかった」（鹿野 1973：113）。青年たちが学習意欲にもえ、さまざまな思想の摂取に意欲的な姿勢をみせるようになったのは、そのためであった。

もう1つは、青年たちが高等教育を受ける機会を奪われていたことであった。この地域の農村青年のうち、中学校に進学した者は1920年代で、小学校卒業者の2%程度といわれ⁽¹⁵⁾、高等学校・大学へ進学した者はほとんどいなかった。自由大学に参加した青年たちの大部分は、比較的富裕な農家の長男であったが、かれらの多くは地域の小県蚕業学校をはじめ上田中学校・上田蚕糸専門学校へ進学していった。したがって、小学校卒業だけの青年たちと比較すれば恵まれてはいたが、それでも、卒業後は家業を継ぎ地域に定住しなければならず、高等学校・大学へ進学することはできなかったのである。山越脩蔵が自由大学を構想したのは、「田舎の農家に生れて、日常の農事に追れ、永い冬の長夜は火燵で茶話に終る人生を何とかしなければならぬ」（山越 2006：200）と思い、「文化全般に亘る学問を総合的に勉強できる機関を組織」し、「それが全国各地に波及したならば農村の人々や実業に就いてる人達も勉強の機会に恵まれるのではないか」と考えたからであったが（山越 1972b：42）、そこには、明確なカタチでは表現されていないけれども、当時の農村青年の置かれていた教育の現実を問題としつつ、民衆教育機関を創設していったことが知られる。

このように信濃自由大学の創設は、土田杏村と山越脩蔵・金井正との〈出会い〉の中から形成されていった。それは土田という知識人による一方的な主導性によるものではなく、金井・山越という農村青年との相互主体的な交流の結実として生まれたが（柳沢 1987：234）、それは上田・小県地域の農村青年たちがたちが、みずからの置かれている状況に主体的にかかりはじめ、みずからの学習の場と機会を求めつくりだしたことを意味していたのである。

3. 上田自由大学の学習運動の展開

(1) 第1期の状況

山越脩蔵と猪坂直一は、信濃自由大学の開講に向けて準備を進め、土田杏村の紹介をもとに講師に依頼状を送ったり、また、10月には「信濃自由大学開講に就いて」⁽¹⁶⁾を印刷し、聴講勧誘のため地域の小学校を訪ねて自由大学の説明を行ったりしていた。

9月になると、講師を依頼した三宅剛一、務台理作、矢野禾積、園頼三、世良寿男、三田村一郎ら

から返信が自由大学の事務所に届いた。

三宅剛一は、「何分学校が始めて来たばかりであるのと、近頃私の一身上に引続いて色々な事が起ったために大分長い間何も読んだり考へたりすることが出来なかつたこと等もあります何より今の私にハ他人に伝へたいと思ふだけのはっきりしたものが何もないのです」(信濃自由大学事務所宛三宅剛一の手紙、1921年9月14日)と、出講を断っている。

務台理作は、「小生目下の事情として公開の御話申すことわ御遠慮申たく」と、出講を断っているが、「心理学の方面」でよければ「適當なる人」に依頼してもよいとの返事を出し(信濃自由大学発起人宛務台理作の手紙、1921年9月15日)、自由大学の側でも務台に代わりの講師を依頼したと思われ、11月になって務台から「過日御依頼を承せりし貴学心理学の講師として文学士大脇義一君に交渉中に候ひしに近日全氏より快諾の旨確答有之候ひしにつき取敢へず御知らせ申上候」(自由大学事務所宛務台理作の手紙、1921年11月29日)と、大脇義一が承諾したことを伝えている。

矢野禾積(峰人)は、「今回御地に自由大学御設立の由誠に結構なる御企てとひたすら御成功の程祈居候」と、自由大学の設立をよろこびながらも、学校の授業と健康の関係で、「休暇ならでは到底出講の見込無之殊に一月は寒気の為健康上御地にハ参上致し難くまづ四月の上旬か或ハ夏期に臨時講演でも有之様ならば七月より九月半頃迄の間に於てのみ出講が能に御座候」(自由大学事務所宛矢野禾積の手紙、1921年9月15日)と、また、園頼三も、同志社大学の「講義は未熟なもの乍ら相応時間がとられて余裕はほとんどない」と、雑誌への原稿執筆が忙しいという理由で、出講を断っている(信濃自由大学事務所宛園頼三の手紙、1921年9月19日)。

世良寿男は、「自分を反省して見たとき自分は直ぐにこの仕事をば引受くる資格のないものであることを思う」「自分は学校を出てまだ年月も間がありません。殆ど目に見えるほどの何らの研究も実際やってゐないのです」(猪坂直一宛世良寿男の手紙、1921年9月19日)と、まだ研究が十分ではないとして断っている。

三田村一郎は、「今日学界はまだ一種の封建制度が□はれています。これは、民衆化の要求の盛な現時に於てハ是非共打破さる可きものであるとは予ねて考へて居りました事ですが、此の度御送附の自由大学趣旨書に接し、心よ里共鳴致した次第です」と、自由大学の趣旨に賛同したうえで、「出講の時期についてハ暫京都に於ける研学の都合上、十月、十一月、四月の中のどの月かに御願ひしたいと思ひますが如何ですか」(自由大学事務所宛三田村一郎の手紙、1921年9月15日)と、出講できる旨の返信をしているが、日程が合わなかつたのか、自由大学の講師にはなっていない。

これら返信の状況は金井正から成りゆきを案ずる土田杏村のもとに送られ、これをもとにして土田は、さらに新しく出講を依頼すべき講師の人選にかかった(上木 1968:95)。また、講義の会場をどこにするかで、なかなか決まらず苦勞した。猪坂は、次のように回想している(猪坂 1967:44)。

「わが自由大学には校舎も教室も無かつた。私は上田中学か蚕業学校の一室を借りようとその校長に頼んだがことわれ、市役所の片隅でもと思つて細川市長に会つて見たが駄目。けっきょく黎明会が役員会や懇談会にしばしば借りている市内伊勢宮の境内にある神職合議所を借りることとした。」

信濃自由大学の開講は当初、10月18日より上田蚕糸専門学校を会場に同志社大学教授・恒藤恭「法律哲学」を予定し新聞にも広告が出されていたが(『信濃毎日新聞』1921年10月9日;『長野新聞』1921年10月9日)、計画より約半月遅れて(17)、1921年11月1日、上田市横町の神職合議所を会場に、恒藤恭(18)の「法律哲学」をもって第1期第1回講座を開講した。

創設期の会場となつた神職合議所は、「広さ四十畳ばかりの大広間だが、畳はボロボロになって心が出て居り、建付の悪い戸口の間からは寒い風が吹き込んで来る」状態であり、また、机は近くの月窓寺、黒板は蚕種会社、暖炉は養蚕用のものを近所から借り集めたものであつた(猪坂 1935:5)。

神川村の堀込義雄は、山浦国久と一緒に月窓寺から4人掛けの椅子を運び、金井・山越から頼まれて会場準備を手伝ったという（堀込 2011：61）。

このように貧弱な施設のなかで、講義は始められたが、予定では、「一日法律学方法論、二日法律の本領、三日同上、四日法律生活の内面及構造、五日法律生活の文化及形態、六日同上、六日法律の理想」の日割りで講義をすることになっていた（『信濃毎日新聞』1921年10月30日）。講義に先立ち恒藤は、信濃自由大学開講の挨拶を土田杏村に依頼されて行った（山越 2006：199）。猪坂直一は開講の日のことを、次のように回想している（猪坂 1976：46）（19）。

「最初の講座であるからわれらは非常に緊張し、この若きプロフェッサーの講義を一語も聞き洩らすまいとした。その一夜の感激を私は今も忘れることはできない。講義の途中で恒藤氏は急に内容を哲学概論にきり変え、いわゆる新カント派哲学の講義に入った。学生の顔ぶれや質問ぶりをみて、まず基礎を与えねばならぬと思われたらしい。ところがこの講義がすばらしい。私はその頃哲学の勉強をやっていたが、恒藤氏の講義を聴くに及んで、今まで随分無駄な努力をしていたということが反省され、学問はこれでなければいけないと痛感した。そしてこれからの講座がもたらすものを想像して更けゆく夜路を心はずませて帰ったものだ。」

山越脩蔵は、恒藤の講義を次のように振り返っている（山越 2006：199）。

「恒藤先生の法律哲学は、意外に聴講者が多く、私どもも始めてのことであり第一講座の成功は、猪坂君をも喜ばせた。先生の講義の内容も初心者に懇切に法の基礎問題を、解明され日常法律などに興味のないものをも方の世界をもう一度さぐりたい欲望を涌かせた。真面目な先生の人柄は聴講者を、心服させた。」

自由大学の講義を終えて京都に帰った恒藤恭は、「過般御地に参りました節はいろいろ御世話様に相成りました。御かげ様でまことに愉快な一週間を送りました。（中略）はじめての事ではあり、準備も粗漏でまことにふつゝかの講義でしたが私自身は、皆さんの真摯なかつ熱心な御尽力の態度なり一般聴講生諸君の篤学なそして元気にみちた様子なりに接して大変愉快でした。あのむかしの塾のやうな感じのする神道講習所（注、神職合議所—引用者）のしんとしづまった空気の中に、電燈の光があかるくたのしさうに輝いた——あのアトモスフィアも、なつかしく思い出されます」と、自由大学の運営者たちに宛てて手紙を書き（信濃自由大学委員諸兄宛恒藤恭の手紙、1921年11月28日）、さらに「信濃自由大学聴講者諸君!!」と題する一文を書き送っている。それは、「只今心にうかんだまを、かきつけて」みたものであるが、その中でかれは、次のように講師としての感激を語っている（恒藤 1923：9-10）。

「私が初めてその建物の中にはいつたのは、十一月一日、開講の日の午後でしたが、がらんとした天井の下の、荒れ果てた畳の上に、聴講の方々があつまつて居られるのを見たとき、少し誇張して申しますと、一種悲壮な感にうたれたのでありました。それは多分、真理と自由とに向かつて熱烈な欲求をもつて居る人々と、それをとり巻いてある簡素な、うす汚ない建物の内部との対照が、その建物の中にはいつた瞬間に、私の心の眼に、はきりと映じた為めではなかつたらうかと、想像して見れば想像されます。

それは晝のあいだの事でありましたが、その日の夜から一週間のあいだ、私は毎晩その金文字のもり上つた額の下に立ちました。寒さにひきしまつた空気の中に、静けさがみち渡りねあかるくたのしげに輝く電燈の下に、聴講の方々が熱心のこもつた瞳をみひらいて、じつと聴講して下さるのを眺めながら、私は時間のうつるのを気付かないでしやべりました。そして規定の時間がつきると、きつと三四の人々とみちづれになつて話しながら宿までかへつたものでした。

今思ひ出してみると、神職合議所の建物の内部の光景が、そのよるよるの光景が、希望と光明にみちた会合のイメージとなつて、心にうかんで来ます。世の中には、殊に現在の社会には、外形が

華麗であり、宏大であつて、しかも内容が空疎であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあつて、われわれを失望させ、憤慨させる場合が尠くないのは、まことに残念なことと思ひます。それらみると、信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとつて生まれ出て、謙遜に、質実に、みづからの存在と生長とをはじめたといふことは、それにたづさはる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか。」

第2回講座は、12月1日から6日間、タカクラ・テル⁽²⁰⁾によって「文学論」の講義がおこなわれた。タカクラは、出講依頼に対して、次のように書き送っていた（信濃自由大学発起者宛高倉輝の手紙、1921年9月13日）。

「御引きうけは致しましたものの私の話は他の哲学や社会問題の話のやうに御参考になるまいと存じまして大変気にかかつて居る次第です 殊に仮りに『文学論』と題はつけましたもののは只今私が創作しようと思つている心持を偽らずに申し上げて見ようと思ひますので決して学術的に組織の立った話しではありませんのです 只だ此の心持をまとめるだけは骨を折つてまとめたつもりでありますどうか前以てその点を御含みを願ひ度いと存じます 只今私は非常に頭の中で苦しんで居りますのでその苦しみだけに何かの御参考に成るかと言ふやうな気持がするだけで有ります」 恒藤恭が執筆した「信濃自由大学聴講者諸君!!」は、タカクラの講義の前に金井正によって朗読されたが、そのなかで自由大学の使命を説くとともにタカクラを次のように紹介している（恒藤 1923：11-13）。

「私は、皆さんが、信州のために、あたらしく生まれるべき信州の文化のために、信濃自由大学の事業に対して、熱烈な同情と、辛抱づよい興味をおもちになり、この事業は、自由大学聴講者の共同の事業であるといふ自覚の下に、この事業が永続してゆき、次第々々にその内容を充実しつつ発展してゆくことに、努力なさることを切望いたします。それはとりもなほさず、日本のための、新しく生まるべき日本の文化のための努力であります。『改造』といふ言葉、『われわれの社会を改造せよ』といふ叫びは、誰れも誰れも聞きあきるほどきゝましたが、われわれ自身がわれわれ自身の人格を高め、人格の内容をゆたかにし、われわれ自身の精神的生活をうつくしくしてゆくことに努力しないとしたら、われわれの社会の改造が、果していつの日に行はわれるでありませうか？」

信濃自由大学はねそうしたわれわれの社会の改造に向つて、何等かの意味ある貢献をなさむとする使命をもつた団体だと思ひます。この意味ふかい事業の第二回の試みにおいて、講義を担当される高倉輝氏を、私の敬愛する友人として、皆さんに御紹介申上げることが光栄ともよろこびとも感じます。氏は京都大学英文科を卒業されたのち、創作に従事する傍ら、文学の研究をつゞけて居られます。創作の方面では、殊に劇に興味をもたれ、既に発表された「焰まつり」、「孔雀城」「切支丹ころび」の三篇の脚本は、いづれも情熱と生命の力とにみちた内容を、奔放な技巧によつて表現せられたものでありまして、われわれはそこに愛熱と、運命と、信仰との三つのものが、一つとなつて渦巻きくるふてあるところの人生のすがたをあらわす三部曲のうつくしい連続に会するのであります。研究の方面では最近の著書「心の劇場」において、その一端を洩らして居らるゝとほり、ロシア文学について深い造詣を有つて居られます。

氏の講演の題目は「創作家の心理」といふのだと承つてみますが、それについては氏みづからが、切実な体験をもつて居られることでもありまして、きつと興味ふかい講演わされることゝ信じます。皆さんが熱心に御聴講らむことを、遥かに希望いたします。」

聴講者は68名であつたが、女性も7、8名いて、その講義は聴講生を魅了したといわれる。猪坂直一は、次のように回想する（猪坂 1925b：16）。

「僕はその年の夏、『改造』で氏の戯曲『切支丹ころび』を読んだことがある。でその作物から受けた感じで氏の風貌をスッカリ想像してみた。ところが始めて停車場でお目にかかつた時、僕の想

像と余りな違ひ様に全く面喰らつてしまつたものである。僕は氏が痩せこけた腺病質らしい身体を、ハイカラな洋服に包んで、青白い沈鬱な顔で現れて来るだらうと思つてゐたのであるが、実はまるつきりそれと反対で、六尺近い堂堂たる軀、素的に血色のいい晴やかな顔、そしてザン切り頭に烏打帽といふ出でたちなのである。(中略)

しかし氏の講義を聴くに至つて、僕は矢ッ張り『切支丹ころび』の作者であると云ふ気がした。氏の講義は講義といふよりは創作である。一言一句、僕等に何か深い暗示を与えねば已まない。そして随分難解な講義ではあるが、僕等は知らず識らずズルズルと引き込まれてしまふのである。

講義中氏は盛んにヨタを飛ばす、僕なんかその雑談の方ばかりを憶えて肝腎の講義の方は殆どわすれてしまつた。講義後も氏は毎夜定まつたやうに十人許りの会員と共に火鉢を囲んで雑談やトランプに夜を更かしたものである。この講義には上田市の文芸芸妓と評判の高いHと云ふ夫人が俣でやつて来たのを始め、夫人が七八人見えた。」

タカクラの好評を土田もよろこび、山越脩蔵に宛てて、次のように書き送った(山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年12月12日、山越 1978:33)。

「高倉の講義を熱心にきいてくれたのは有りがたい。実は多少心配して居たのだ。少し論理型でなく、直覚型の男だから、信州には向かぬぢゃあないかと思つてた。併しあの男の無邪気な、正直なところを是非買ってやうて貰ひたいと思つて居たのだ。大好評で何よりうれしい。高倉も悦んで、手紙をよこした。」

タカクラも、郷里の高知県七郷村に帰ると、山越に宛てて、次のような手紙を書いている(山越修造宛高倉輝の手紙、[1921年12月]29日)。

「一昨日帰り着きました。京都で土田に逢いまして大いに話しに花が咲きました。御病氣も好く成りましたか。私も東京であれからとふとふ三日ほど熱を出して寝て了ひました。信州から帰ると又特別に温かです。が寒い信州で大いに土田と二人で恋しがった事でした。」

また、別の手紙では、恒藤恭と同じように自由大学の会員宛の手紙を書きかけて断念したことを次のように記している(山越修造宛高倉輝の手紙、1922年2月11日)。

「小生も信州へ参り度くて溜まりません 自由大学の会員諸君にもお目にかかり度くて溜まらぬ気がします 実は恒藤君の真似をして幾度も手紙を書きかけたので有りますが 何うも白白しい気がしましてやめて了ひました どうか宜しくお礼を申し上げて下さい」

タカクラの「明るい磊落な人柄と博学」は聴講者の好評をばくし、やがてタカクラは「自由大学随一の人気講師」(猪坂 1967:48)となる。そしてタカクラは、自由大学への出講をきっかけに信州の農村青年たちと結びつくようになるのである。

1922年1月22日に開講した第3回講座は、はじめ土田杏村の出講が予定されていたが都合で行けなくなり(21)、代わりに東洋大学教授の出隆が出講した。かれは、「哲学史」を講じたが、このときのことを次のように回想している(出 1963:194-195)。

「雪はそう降ってはいなかったが、宿の風呂場から部屋にかえるまでの廊下でタオルがいてついて棒のようになっていたのを覚えている。それほど寒いお正月のなかごろだった。(中略)場所は上田町内の或るお宮の社務所の広間で、長い腰掛を机代りにして、会員は三、四十人だったか、近村から自転車でくる人だけでなく、汽車の上りと、下りの発着時間の都合がわるく、講義時間も始めと終りがそのために制限された。しかし、それでも毎晩三時間あまりはみっちり講義をすることができたし、またその講義の前後にも、社務所に泊りこみの熱心な青年もあって、いろいろ話し合ったがみんな自分の気持ちをむきだしに話す真剣で実直な人々だった。」

山越脩蔵は、厳寒の季節に、先生は「二十日から七日間演壇に立たれ、直立不動の姿勢で左手に講義の原稿を持たれ、右手は浅くポケットに差し入れて微動だにない姿勢で、原稿を読み進められた。

文章の明快さは聴講生を魅了して時間のたつのを忘れさせた。殊にソクラテスの解説などは、一言一言にソクラテスの像が彫り進められてゆくようなあざやかな手法であったことが忘れられない」と回想し（山越 1982：376）、猪坂直一は、次のように回想している（猪坂 1925c：18-19）。

「出氏の講義は、『カント以前』といふ訳で、ギリシャ哲学ターレスよりカントまでの自然哲学時代を概観した。二三時間宛七日間の講義で、これだけ聴かうとするのは、たとへ概観にしてもどうかと思つたが、実際に於て自由大学の講義は意外に進む。僕等は兎に角古代及び中世哲学の一通りを理解する事が出来た。（中略）

聴講者三十八名、最後まで殆んど欠席したものはないといふ熱心さであつた。」

また、タカクラは、出について、次のように書いている（タカクラ 1963：2-3）。

「第三回に、翌年一九二三年一月イデくん^マにきてもらって、『西洋哲学史』の講義を開いた。この講義は、ツネト^マくんの講義と結びついて、哲学を系統的につかむために、大きな役わりをした。

こうして、わたしはイデくんと友人になり、仕事のうえでも共通の要素をもつようになった。

自由大学の講師をえらぶのに、わたしたちは苦労した。当時、進歩的な学者がそう多くはなかったし、とくに官学にはひじょうに少なかった。そのうえ、進歩的な思想をもっている、こういう講師となるには、その地位からいって、そうとうの勇気のいる時代だった。イデくんはそういうごく少ない学者のひとりだった。」

第4回講座は2月14日から始まり、土田杏村が「哲学概論」を講義した。猪坂直一は回想する。「寒気なほ厳しい二月中旬の夜、僕等は毎夜震へながら氏の講義を聞いた。講義は岩波哲学叢書中の『哲学概論』（インデルバンド著・宮本和吉氏訳）を教科書として使ひ、主としてその『認識論』を講義して頂いたのである。しかし哲学を講じながら、教育、文芸、社会問題と、いろいろな方面に批評を加へて行かれるのを、僕等は頗る愉快に聴いたものである」（猪坂：1925c、p.19）。

聴講者を惹きつけてはなさい、準備の行き届いた講義であつた様子が知られる。ところが土田は、4日目の講義を終えて宿舎に帰ると急に発熱し、このため講義は途中で打ち切られた。

猪坂は、土田の発熱の原因について、「氏には近村へ講演などに出て頂いたりして、寒い時に大分御苦労を願つたので、僕等はスッカリ恐縮してしまつた」と書いている（猪坂：1925c、p.19）。山越脩蔵によれば、浦里村青年会の宮下周の依頼で、昼間に文化講演会が開かれ、土田が2時間余り講演をしていたことから（山越 1973：75；山越1978：39）、その寒さと疲労が重なつたためと思われる(22)。

土田は、このときのことを、京都に戻ってから、次のように書いている（土田 1922b：55）。

「どうも信州といふところは僕には鬼門らしく、此処へ行くと何か知ら病気になるのです。昨年夏行つた帰りもさうでしたが、今度は自由大学の方の用事、決してさうした事の無い様にと思つて居ると、五日目からひどく流感にゆられて了ひました。何でも其処での流感の大流行中に行つたのですから、まるで飛んで火に入る夏の虫といった憐れさでした。併しまあどうやら肉体制度も大瓦解に終らないで帰つて来ました。」

土田の自由大学への出講は、この年8月の魚沼夏季大学（のち魚沼自由大学）での「教育の基礎としての哲学」と10月の信濃自由大学第2期第1回講座の「哲学概論」と3回のみで、その後は咽喉結核のため出講することはかなわなかつた。

3月26日からの第5回講座は、恒藤恭からの依頼で出講した京都帝国大学助手・世良寿男の「倫理学」であつた(23)。講義は当初7日間予定され、当時の筆記ノートによれば、「第一 序説、第二 倫理学の対象及方法、第三 倫理的評価の本質、第四 自由意志の問題、第五 道徳的原理（1）道徳的原理の形式（道徳的法則の性質）（2）道徳的原理の内容（道徳的理想）、第六 人生観の問題」の順で講義が行われることになっていた。第1日目の「第一序論」では「倫理学の基礎としての先験哲

学の発展の概観」が講義され、筆記ノートにはたとえば

「先験的哲学（カントの）…批評哲学

・真理の意義

外界の实在と内界との一致…模写説

但し外界の实在と一致せざる事多し

事実の問題 にあらずして

権利の問題

（価値の問題）なり

普遍妥当性…事実としてみとめられる事にあらず

権利として認められねばならぬ。」

と、記されている（細田延一郎「筆記帳 自由大学講義二号」）。

ところが、講義は講師の都合で2日間で打ち切きられ、翌年度に続講することで、閉講になった。世良が途中で講義を打ち切ることになったのは、金井正の報告によれば、「講義をして二日に至った所、自分の研究がまだ不充分で即ち自由といふことに付いてとんと行き詰ってしまって如何とも進むことの出来ぬ事を発見したから」であったという。聴講者の細田延一郎⁽²⁴⁾は、その報告を聞いての感想を「我々は大変張合が脱けたがこれ亦如何ともすることが出来ぬ。否実にこんな真面目な学者らしい先生の態度に非常に感動された。毎日々々出鱈目の生活をして居る自分等に強い強い痛戟を加へられたやうな気がした」と、筆記ノートに記している（細田延一郎「筆記帳 自由大学講義二号」）。このため当時上田に来ていて講義を傍聴していた中田邦造に哲学の講義を依頼し、残りの日程をうめた（山越 1973：76-77）⁽²⁵⁾。

次いで第6回講座は、4月2日から大脇義一が「心理学」を担当した。かれは、このときのことを、次のように回想している（大脇 1968：12-13）。

「古色蒼然とした大広間に、ところどころ火鉢が置かれていて、見たところ三十歳代から四十歳代の人々が大部分の聴講者四十名くらい端座して居られる。中には堂々たるひげを蓄えた人や相当の高齢者も見える。そこへ、若年の童顔、短軀の私が講壇に現れたのであるから、意外に思はれた人が少なくなかったであろうと思う。

私は心理学概論の土台として、ドイツのアウグスト・メッサーの『心理学』を選んだ。これにヴェントの『心理学要義』をも加味しながら、出来る限り初心者にも理解し易いように平明に話していた。（中略）

講義が終ってから活発な質問が起り、普通の大学では見られない熱心な研究意欲に少なからず驚いた。二、三の聴講生は夜、宿舎にまで訪ねて来て討論された。」

細田延一郎の筆記ノートによれば、第1日目は「序説」として「心理学略史」の講義で、「1. 精神感」「2. 宗教的信仰」「3. 生活現象の心理的研究」について講義をし、デカルトやスピノザについても触れていることが知られる（細田延一郎「筆記帳 自由大学講義二号」）。

大脇の講義は、聴講者から活発な質問を引き出す講義で、好評だったことをうかがわせる授業であった。

なお、第1期の開講期間中の2月12日の夜、山本鼎の提案で、農民美術練習所と信濃自由大学の共催による「芸術の日」が上田劇場で開かれている。自由大学側から猪坂直一が、農民美術側から山本鼎が、それぞれ挨拶を兼ねて事業の宣伝をしたあと、画家中川一政が収集したレコードを借りてのレコード音楽会、劇作家大田黒元雄の寸劇「かみそり」が行われた。この「芸術の日」の宣伝のために山本が、カップ版のピエロのポスターを製作したが、張り出されていたポスターは1枚もなく持ち去られ、会場は満員の盛況だったという（山越 1972b：45）⁽²⁶⁾。

こうして1921年11月から始まった第1期の講座は終わった。

(2) 第2期の状況

1922年10月からの第2期講座の開講にあたって、信濃自由大学事務所は「信濃自由大学第二期開講ニ就テ」(1922年)と題する次のような文書を配布している。

「本大学第二期ノ講座ヲコノ十月カラ開クコトニナリマシタ。各講義ノ系統的ナコトト連続長期ニ亘ルコトトニ於テ、他ニ類例ノ少ナイコノ企図ガ、滞リナク第一期ヲ終ツテ、第二期ニ入ル事ノ出来ルノハ、実ニ喜バシイコトデアリマス。

本大学ハ只今ノ処、各講師ノ学問殖民事業ニ対スル熱意ト、聴講者ノ向学心トノ他ニ、何ノ基礎ヲモツテ居リマセン。然シ、私等ハコノニツガ、設備ノ不完全ヲ償フホドノカアル本質的ナノモノデアルコトヲ知リマシタ。又、コノ本質的ナ基礎ニ立ツテ邁進スルコトノ出来ル処ニ、信州人ノ光荣アル特色ガ存スルノダト考ヘマス。」

そして第2期の講座として、10月は土田杏村「哲学概論」、11月は恒藤恭「法律哲学」、12月は出隆「哲学史」、1月以降は、山口正太郎「経済学」、矢野禾積「文学論」、今中次麿「政治学」、高田保馬「社会学」などを予定していることを明らかにしている。会場は上田市鍛冶町本陽寺と書かれているが、実際は唐澤正平⁽²⁷⁾の尽力で、第1回講座の土田杏村「哲学概論」は神職合議所であったが、第2回講座以降は県蚕業取締所上田支所が会場となった。

1922年10月からの第2期講座の状況について、その講義内容や様子が知られるものを示すと、次のようになる。

・第2期第2回講座 恒藤恭「法律哲学」(1922年11月1日～5日)

恒藤恭は、前年の講義の経験から、聴講者の理解をはかるためには教科書が必要だと考え、フリードリヒ・ホルムスの著書(Friedrich Harms, Begriff, Formen und Grundlegung der Rechtsphilosophie, Leipzig, 1889)を翻訳し、恒藤恭訳『ホルムス法律哲学概論』(大村書店、1922年)を使用して講義をおこなっている。かれは、「訳者序」の中で「私は、昨年の秋長野県上田市に設立された信濃自由大学で法律哲学の講義をすることを引き受けた。昨年は自分のこさへた原稿によつて話してみたが、その際の経験からかんがへて、今年は、約一週間の短い講義の期間をなるべく有効に利用するために、何か適当の教科書を使つてみやうと思ひ立つた。かれこれ思案した後、右のホルムスの著書は、かやうな目的にふさはしいものであると考へたので、その翻訳を企てた次第である」と記している。猪坂直一は、恒藤が教科書まで用意してきたことについて、「氏は眇たる自由大学の講義にこんなにもまで真摯な態度で臨まれるのかと思つてわれらは全く感激したものである」と、回想している(猪坂 1967: 47)。

恒藤は、このときのことを、次のように回想している(恒藤 1954: 25)。

「ある機会から土田杏村君と知り合いになり、いくたびか新町頭の同君の宅をおとずれた。(中略)同君の肝いりで開催された長野県上田の『自由大学』には東京や京都からいろいろの人々が講師として招かれた。私もその一人として十一月上旬に上田に行って幾日のあいだか滞在した。私は法学の講義を依頼されたが、何分にもみじかい期間のことなので、聴講の人たち便宜を考えて、ホルムスというベルリン大学の教授であつた人の遺著『法哲学の概念、諸形態及び基礎づけ』(一八八九年)を急いで翻訳し、大村書店をわずらわして『法哲学概論』という書名で急いで出版してもらい、自由大学での講義に間に合わせる事が出来た。聴講の人たちは中々熱心にきいてくれて、張り合いがあつた。幹事とか世話人とかに該当する人たちは、山本鼎氏の指導をうけて農民美術の運動をもやつた人たちであつて、上田の郊外にある、その運動の本拠のカッテージ風の建物をおとずれたこともあつた。講義は夜間だつたので、ある日杵掛に行き、浅間山の山麓のさびしい温泉宿のよう

な家に在住していた高倉輝君をたずね、うつくしく黄ばんだ落葉松の林や、すすきの穂が風にわれ動いている高原を同君と散歩したことなどが思い出される。」

恒藤は、聴講者に法律哲学の初心者が多い自由大学の講義にふさわしいテキストを考え、自ら翻訳して教科書を出版して用意した。恒藤の自由大学にかけた高い志と情熱がどれほど強かったかが知られる。

・第2期第3回講座 タカクラ・テル「文学論」(1922年12月5日～9日)

タカクラ・テルの「文学論」の講義は、中沢鎌太⁽²⁸⁾の講義ノートによれば、「文学トハ何ゾヤ 文学トハ如何ニシヤ生キルヤト云フコト 少ナクトモ私に取りテ 私ハ之レガ為メニ迷ッテ居ル 為メニ先人ノ創作ヲ読ミ又私自身モ創作シテ見ル 周囲ノ人ヲ見ルニ私ナドトハ生キ方ヲ異ニシテゐル様デアル 総テ現在スナヲニ受け入レテ 生キルト云フコトニ 何等ノハンモンヲ記シテ居ナイ 其レガ悪イトカ云フノデナイ 善悪ノ問題デハナイ 差別ノ問題デアル 武者小路サンノ如キハソウ云フ行キ方ヲシタ方ダ 武者氏ハ死デ行クコトハガイセンスルコトダト云ウタ 生キテ居ル間ハ其準備ヲシテキルノダト云フテキル 此ノ如キ人ハ其目標ヲ立テト安ジテキルコトガ出来ル 西田サン等モ一ノ目標ヲ立テ温順シク其レヲ受け入レモナイガテ 何ノ不安ヲ感ジナイ人デアル 何ノ目標モナイガ仕事を分ツ様ニスナヲニ受けテキルモノモアル 此種ノ人ヲ宗教家ナドハ意義ナキ生活ヲ送ッテキルト云フガ 併シ何レを善悪ノ問題デハナクシテ之レハ差別ノ問題丈ケデアル」というタカクラの言葉から始まり、ロシア語のアルハベツト、そしてゴーゴリの生涯と作品を紹介しているのが知られる。その中で、ゴーゴリの代表作である「外套」については「露文学最初ノ価値アル作品」として、「プ氏(注、プーシキンー引用者)『外套』ヲ読ミ、ゴーゴリ汝ハ人生ヲ洞察シタト云ヘリ」と紹介している。また、「死せる人々」(注、「死せる魂」のことー引用者)第一巻については、「世間が激賞シタ」とし、当時の文壇も、スラブ国粹主義の一派は「今迄知ラザル純露人ヲ見た」という点から、西欧主義の一派は「純芸術ノ立場ヨリ賞サンシタ」こと、しかし、ゴーゴリが『死せる人々』の「価値を極力否定」するようになると、『書簡集』の出版とともに、「農奴問題ノサテツヲ恐レタ」ペーリンスキーらから「批難」され、ゴーゴリを「苦シメタ」ことを紹介している(中沢鎌太「自由大学筆記其一」)。タカクラは、京大嘱託の時代に「ゴオゴリ評伝(一)～(六)」(『芸文』第9年第9号～第11年第2号、1918年2月～20年2月)を発表しているが、この論稿を踏まえながら講義を組み立てたことが知られる⁽²⁹⁾。

殿城郵便局に勤めていた青木猪一郎⁽³⁰⁾は、小学校教員の六川静治から勧められて、初めて自由大学を受講したが、タカクラの講義について、次のように日記に記している。

「午後三時吹雪の中を上田の自由大学へ、(中略)寒い事寒い事、鼻水許り出て困る。六川先生が受付にみせられて大満員だった。浦里の渡辺局長、堀込校長、細田延一郎氏等来聴中だった。一寸面映い気がされた。五尺八寸の高倉氏、一寸武井さんに似た人だった。ロシア文学のゴーゴリ氏から始めるとの事最初ロシア語でアルハベツトを覚えて貰ひたいとの事、英語のアルハベツトさへ知らぬ俺は直ぐ後ろに六川先生がゐられるので筆記するのさへ何だか浅越で弱っちまった。」(「青木猪一郎日記」1922年12月5日条、天田・山野 1975: 39-40)

「自由大学、もう皆集まってゐた。直ぐ始まった。愈々ゴーゴリの生ひ立ちに入つて講義が始まった。そして風刺文学の話まで出て六時四十分と云ふに終つて帰途。」(同前12月6日条、天田・山野 1975: 40)

「自由大学、ゴーゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かった。始めての日のあの向きでは何んな事になるのかと打案じられたのに、八時半帰宅。」(同前12月7日条、天田・山野 1975: 40)。

「自由大学愈々終了。十銭会費の茶話会。大きなパンを配布されたのに、つましい女性と相對したのには恥づかしくて大閉口だった。」(同前12月9日条、天田・山野 1975: 40)。

日記に出てくる渡辺局長とは浦里村郵便局長の渡辺豊貞、堀込校長とは豊殿小学校長の堀籠静雄のことと考えられる（長島 2022：31-32）。青木は、風邪を引きながらもタカクラの講義を聴き、「とても面白かった」との感想を記している。中沢鎌太も「自由大学へ参る、停電の為に一寸都合が悪かった。頭痛も話が面白かったものだから忘れ勝ちであった。」（「中沢鎌太日記」1922年12月5日条、天田・山野 1975：42）と、タカクラの講義が興味深い内容であったことがうかがわれる。また、講義終了後、茶話会が開かれ、講師のタカクラを囲んで講師・聴講者同士が交流する機会が持たれたことが知られる。

なお、タカクラは、12月3日の午後、一般人を対象とした自由大学主催の文学講演を上田中学校で行っている（『長野新聞』1922年11月28日）。

・第2期第4回講座 出隆「哲学史」（1923年2月5日～9日）

出隆の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、カントの哲学を中心としたもので、純粹理性批判に関することが語られ、ベーコンやデカルト、スピノザらに触れたあと、「先験感性論究明」「空間論」などが語られたことが記されている。中沢の日記には「昼食の後松井医へ参り診断して貰った。帰り『自由大学』へ参る。蚕業取締所である。出隆先生の講義であった。中々六ヶ敷かった。余り分らなかった。特別講義もあった（カントの生立）、帰宅は九時頃であった。」とあり（「中沢鎌太日記」1923年2月5日条、天田・山野 1975：43）、講義内容は中沢にとっては難解であったことが知られる。講義ではテキストとして波多野精一の『西洋哲学史要』（大日本図書、1901年）が用いられた（「信濃自由大学第二期開講ニ就テ」1922年）。中沢の2月8日・9日の日記には「『哲学史要』を読む」とある（「中沢鎌太日記」1923年2月8日・2月9日条、天田・山野 1975：43）。また、出による特別講義（『信濃自由大学の趣旨及内容』によれば「カントに就て」）も行われたことが知られる。

・第2期第5回講座 山口正太郎「経済学」（1923年3月9日～13日）

大阪高等商業学校教授の山口正太郎は、このときが初めての自由大学への出講であった。「経済学原理」というテーマで講義をしたが、中沢鎌太の筆記ノートによれば、「経済トハ経国済民ト云ふ支那ノ言より来てキル 英語のEconomyヨリ来ル」との言葉から始まり、経済学原理は交換論、生産論、分配論の3つから成立するとし、交換論では、「経済学の中心問題として物ノ値ハドウして決まるか」を問い、貨幣数量説などを紹介し、「物の価格とは」を問い、効用価値説と労働価値説を説明し、さらに貨幣と価値についてクナップと左右田喜一郎の説を紹介している。また、マルクスの剰余価値説（注、中沢の筆記ノートでは「余剰価値説」となっている－引用者）を紹介し、唯物弁証法や唯物史観についても説明している。次に生産論に入り、生産には自然（土地）、労働、資本の3つの要素を要するとして、それぞれの説明を加え、分配論では、地代、賃銀、利子についてそれぞれ説明を加えている。最後に山口の著書として『純理経済学の諸問題』（岩波書店、1921年）が紹介されている（中沢鎌太「自由大学筆記」其一及び其二）。

タカクラ・テルは、のちに山口の講義について、「上田自由大学の第一回の講義の『法律哲学』で、恒藤恭は唯物弁証法の説明をした。第五回の講義の『経済学』で、山口正太郎は剰余価値説の説明をした。どちらも会員の新しい目を開いた点があった。それまで、そういう正式の説明はだれも聞いたことがなかったからだ」（タカクラ 1978：47）と書いているが、剰余価値説について説明していたことは中沢の筆記ノートから確認できる。また、タカクラは、「殊に面白いことは、自由大学一週間の講義が大学一年間分の講義よりも遥かに多い分量をもつていたことだ。経済学の山口正太郎君などは、大阪商大の一年分の講義が五日目に終つてしまつて、あわてて宿屋で翌日の準備おするという有様であった」（高倉 1937：56）と書いているが、このエピソードはおそらくこのときのこと、4日目で大阪高等商業での1年間分の講義内容が終わってしまい、あわてて宿屋で翌日の準備をしたものと思われる。なお、当時山口は、大阪高等商業学校教授・京都帝国大学講師で、山口が大阪商科大

学助教授になるのが1928年4月、同教授になるのは31年3月である（故山口正太郎教授記念事業実行委員編 1935：年譜）。

・第2期第6回講座 佐野勝也「宗教学」（1923年4月11日～15日）

佐野勝也の「宗教学」は、佐野の『宗教学概論』（ロゴス社、1923年）を指定テキストにして講義が進められている。中沢鎌太の筆記ノートによれば、講義では、第一章「宗教研究の方法」を「序論」とし、「宗教学は宗教哲学の出発点である。宗教は何か 先づ其対象を定めてかゝる。超人間的なもの（聖なる意識） 国がないも宗教はある」という言葉から始めている。そしてアウグスティヌス、ジェムス、ベルグソン、ヒュームらの研究を紹介し、「私の主張は『史的・心理的研究』即ち歴史と心理学との二方面より研究し様と云ふのである」と述べ、第二章「宗教的表象」、第三章「宗教的態度」、第四章「入道的宗教」の3章は「史的・心理的研究をしたもの即ち縦の研究」で、第五章「宗教の社会的考察」、第六章「宗教の心理学的考察」の2章は「横の研究をしたもの」と説明している。講義の第二章を「未開文化の宗教」とし、宗教起源の問題、Australia^マ土人の宗教、靈魂（表象）、占と犠牲について解説し、筆記ノートには「アオストリア^マ土人ニは靈魂の感念がない」と記されている。講義の第三章は「文化宗教」で、神の觀念の発達、道德思想と宗教、科学と宗教について解説している（中沢鎌太「自由大学筆記」其二）。

この佐野の講義を受講した青木猪一郎は、講義の内容を次のように日記に記している。

「今日から始まる上田の自由大学へ行く。（中略）馬車で下る。丁度六時になる所だった。お高い聴講料参円と『宗教学概論』二円六十銭を奮発。帝大講師と云ふ佐野勝也氏の講義。早々横文字を書かれるのには大閉口。併しお話はよく判った。そして可也面白かった。」（「青木猪一郎日記」1923年4月11日条、天田・山野 1975：40-41）。

「佐野勝也氏の宗教論、今晚は中央オーストラリア^マ土人の宗教心に就ての講義だった。」（同前1923年4月12日条、天田・山野 1975：41）。

講義の内容に触れているのはこの2日分だけであるが、「面白かった」との感想があり、講義に対する満足度は高かったことが知られる。

（3）第3期の状況

1923年10月からの第3期講座の開講直前、9月1日に相模湾北西部を震源地とする激しい地震が関東地方を襲った。東京で震度6、マグニチュード7.9と記録されている。関東大震災である。この地震は、深刻な被害をもたらし、内務省社会局の調査（『大正大震災誌』上）によれば、被害は東京・横浜両市と神奈川県下に集中し、この3地域はほぼ壊滅状態になったことが知られる。震災による罹災者の総数は、1府6県で約340万人、そのうち死者9万1344人、行方不明1万3275人を数え、また、東京・横浜両市での被害の大半は全焼で、その焼失家屋数は両市の世帯数の62.5%にのぼり、神奈川県下では全壊・半壊など地震そのものによる被害が多かった（山野 1994：201-203）。

山越脩蔵と猪坂直一は、東京が壊滅状態だという情報が入ったことから、東京・横浜に住む山本鼎と出隆・佐野勝也の安否を確認するため、9月3日の夜行列車で東京に向かい、東京・横浜では徒歩で3人の所に行って皆、元気であることを確かめている⁽³¹⁾。

そして第3期講座の開講を前に、『信濃自由大学の趣旨及内容』（1923年10月）を刊行し、自由大学の理念を明らかにするとともに、これまでの2年間の実績と新たに信濃自由大学会を組織したことを公表した。このパンフレットには、土田杏村の「自由大学に就て」、恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君!!」、第1期・第2期の講座一覧、第2期の聴講者職業調べ、信濃自由大学会の組織及び内容が掲載されている。信濃自由大学会は、「信濃自由大学ノ維持及ヒ発展ヲ図ルヲ目的」とし、会員は自由大学の講座を連続聴講することができ、年会費12円とすること、会員外は1講座3円の聴講料を

徴収することにしたが、この会員組織にしたのは経営の安定を図るためであった。信濃自由大学役員である専任理事には猪坂直一、理事には山越脩蔵、金井正、六川静治、土田杏村が選ばれている(32)。

第3期の講座は1924年1月から開講の予定としていたが、11月から開講している。第3期の講座の状況について、その講義内容や様子が知られるものを示すと、次のようになる。

・第3期第1回講座 中田邦造「哲学概論」(1923年11月5日～10日)

中田邦造は、1923年2月に卒業論文「意志論」を提出して京都帝国大学文学部哲学科を卒業し、大学院に進学していた(33)。中田の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、最初に「哲学概論ハ哲学ノ本質ヲ明スルコト」との言葉から始まり、主として「認識論」についての講義で、「認識論ハ真理ハアルト云フノハ存在スルデナク働くクコトデアル」とし、「1. 真理ノ概念 イ模写説(論、主義ト書イテモ全ジ) ロ自明説 ハ批判説 ニ実用主義及人性主義 ホ新实在論 2. 認識ノ根源 イ経験主義(后天主教) ロ合理主義(先天主教) ハ神秘主義 3. 認識ノ妥当性(模写説ノ立論ニ於ケル) イ实在論 ロ懷疑論 ハ理想主義」の順にそれぞれ解説したことが知られる。

中沢鎌太は、中田の講義を聴講した第1日目の日記に「晩は蚕業取締所の自由大学の講義を聞きに参る。中田さんの哲学概論であった。六時より九時まで随分六ヶ敷講義であった」と記しており(「中沢鎌太日記」1923年11月5日条、天田・山野 1975:44)、中沢にとっては難解な講義であったことが知られる。

・第3期第2回講座 山口正太郎「経済思想史」(1923年11月12日～16日)

山口正太郎の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、ギリシアのプラトン、アリストテレスの経済思想から入り、アダム・スミスの生涯と『国富論』、マルサスの『人口論』、リカードの地代論、ベンサムやジェームズ・ミル、ジョン・スチュアート・ミルの功利主義などイギリス古典経済学について説明したのち、「社会主義思想史ニ入ル前ニ社会ニ存スル幾多ノ社会主義ニ就テ述ベン」と前置きして、バクスターやクロボトキンのアナキズム、サンジカリズム、アメリカのI. W. W(世界産業労働組合)、ジョージ・バーナード・ショーらのフェビアン社会主義、バートランド・ラッセルの『社会改造ノ原理』などについて解説し、講義を終えている(中沢鎌太筆記ノート「自由大学筆記」其二及び其三)。その中で山口は、アダム・スミスの『国富論』について、『道德感情論』(注、筆記ノートでは『道德情操論』となっている—引用者)は「其要ハ同情心ナケレバナラヌ 之ガ基デアルト」としていたのに対し、「十八年后ノ富国論ニ於テハ自分ノコトハ自分ガ一番ヨク知ル故ニ人ハ放ッテ置ケバ彼レハ彼レノ利益ヲ計ル 個人富メバ遂ニ国家富ムト」としているとし、ここには「仏学者影響」もあるが、「彼レノ二重人格ヲ疑フ(道德情操論デハ個人ヲ 富国論デハ国家ヲ説ク)」と批評しているのが知られる(同前其二)。

この山口の講義にたいする聴講者からの反応は知られていない。青木猪一郎は、自由大学から開講の通知は来たものの哲学や経済は難解だし、3円の聴講料が大変だとして参加していない。日記には「自由大学から又通知がある。恐縮千万だが俺には何うも哲学経済なんど云っても難解だらうし月々参円と云ふ大枚の聴講料が仲々大袈裟だ」と記している(「青木猪一郎日記」1923年11月10日条、天田・山野 1975:41)。また、中沢鎌太も「自由大学へ行く。今晚より山口先生の『経済思想史』始まる」(「中沢鎌太日記」1923年11月12日条、天田・山野 1975:45)と、自由大学に参加したことは記しているが、感想等は記されていない。

・第3期第3回講座 タカクラ・テル「文学論」(1923年12月1日～5日)

タカクラは、この自由大学の講義のために事前に研究し準備をしていたことが知られ、土田杏村に宛てた手紙の中で、「いま自由大学のドストイェフスキイのノオトを作ってる この機会に作品全部日本語で読み返してすっかり伝記を直して了ったので大変だった しかし大きな勉強になった 貧乏

な時にドストイェフスキイは薬りだ」と書いている（土田杏村宛高倉輝の手紙、1923年11月28日）。

タカクラの講義のテーマは「ドストイェフスキイの研究」で、中沢鎌太の筆記ノートによれば、ドストエフスキーを「知らなければ近代の文学が分らぬ」という言葉で始まり、ドストエフスキーの波乱に富んだ生涯を跡づけながら、それぞれの時期の作品を解説したものであった。処女作である『貧しき人びと』（注、タカクラは「不幸なる人々」と紹介している－引用者）について、タカクラは、「官吏の老ヂェウウスキン」と「ワアレンカと云ふお針女」の「手紙のやりとりの形式となつてゐる」とし、「二人とも愛してゐる 二人とも世間より迫害されてゐる 二人とも貧しい ワアレンカは此生活にアキ田舎の青年の結婚を申込み 其愛してゐぬものと結婚し チェウウシキンを捨てた形になる」とあらすじを紹介し、この作品には「ゴオゴリの『外套』の影響殊に多し」としつつもドストエフスキーは「内面のもを引出した丈で決してゴウゴリの模倣でない 此ニ優位あり 此作品の中ニは×（注、ドストエフスキーのこと－引用者）自身のパッションを感じらる」と批評し、「ピエ氏」（注、ベルンスキーのこと－引用者）が雑誌『アチエチエストエンヌイア、ザピイスキイ』（祖国記）の1846年2月号に「長文の批評を書き激賞した」ことを紹介している。また、『罪と罰』については、「ラスコリニコフと云ふ大学生が因却^{いんごう}な巧利貸の婆さんを殺す場面ニ始まる」とし、この殺人について、「之れを殺すは善行だと」いわれているとし、「此障害物取り除くものが人類の実滅者であるつまり英雄である」が、この「英雄となると云ふの [が]彼ノ殺人の動機となつてゐる」と説明し、「併し奥底の誘惑は『異常』である、異常な之の力」である、と付け加えている。そしてタカクラは、『罪と罰』の特色として人間の描写力をあげ、「一言も用ゐてゐないのに其人間の動作或光景の描写がマサしく我等前に顕ルコトである」、ドストエフスキーの「作品ニおけるものは説明でなくて描写である 更ニ描写でなくて暗示である 同時に人間の脈を打つてゐるの我々の前に出して来る」とし、その描写力は「ゴオゴリの現実主義を受けとり彼れ一流のパッションを力にして出来たのに掛かつてゐる」と批評している（中沢鎌太「自由大学筆記」其四）。

このタカクラの講義に対する聴講者の感想等は発見されていない。中沢も日記には「晩は自由大学へ参る。高倉さんの文学論でドストライスキイ論であつた」と記しているにすぎない（「中沢鎌太日記」1923年12月1日条、天田・山野 1975：45）。

なお、上田自由大学でのタカクラ・テルの講義風景の写真が残されているが（口絵写真を参照）、この写真は「ドストイェフスキイの研究」をテーマに講義をした、このときのものと考えられる⁽³⁴⁾。
・第3期第4回講座 出隆「哲学史」（1924年3月22日～26日）

出隆の講義については、遠藤恭介が筆記ノートに45ページにわたって克明に筆記したものが残っている。その遠藤のノートによれば、「Sokratesニツイテ」「Sokratesノ生涯」「Platonノ生涯」の3章に分けた講義であつた。出は、ソクラテスの裁判と刑死について、アニュトスがソクラテスを弾劾したのは、「私怨等ニヨリナセルモノニアラズ」。ソクラテスの「個人ダケヲ先ニシテ国体ヲ認メズ国ノ認メル山ノ上ノ神ヲミトメズ個人ノ神ノミヲミトメタ故ニ処刑セラレタリ」と述べ、さらに「此ヲ相対的ノ立場ヨリ見レバ彼ノ死ハ永遠デアルガ絶対的ノ立場カラ神ノ永遠ノ立場ニタツタ場合ニハ見ノ永遠ノオキテニ従ハネバナラナイ。故ニ一時代ノ代表者ハ彼ヲコロシタガ、永遠ノ立場ヨリ見レバ彼ハ神ノ掟ニ従ツテ生キタルモノナリ。彼ハスベテノ理想ヲ反ケ内ナル神（ダイモニア）ノ為死セリ。彼ニトツテハ死ハ何物デモナカッタ。ソシテコノ最后ノ刺戟ハ弟子達ヲウゴカシ彼ヲ永遠ノモノニシタ」と解説している（遠藤恭介「出講師 哲学史」）。

遠藤恭介は当時、旧制水戸高校の学生であつたが、帰省中に自由大学に受講する機会に恵まれた。当時を回想して、次のように書いている（遠藤 1968：24）。

「この間書庫を整理していたら埃にまみれて古い一冊のノートが出てきた。手にとってみると『出講師 哲学史 於信濃自由大学』⁽³⁵⁾とその表に記されてあつた。

出さんのこの講座は大正十三年三月二十二日から二十六日の五日間開かれたもので当時水戸高校文科の学生だった私は三年になった春休みに帰省して受講する幸運に恵まれたのであった。

講義は毎夕六、三〇―九、〇〇で私は五日間を休まずノートすることができた。

場所は駅に近い県蚕業取締所の古びた建物の中の四十畳位の広い日本間であった。はだか電燈の灯ったうすぐらい室で細長い低い机に端座して二時間半の講義にひざの痛くなるのを覚えたが皆熱心にきき入っていた。それは正しく寺小屋風景であった。

私は、そのとききいたソクラテスに興味をもち岩波文庫の『ソクラテスの弁明』や『哲学以前』を買って読んだので三年になっての哲学概論に大いに役立った。」

また、別の回想では、次のように回想している（遠藤 1978：159）。

「裸電球のぶらさがっている暗い室で講師の出さんは、熱心にかんで含めるような講義をされました。弓矢のたとえなんかの話がありまして、ソクラテスの『クリトンの弁明』が主体だったと思うのですが。

講義が終わったとき、いちばん前の席の着物を着た中年の人が、表紙に『プラトン』と書かれた分厚いドイツ語の原書を手にして、質問していたのにはどぎもを抜かれました。」

この講義でも、聴講者は熱心に聞き入り、質問もしていたことが知られる。

・第3期第6回講座 佐野勝也「宗教哲学」（1924年4月1日～5日）

佐野の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、「『宗教哲学』（宗教は何であるべきか）である。此宗教を研究するニは宗教現象学から暗示を受けなければならぬ。私の意見を述べずに過去の人の宗教に就て語らん 主として『カントの宗教観』を述べんと思ふ 今年のカントの誕生二百年で記念祭が行はるゝ」と述べて授業を進め、ルターの宗教改革やスピノザの理神論、理性の権威と聖書の権威の両立を証明しようとしたロックやヒュームの懐疑主義など理神論論争を解説し、カントの宗教観を論じた講義であったことが知られる（中沢鎌太「自由大学筆記」其四及び其五）。

中沢の日記には、「晩は自由大学へ参る。佐野先生の宗教哲学であった。九時前に終り帰る」（「中沢鎌太日記」1924年4月1日条）、「晩は自由大学へ参る。ねむくて困った。疲れたのだ」（同前4月4日条、天田・山野 1975：46）との記述はあるが、講義の感想等の記述はない。

(4) 第4期の状況

1924年10月からの第4期の開講を前に、自由大学の運営者たちは「願れば設立以来、自由大学は多くの困難と闘つて来た。殊に経済的に何らの基礎をも有しない自由大学は、此点に最も苦しめられた」と述べ、「我等は当地方の青年諸氏が、本大学の会員となつて、一は永久に本大学を支持し、一は各自の修養に資せられむ事を、第四期の開講に当り切に希望する次第である」と訴えている（「上田自由大学一班―第四期―」1924年）。聴講者の減少が自由大学の経営に困難をもたらしていることから、改めて会員となることを呼びかけたのである。なお、第4期からの会場は上田市役所となったが、これは、自由大学の熱心な聴講者の1人であった勝俣英吉郎が、1924年7月に上田市長となり、便宜をはかったからである。

・第4期第1回講座 新明正道「社会学」（1924年10月13日～17日）

関西学院文学部教授の新明正道は、上田自由大学に出講した経緯とそのときのことを、次のように回想している（新明 1975：2-3）。

「当時、まだ専門部に関西学院とって高等商業部と文学部とがあつて、文学部の方の教師をしていたわけですが、関西にいたという関係で、土田さんの方からこういうものがあるので行ったらどうかという手紙を頂いて、行くことになったと思います。（中略）当時大阪商大の教授をしていた山口正太郎君というのがおられて、この人なんかと向こうへ行きまして会っていました。（中略）」

富田碎花さんの芦屋のうちにいったところが、そこへ芦屋にいた山口君なんか来ていて、ここで何か話し合っただけ知り合っただけ、たしか自由大学というものがあって講義へ行ってということを知り合っただけ、何か土田さんに私などもいるというようなことを話したのがきっかけかと思います。

で、手紙が来て一応承諾して、まず上田の方へ行ったわけです。猪坂 [直一]さんなどにお会いしまして、山越 [脩蔵]さんなども健在ですが、何か一番印象に残ったのは、当時すでにタカクラ [テル]さんが上田の別所温泉に陣取ってございまして、宿を別所のタカクラさんのとまっておられた温泉でしたか、あるいはちょっと近所でしたか、そこいらに宿屋をとりまして、講義は何か社会学をやったようになってます。内容は覚えておりませんが、講義のさいはタカクラさんも一緒に聴かれたようです。帰ってくると、飯を食ってから、タカクラさんとはいろんな話を聞いて、接触をふかめて帰ったんです。当時のタカクラさんはロシア語専攻で、創作も小説を出してございまして、話も、仕事から文学が好きなので、そんなことばかり宿で話していたように思いま(す)

新明の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、「序編」としての社会学の講義が行われ、最初に「社会学ハ其起源第十八世紀コントComteニ始マル 社会学をソシオロジー Sociologie コント始めて此言葉を使ふ」と記され、コントが社会学の創始者であること、過去においては社会をどのように見るかで、有機的、物理的、心理的の3社会学派に分類されてきたこと、社会の本質をめぐっては心的相互作用説と文化的傾向説の2つがあること、社会と外界との関係をめぐっては文化的外界と自然的外界、自然的外界には物理的、有機的、心理的外界があり、それら外界と社会との関係を考える必要があること、国家と社会との関係、全体社会と基本社会との関係を考える必要があることなどを説き、それぞれについて解説を加えている。その中でたとえば国家と全体社会との関係について、「国家と全体社会とは同一のもの」ではなく「国家は全体社会の中の社会で部分的社会である、国家は一部の社会で総体的社会でない 国家は教会又は学校等の社会と同輩である」と解説し、国家と基本社会との関係については、「国家と基本社会の区別を明ニして置かねば種となる社会を説く上ニ都合が悪い」としたうえで、「国家をステートと云ひ基本社会をソサエターと云ふ(英語) 基本社会はセメント形ニ箱様なものでなく、延びることの出来る弾力性ニ富んだものだ」と説明している(中沢鎌太「自由大学筆記」其五)。

聴講者の講義に対する感想等は発見されていないが、馬場直次郎は筆記ノートに新明正道の印象を「若々しい雰囲気の中に健康味を与え緊張した気分を一杯に包んで講義される先生である」と記している(馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」)。中沢鎌太の日記は「今晚より自由大学へ社会学の講演があり参る」など参加したことだけが記されている(「中沢鎌太日記」1924年10月13日条、天田・山野 1975: 46)。

・第4期第2回講座 今中次磨「政治学(国家論)」(1924年11月3日~7日)

当時、今中次磨は同志社大学教授であった。今中の講義は、馬場直次郎の筆記ノートによれば、『政治学(国家論)』(上巻、内外出版、1924年)を中心にし、政治学構成論、国家本質論及び国家目的論と議会制度論を論じたものであった(馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」)。

馬場直次郎は塩尻村で蚕種業を営んでいたが、今中の講義を受講し、その風貌とともに人柄のにじみ出た閉講の際の挨拶を次のように書き記している(同前)。

「前から伺えば学者らしく、後から伺えば先生らしい方である。それほどお顔には研究味が見えスタイルには好感の若々しさがある。肥大とは云い得ないまでも外人を凌ぐやうな長軀の持ち主である。

”私は話が下手であります。お聞き苦しかったことでしょうかにも不係、始終を一貫して御静聴下さったことは感謝にたえないところです。殊に私の一番嬉しいのは私が学校におけると同じ自由を

与えられ同一程度の講義をしたにも係はず御諒解下さったご様子を見出したことであります。”
最後に先生はこういわれて名残の別辞をされた。」

聴講者が熱心に講義を聞き、理解をしている様子に、講師も感謝し感激していることが知られる。

前野良は、今中について、「ひとりの知識人として社会の底辺と民衆のなかに身をよせること、きびしい方法にもとづく学問を通じて民衆・社会との連携を求めること、それは、その後の学究としての先生に一貫してつらぬかれていた」と述べている（前野 1983：60-61）。

・第4期第3回講座 金子大栄「仏教概論」（1924年11月21日～25日）

大谷大学教授の金子大栄は、当時43歳で、新進の学者とはいえないが、土田杏村は新潟の八海自由大学の渡辺泰亮に宛てた手紙の中で、「金子君は新進ではないが仏教界の唯一の僕の敬意を払っている哲人だ」と高く評価しており（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年6月26日、佐藤 1981：89）、上田の猪坂直一にも講師に推薦したと思われる。

金子の講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、「仏ニ対スル私の態度」について「学ぶは問ふこと、我れ自身が問題」としつつ、「仏教其物を自分と離して見て行かねばならぬ」と自答するところから始めている。始めに「大小二乗」を扱い、「経部」「律部」「論部」などの解説ではとくに「経部」について「阿含」に時間を割いて解説している。次いで「十二因縁」や「三法印」について解説し、「人生の否定」について言及して「人生に対して厳シクの^レ体度を取る^{コト}」、ここに「仏教の面目がある」とし、「無我仏教の中心として人生を否定して涅槃を願ふ^レ処ニ^レ仏教の本質がある」と説明している。また、「個人と一切人との関係」について「個人は全人類を代表するもの」で「自覚個人を通して全人類の自覚をするのである」と述べ、「自己に自覚することが一切の人の運命を担ふこと知ったとすれば、茲ニ於て之れを一切の人ニ語らざるを得ない 一切の人ニ知らしめなければ自分又悟つと云ふてゐられない 之れ菩薩心である」と解説している。さらに苦諦・集諦・滅諦・道諦の「四聖諦」、や「欲」「集」「業」、「涅槃」「八正道」「施」などについて論じていることが知られる（中沢鎌太「自由大学筆記」其五）。

金子の講義は、大乘仏教・小乗仏教のことから十二因縁（十二縁起）、四聖諦、八正道など仏教の基本的な理解を深める講義であったことが知られるが、聴講者の感想等は残されていない。

・第4期第4回講座 タカクラ・テル「文学論」（1924年12月10日～14日）

このタカクラ・テルの「文学論」は、上田市長となった勝俣英吉郎の提唱で始まった上田市民大学との合同主催の講座であった。講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、前年の「ドストエフスキイの研究」の続きで、『罪と罰』以降のドストエフスキイの生涯と作品を解説した講義であった。『罪と罰』が「広く読まれ」、「思ひ掛けない金が入った」ことから賭博と借金生活となり、そのために『賭博者』は「無理に書せられたる^レ処の書物」だとし、ドイツに行き賭博に負けたときの「経験を書いたもので自伝向き^レ処」がある作品だと紹介している。『白痴』は極貧の生活とてんかんの発作に悩まされたゼノアで書かれた作品で、「てんかんの発作の前後の模様」や「死刑宣告の人が助かった時の心持」が書かれていて「自伝的の分子がある」とし、姪のソフィアに送った書面にあるように、「人間の中で尤も美しく完全なもの姿を書く^レ為めニ^レ筆を取った」ことと「性格の完全の露西亜人を書こうとしたことが至る^レ処ニ^レ見えてゐる」とし、この「作品は彼れの自伝ではないが理想的の自伝である」と解説している。『永遠の夫』について、「トルソツキイは唯夫である時ニのミ救はれる人、それが『永遠の夫』である」という意味だとし、「男であることによって妻の夫ニ対する愛情が起って来る」、この意味においてこの作品ではトルソツキイの「心理状態がよく書かれてゐる」述べ、タカクラは、ドストエフスキイの「短篇の中で一番優れてゐる作品だ」と評価している。最後に『悪霊』を取り上げ、ドストエフスキイの「傑作の一つ」と紹介し、主題は「無神論ニ憑れたと云ふよりは論理ニ憑れたと云ふべきだ」とし、「インターナショナルの運動ニ加フテ此運動の^レ為めニは何物も犠牲にする」

と解説している。ドストエフスキーの生涯最後の作品である『カラマーゾフの兄弟』については、内容には触れておらず、筆記ノートには「1968年の末より一生の長篇として左の創作に二取りかかった。始めは無神論と云ひ、次で或る犯罪人の一生 之れが後の『カラマアゾフ兄弟』である」と記されているにすぎない（中沢鎌太「自由大学筆記」其五）。

このタカクラの講義に対する感想等は残されておらず、中沢の日記にも「晩は自由大学へ参る。終わった。私は清太の為に講演終るや直ぐに帰った」と、聴講した事実が書かれているだけである（「中沢鎌太日記」1924年12月14日条、天田・山野 1975：46）。

・第4期第5回講座 波多野鼎「社会思想史」（1925年3月21日～25日）

同志社大学教授の波多野鼎は、上田での講義の前に、1925年3月15日から19日まで伊那自由大学で「社会思想史」の講義をしており、飯田での講義を終えたその足で、上田に来たことが知られる。

上田での講義も、飯田での講義と同じものを講義したと考えられ、波多野鼎は、横田憲治に宛てた手紙の中で飯田での講義に先立ち、「講義目次」と「社会思想史略年表」を送っている（横田憲治宛波多野鼎の手紙、1925年2月21日、山野編 1973：40-41）。「講義目次」は散逸しているが、「社会思想史略年表」にはアダム・スミス、マルサス、オーエン、フーリエ、サン・シモン、プルードン、マルクス、カーライル、エンゲルス、J.S.ミル、ラスキン、ラッサール、ベルンシュタインらの名前が記されている。手紙では、講義は「今年限りで終るのではないと思つてあるので、各思想についてやゝ詳細にやる計画を立てたので、右のやうになった次第です」と書かれており、5日間ですべてを終わらせる計画ではなかったことが推測され、アダム・スミスの自由主義からオーオンの空想的社会主義あたりまでを取り上げたものと思われる。

波多野は、上田自由大学に出講したときにタカクラ・テルを訪れたことを、「高倉輝氏の寓居に訪問し、いろいろのお話を聞いた。（中略）青年の私から見れば『大人』の風格であった」と回想しているが、講義のことは触れていない（波多野 1968：14）。中沢鎌太も日記には「晩は自由大学へ参る。波多野鼎氏の近世社会思想史の講義である」と事実だけを記し、感想等の記述はない（「中沢鎌太日記」1925年3月21日条、天田・山野 1975：46-47）。

・第4期第6回講座 佐竹哲雄「哲学概論」（1925年3月26日～30日）

佐竹哲雄は当時、第八高等学校教授であった。上田自由大学での講義のことを次のように回想している（佐竹 1968：18-19）。

「大正十四年の春休みに、上田の自由大学での五回にわたる講義であった。毎日夕方別所温泉の宿から電車で上田の教室まで通って、一時間半か二時間くらい講義したように思う。

講義の題目ははつきり記憶していないが、認識論の一部、科学の分類に関するものであった。そのころ私は新カント派のリッケルトの『認識の対象』や『哲学大系』や『自然科学的認識の諸限界』や『文化科学と自然科学』などに関心を有つて研究していた。また、ディルタイの世界観哲学に基づく自然科学と精神科学との区分にも心を惹かれていた。かような私の研究状況から、リッケルトの自然科学と文化科学の分類原理とディルタイの自然科学と精神科学との分類原理との比較を念頭におきながら、分類の基盤を究明し、それを通して科学的認識の全領域を体系的に展望しようとして期待していた。上田の講義はこの線に沿うて行われたのであるが、予期の通りには進行せず、結論に到着しないまま打切らざるをえなかったように思う。」

佐竹の講義は中沢鎌太にとっては難解だったと思われ、日記には「晩は自由大学へ参る。六ヶ敷やら疲労やらで講義が分らない」（「中沢鎌太日記」1925年3月27日条）、「晩は自由大学へ行く。身体少々疲労の為め睡気を催した。頭痛したのは風邪の気味あるのか」（同前3月29日条、天田・山野 1975：47）と記している。

この佐竹の講義で第4期の講座は終了した。

(5) 第5期の状況

・第5期第1回講座 新明正道「社会学」(1925年11月1日～5日)

新明正道の講義内容は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、最終日の講義のみが残されており、社会過程に関するものであったことが知られる。「集団の中ニは集団的特別の過程が現はれる 過程の大体の形を知るために」と、「(一) 集団の集成の過程」「(二) 文化的過程」「(三) 建設的過程」「(四) 破壊的過程」というL.ウィーゼの4つの分け方を紹介している。たとえば(一)の過程は、「行為や性質を同一化する過程である」、(二)は、「支配、服従の関係は上下の関係ニ傾てゐるが之れは文化的過程ニ属する 階級と云ふたもの階級の形成も文化的の意義を持ったもので文化的過程に属する」とし、この「二つの過程の並立してゐるのは従来認められてゐる 之れを認めた人はスポンサーである」と述べ、この「二つにより社会は単純より複雑のものニなる」と解説している。また、ジンメルが「社会は形式である」と唱導したことを紹介し、「社会は他の行為の内容的なるニ対して形式的だと云ふのである 株式会社を社会的ニ見る時は其経済的内容を見ず其形式のミを見る」。そして、このような社会学を「現在の社会学は特殊的社会学と呼ぶである」と説明している。

この新明の講義を聴講した中沢鎌太は、日記に、初日は「晩は自由大学へ参る。頭痛して何も分らなかった。風邪でもあり又胃も悪かったのだ」(「中沢鎌太日記」1925年11月1日条)と、頭痛もあり講義が理解できなかつたのが知られる。2日目は頭痛が治らず自由大学を休んでいる。ところが、4日目の日記には、「晩は自由大学へ参った。昨晚も今晚も面白かつた。一昨晚行かなかつたのを残念ニ思った。初めての晩も頭痛の爲めニ分なかつたのを残念ニ思うふ」(同前11月4日条、天田・山野 1975: 47)と記しており、講義内容はわからないものの、知的好奇心を駆りたてる講義であつたことがうかがわれる。

・第5期第2回講座 タカクラ・テル「文学論(仏蘭西文学)」(1925年12月1日～5日)

タカクラ・テルの講義は、中沢鎌太の筆記ノートによれば、タカクラは「シャルル・ボードレルを中心として近代仏文学を語る」と、講義のテーマを述べたあと、「日本人ニ詩が分らぬ。故ニ詩の形式よりボードレルを中心の仏の文学の変遷を述べる」と、前置きをして講義を始めている。フランスでは、浪漫主義(ロマンチズム)、次いで象徴主義(シンボリズム)の運動が起こる前は、形式を重視する古典主義(クラシック)が中心であつた。ユーゴーは浪漫派と古典派の戦に古典派を倒し、浪漫派が「盛んになるにつれて、作者の感情、主観が尊重せられ、芸術至上主義の運動が起こつた」。タカクラは、フランス文学の変遷を述べたあと、「仏の文学の特色は暗示である 仏の自然派の文学ニは陰影がある 仏の文学では文字と文字の間を読ませる、仏の文学者の誇つてゐる処である」とし、「其急先鋒がボードレルである」と語り、その後は、ボードレルの生涯とその作品について解説していく講義を行っている。パリのリセでの学生時代、ボードレルは「孤独」であつたとし、「家族の中ニゐても友達の周囲ニ取り巻れてゐても、就中永久に孤独に運命付けられてある」が、「その孤独の感情は非常に強い快樂の気持であつた」と、解説している。義父は実業家になることを望んでいたが、その意に背き、放浪の旅に出て詩を創作するとともに、18歳の彼はダンディズムに進んだ。タカクラは、ダンディズムについて、「彼れの一生を貫いた」とし、それは「洒落よりよい意味のダンデ(ズ)ムで、凡俗ニ対して超俗で、凡俗を下に見て更ニ深き高き生涯を求め様とする傾向を云ふ」と説明している。両親の勧めたカルカッタ行きも途中で帰国し、亡父の遺産を散財しながら詩作をし、「アシシュ(印度の麻より取るマ酔剤)」(注、ハシシ、ハシッシュのことー引用者)を愛するようになり、「彼れのダンデズムは遂に病的となつた」という。1848年の二月革命に参加をしたが、アメリカのエドガー・アラン・ポーの作品を読んで、再び詩や小説を書きはじめ、ポーの作品を仏訳して

発表する。そして、「1855年に両世界評論に悪の華の中ニある処の18篇を発表せられ、1857年に単行本となって現れた作品は軽罪裁判所ニ呼れて即刻三百法の罰金ニ処せられ、不道德とワイセツの角ニより六篇を取らるゝことゝなった 1861年 悪の華の二篇が出た 1868年 作者が死んだ后先ニ切り取られた六篇が加いられた」と述べたあと、タカクラは、『悪の華』について、「一々が生命があり 花束が集められた様な詩集である」と紹介し、『悪の華』に収められた詩を読み説明していく。たとえば、「(仮面) ル・マスク」を読んだあと、「近代的の文学ニ現はれてゐる表現がボ氏ニよりて代表せられたものである。彼れの病的は避けることの出来ぬ病的である。悪の花は彼のウメキ声で之れ亦近代人のウメキ声である」と説明している。ベルギーで発作を起こして倒れ、1867年に亡くなったことを述べたあと、タカクラは、ボードレーンについて、次のように語って4日目の講義を終えている。

「結局 永久に孤独であった人で 唯地上の一人のミ知る処の生活を知り 唯一人のミ知った表現法ニよりて表現した人

有ゆる芸術は皆彼れより出てみると云ふてよい 近代の芸術の礎はボ氏よって築かれたものと云ふてよい」(中沢鎌太「自由大学筆記」其七)

このタカクラの講義に対する聴講者の感想等は残されていない。中沢の日記にも4日間、「晩は自由大学へ参る」と聴講した事実が記されているだけである(「中沢鎌太日記」1925年12月1日条~4日条、天田・山野 1975:48)。

・第5期第6回講座 松沢兼人「社会政策」(1926年3月22日~26日)

講師の松沢兼人⁽³⁶⁾は、中学時代を上田で過ごしており、当時は関西学院教授であった。上田で講義をすることになった経緯と講義内容について、次のように回想している(松沢 1982:29)。

「新明 [正道]君から頼まれて、行ってくれ、ということで、ちょうど上田は旧制中学四年間おりましたから、久し振りで行けてうれしいと思って、行ったんだろうと思います。社会政策をやったということで、社会政策は私の専門ですから、話をするのはもちろんたくさんあると思いますけれども、社会政策といえば、近代産業革命からこっちのことで、ドイツの社会政策学会が生まれたのも普仏戦争の頃じゃないかと思しますので、その頃からやはり一方で産業があり、そういうところで革命にならないようにドイツの学者たちが考えたのがドイツ社会政策学会だと思ひます。ですから、そういうものを上田で話をして、どれだけ身近に社会政策というものを考えられるかどうか、私は、意識してということではありませんけれども、(中略)セツルメントみたいなことをお話したと思ひます。」

松沢は、東京帝国大学の学生時代、新人会に入り、吉野作造とも親しくしていたが、1920年、東京日日新聞社で、学生に各地の失業状態を調査させて、それを記事で、子どものクラブ活動指導、図書館の開設、ピクニック、合唱、体育、宗教講話などから法律身の上相にして新聞に掲載するという企画があり、吉野の推薦で、早坂二郎と一緒に神戸の三菱・川崎の両造船所を中心に調査したり、大学卒業の21年4月からは大阪市市民館に就職し、天六といわれる細民街談、内職の斡旋、就職の世話にいたるまでのソーシャル・セツルメント事業を行っている(松沢 1964:39-45)。自由大学の講義ではドイツの社会政策とともに自身の経験も話されたものと思われる。

猪坂直一は、「松沢兼人先生の社会政策の講座は開講されましたが、氏がその頃研究しておられたセツルメントを主題として三日間か四日間でしたのです」としているが(筆者宛猪坂直一の手紙、1972年10月5日、山野 1980:3)、講義の感想等は残されていない。

この松沢兼人の講義で、第5期の講座は終了した。そして、このあと2年間、上田自由大学は中断することになる。

(第1表) 上田自由大学講座一覧

学期	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場	備考
1	1921.11. 1	7日	恒 藤 恭	法律哲学	56名	上田市横町神職合議所	A A A
	1921.12. 1	6日	タカクラ・テル	文学論	68名	上田市横町神職合議所	
	1922. 1.22	7日	出 隆	哲学史	38名	上田市横町神職合議所	
	1922. 2.14	4日	土 田 杏 村	哲学概論	58名	上田市横町神職合議所	
	1922. 3.26	2日	世 良 寿 男	倫理学	35名	上田市横町神職合議所	
	1922. 3.29	4日	中 田 邦 造	西田博士の哲学の研究に就て		上田市横町神職合議所 (世良寿男の代替)	
	1922. 4. 2	5日	大 脇 義 一	心理学	31名	上田市横町神職合議所	
2	1922.10.14	5日	土 田 杏 村	哲学概論	44名	上田市横町神職合議所	B B BC C
	1922.11. 1	5日	恒 藤 恭	法律哲学	47名	県蚕業取締所上田支所	
	1922.12. 3	1日	タカクラ・テル	文学講演		上田中学校(公開講演)	
	1922.12. 5	5日	タカクラ・テル	文学論	63名	県蚕業取締所上田支所	
	1923. 2. 5	5日	出 隆	哲学史	50名	県蚕業取締所上田支所	
	1923. 2. 5	5日	出 隆	カントに就て		県蚕業取締所上田支所 (特別講義)	
	1923. 3. 9	5日	山 口 正太郎	経済学	34名	県蚕業取締所上田支所	
1923. 4.11	5日	佐 野 勝 也	宗教学	34名	県蚕業取締所上田支所		
3	1923.11. 5	6日	中 田 邦 造	哲学概論		県蚕業取締所上田支所	C C D E EH EF
	1923.11.12	5日	山 口 正太郎	経済思想史		県蚕業取締所上田支所	
	1923.12. 1	5日	タカクラ・テル	文学論		県蚕業取締所上田支所	
	1924. 3.22	5日	出 隆	哲学史		県蚕業取締所上田支所	
	1924. 3.27	5日	世 良 寿 男	倫理学			
	1924. 4. 1	5日	佐 野 勝 也	宗教哲学			
4	1924.10.13	5日	新 明 正 道	社会学(概論)	21名	上田市役所	F I F I F F
	1924.11. 3	5日	今 中 次 磨	政治学(国家論)	30名	上田市役所	
	1924.11.21	5日	金 子 大 栄	仏教概論		上田市役所	
	1924.12.10	5日	タカクラ・テル	文学論		上田市役所 (上田市民大学と共催)	
	1925. 3.21	5日	波多野 鼎	社会思想史		上田市役所	
1925. 3.26	5日	佐 竹 哲 雄	哲学概論		上田市役所		
5	1925.11. 1	5日	新 明 正 道	社会学		上田市役所	G G
	1925.12. 1	5日	タカクラ・テル	仏蘭西文学			
	1926. 1.		谷 川 徹 三	哲学史			
	1926. 2.		中 田 邦 造	哲学(西田哲学)			
	1926. 3.		金 子 大 栄	仏教概論			
	1926. 3.22	5日	松 沢 兼 人	社会政策			
再建 1	1928. 3.14	3日	タカクラ・テル	日本文学研究	60名	上田図書館	G
	1928.11.19	3日	三 木 清	経済学に於ける哲学的基礎	25名	上田市海野町公会堂	
再建 2	1929.12. 6	4日	タカクラ・テル	日本文学研究	28名	上田市海野町公会堂	G G
	1930. 1.24	3日	安 田 徳太郎	精神分析学	44名	上田市海野町公会堂	

備考；筆記ノート

A：細田延一郎「筆記帳 自由大学講義二号」 B：中沢鎌太「自由大学筆記 其一」 C：中沢鎌太「自由大学筆記 其二」 D：中沢鎌太「自由大学筆記 其三」 E：中沢鎌太「自由大学筆記 其四」 F：中沢鎌太「自由大学筆記 其五」 G：中沢鎌太「自由大学筆記 其七」 H：遠藤恭介「出講師 哲学史」 I：馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」

(6) 講師と聴講者

上田自由大学の講義内容がどのようなものであったのか、講師の回想や聴講者の筆記ノート、回想などをもとに明らかにしてきた。

見てきたように上田自由大学では、農閑期を利用し、1講座3円の聴講料を徴収して、1講座平均5日間、1日平均約3時間の講義をおこなっていた。講座を系統別にみると、30講座中、哲学・文学・宗教学などの人文科学系が73%、政治学・経済学・社会学などの社会科学系が23%、心理学など自然科学系が3%で、人文科学系が中心の講座が組まれていた。講師は、土田杏村、タカクラ・テルを除くと、恒藤恭、佐竹哲雄、出隆、中田邦造、佐野勝也、新明正道、今中次麿、山口正太郎ら大学等での新進気鋭の研究者が多く、前半は土田、後半はタカクラが主として講師の斡旋を行ったこともあり、京都や東京から上田へ出講したことが知られる。

上田自由大学の講座一覧を示せば第1表のようになる(34講座中のうち筆記ノートが残されているのは20講座)。自由大学5日間ないし7日間の講義は大学1年間の講義に相当したといわれ、すでに紹介しているが、第2期第5回講座に出講した山口正太郎は、「大阪商大の一年分の講義が五日目に終つてしまつて、あわてて翌日の講義の準備おするとゆう有様であつた」というエピソードも残っている(高倉 1937:56)。これについてタカクラ・テルは、「現在の大学の講義とゆうものがいかにだらしないものであるかとゆう何よりの証拠でもあるが、同時に、単に義務的にやるのではなく、熱情お以てやる講義がいかに実質的な能率おあげる事が出来るものであるかとゆう実例およく示している」と述べている(高倉 1937:56)。

講義内容はどの講師も大学での講義と同様なものを講義していたと考えられており、現存する筆記ノートによれば、かなり高度であったことが知られる。猪坂直一によれば、講義を理解できていた聴講者は3分の1程度ではなかったか、と回想しているが(国立教育研究所上田調査団 1974:61)、それでも第4期第2回講座に出講して「政治学」を教えた今中次麿は、講義の最後に、「私の一番嬉しいのは私が学校に於けると同じい自由を与えられ同一程度の講義をしたにもかかわらず御諒解下さった御様子を見出したことであります」と述べている(馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」)。また、第2期第3回講座のタカクラ・テル「文学論」を聴講した青木猪一郎は、初日、「ロシア文学のゴゴリ氏から始めるとの事最初ロシア語でアルハベットを覚えて貰ひたいとの事、英語のアルハベットさえ知らぬ俺は直ぐ後ろに六川先生がみられるので筆記するのさへ何だか浅越で弱っちゃまった」(1922年12月5日条)と、日記に書いていたが、講義3日目には「自由大学、ゴゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かった。始めての日のあの向きでは何んな事になるかと打案じられたのに」(12月27日条)と、講義が「面白かった」ことを書き記している(天田・山野 1975:40)。タカクラの講義が「面白かった」との感想は、青木だけでなく、中沢鎌太も、その日記に、「自由大学へ参る。停電の為に一寸都合が悪かった。頭痛も話が面白かったものだから忘れ勝ちであった」(1922年12月5日条)と記している(天田・山野 1975:42)。

聴講者である青年たちは、「七日間、二十時間ばかりの氏(注、恒藤恭—引用者)の講義によつて、僕等がどんなに啓発されたか今更言ふまでもない。(中略)自分の智識の天地が非常な勢いひで開拓されて行くやうに感じ、実に嬉しく溜まらなく、ナゼ僕等はおつと早くから自由大学を興さなかつたのだらうなどと語り合つたものだ」(猪坂 1925b:15)、「二日か三日講義をきいて、そのあとの講義の印象が、自分の気持ちが広くなったというか、自分たちが今まで考えたことのないような、社会がみえてきたというような、いい気持になってきた」(井沢 1983:52)という回想からも知られるように、自由大学の講義を聴き、視野を広げ、本物の学問に触れることにより学問するよろこびを体験したのである(37)。そして、講師もまた、そうした学問を求める青年たちの声に応じて学問を教えたのである。自由大学の学問は、既成の大学の学問をほぼそのまま持ち込まれたものであった。多くの

講師は大学で講義していたものを自由大学で講義していた場合がほとんどであったが、それにもかかわらず聴講者である青年たちは、主体的に学問を学び、視野を広げ、青年たちの人間形成に影響を与えたのである（山口 1994）。それは、上田だけでなく、他の自由大学にも共通したことであった。

聴講者の人数は、大正期の聴講者数が知られる14講座をみても、農村青年と小学校教員を中心に平均43名に過ぎなかったが、聴講者と講師とは学問への情熱によって結ばれていた。恒藤恭は、「寒さにひきしまつた空気の中に、静けさがみち渡し、あかるくたのしげに輝く電燈の下に、聴講の方々が熱心のこもつた瞳をみひらいて、じつと聴講して下さるのを眺めながら、私は時間のうつろいを気付かないでしやべりました」と語り（恒藤 1923：10）、新明正道は、自由大学に出講するさい、「私は本職の学校の教師ですが、案外所謂学校には真の学究の気持のある人の少ないのに悲観してゐます。自由大学のやうな自ら進んで学問に近付かうとする人々の集って来らるゝところへ行って話の出来るのを嬉しくおもっています」と書いている（横田憲治宛新明正道の手紙、1923年12月7日、山野編 1973：2）。自由大学の運営者たちもまた、それを自由大学の誇りとしていたのであって、すでに紹介したように、第2期講座の開講にあたって、「本大学ハ只今ノ処、各講師ノ学問殖民事業ニ対スル熱意ト、聴講者ノ向学心トノ他ニ、何ノ基礎ヲモモチテ居リマセン。然シ、私等ハコノニツガ、設備ノ不完全ヲ償フホドノカアル本質的^{ママ}ノモノデアルコトヲ知リマシタ。又、コノ本質的^{ママ}ニ基礎ニ立ツテ邁進スルコトノ出来ル処ニ、信州人ノ光荣アル特色ガ存スルノダト考ヘマス。」（「信濃自由大学第二期開講ニ就テ」1922年）と書いていた。

そして、この自由大学の試みは、各地に反響をよび、長野県内をはじめ新潟県・群馬県その他の地方都市や農村に波及して行くのである。

4. 自由大学の聴講者・理解者たち

この自由大学には、どのような人たちが聴講したのか。

上田自由大学聴講者の職業別調査は第2期6講座の統計が知られている（第2表）。

この表からは、上田自由大学では、農業者が47%、教員が30%と、この両方で聴講者の大半を占めていたことが知られる。

また、筆者及び天田邦子がおこなった聴講者調査（第3表）によれば、農業者の多くは地元の上田

（第2表） 信濃自由大学聴講者職業別調査（第2期講座）

		農業者	教員	官公吏	医師	学生	その他	合計
土田杏村	哲学概論	17	14	5	1	0	7	44
恒藤恭	法律哲学	23	12	5	2	0	5	47
タカクラ・テル	文学論	26	23	7	2	2	3	63
出隆	哲学史	24	17	2	1	2	4	50
山口正太郎	経済学	22	6	1	2	0	3	34
佐野勝也	宗教学	16	9	1	2	3	3	34
		128 47.1%	81 30.0%	21 7.7%	10 3.7%	7 2.6%	25 9.2%	272

（『信濃自由大学の趣旨及内容』1923年をもとに作成）

(第3表) 上田自由大学聴講者調査一覧

氏名	市町村	生年	続柄	学歴	職業	聴講	備考
中沢鎌太	上田	1878	長男	小県蚕業	農業	○●	
山越脩蔵	神川	1894	三男	上田中学	農業	○	自由大学理事
春原五作		1894			郵便局員		
細田延一郎	豊里	1896	長男	上田中学	農業	○●	郡連青団長
猪坂直一	上田	1897	長男	上田蚕糸専門	上田蚕種		自由大学専任
堀込義雄	神川	1897	四男	上田中学	小学校教員	○●	郡連青幹事
石井清司	泉田	1898	長男	小県蚕業	農業	●	郡連青団長
青木猪一郎	殿城	1899	長男	豊里殿城尋常小	殿城郵便局員	○●	
香山英雄	神科	1900			農業		上小農民組合
黒坂勝	西塩田	1900			村役場書記		
中島忠次	塩尻	1900		塩尻尋常小	収入役・助役	●	郡連青副団長
矢島二郎	神川	1900			農業	●	
清水嘉幸	神科	1901	長男	上田中学	銀行員	●	
竹内省吾	和	1901	長男	小県蚕業中退	農業	○	
竹越貞男		1901			小学校教員	●	
山岸忠	長瀬	1901		小県蚕業	農業	○●	
池田正雄	神科	1902		長野師範教員養成	小学校教員	○	
矢嶋英治		1902			小学校教員		
馬場直次郎	塩尻	1902	長男	小県蚕業	農業	○	
山辺聖	神川	1902	長男	小県蚕業	農業	●	
井沢譲	浦里	1903	長男	浦里尋常小	農業	●	上小農民組合
滝沢武登	西塩田	1903			農業		
有賀有喜	和	1903		小県蚕業	小学校教員	○	上小農民組合
横沢要	神科	1904		上田中学	農業	●	上小農民組合
丸山龍介	長窪古	1904		小県蚕業	蚕業試験場	○	
小林忠雄	傍陽	1905			農業	●	
武舎功	豊里	1905	長男	長野師範教員養成	小学校教員	●	
北川太郎吉	神川	1905		神川農工補習学校	農業	●	上小農民組合
武井克己				小県蚕業	上田蚕業取締所	○	
小林茂夫	大門	1906		小県蚕業	実補教員		
五十嵐友幸	和	1906		小県蚕業	農業	●	
宮下芳勝	浦里	1907	長男	小県蚕業	農業	●	上小農民組合
石井泉	泉田	1907	長男	泉田実業補習学校	農業	●	郡連青評議員
中村賢次郎	神川	1909			農業		
横山勇司	浦里	1910			村役場書記	●	

注：郵送、聞き取り調査による。聴講の○●は「信濃自由大学会計簿」(○)、「上田自由大学会計簿」(●)に氏名記載がある者。(筆者作成)

中学校ないし小県蚕業学校を卒業し、家業を継ぐ長男が多く、蚕種製造など農業に従事する中農層の青年であった。年齢層は、農業者、教員ともに20代が多く、30代以上は少なかったことが知られる。

それでは、上田自由大学が開講された1920年代前半、自由大学の聴講者たちは、同じ時期に上田小県地域で展開された青年団運動や『時報』の刊行、信濃黎明会や哲学講習会などどのような関係にあったのだろうか。

上田自由大学の聴講者名簿は、大正期の第1期第1回講座～第4回講座、第2期第1回講座～第6回講座の10講座については「信濃自由大学会計簿」、昭和期の再建第1期2講座、第2期2講座の4講座については「上田自由大学会計簿」によって知ることができる。「信濃自由大学会計簿」は創設期の自由大学の聴講者に限られるという史料的制約はあるが、157名の名前が知られ、「上田自由大学会計簿」では102名の名前が知られる。

自由大学の運営者である金井正と山越脩蔵は、哲学講習会（小県哲学会）の経験から自由大学の構想を形成していった。その小県哲学会の会員の多くは小学校教員であったが、現在知られる39名の会員（哲学講習会参加者名簿による）のうち自由大学聴講者は金井・山越のほか吉池勝・村上義尊・金井栄・等々力直泰・六川静治・倉島庄之助・宮沢昌一・横関早苗・小山郁太の11名であったが、このうち小学校教員は金井栄以下の7名であることが知られる。また、吉池勝は農民美術の講習生でもあった。

山越脩蔵と猪坂直一は、信濃黎明会の幹部で、それぞれ修養部長、宣伝部長となっていた。信濃黎明会は小県郡連合青年団の官製的体質にあきたらない青年たちによって組織されたが、その多くは町村の青年会長クラスの農村青年であり、のちに郡連青の役員になった青年も少なくなかった。現在判名している信濃黎明会員・信濃革正党員は47名であるが（『信濃黎明会記事録』、山野 1986）、このうち自由大学聴講者は山越・猪坂のほか松前七五郎（上田）・宮下智三郎（上田）・横関豊龍（和田）・中沢守平（上田）・清水実（本原）・宮下周（浦里）・南條三二郎（別所）の10名で、このうち郡連青の役員となっているのは中沢守平以下の4名であるが、中沢は城下村青年会長で1921年度の郡連青評議員、清水は本原村青年会長で27年度の郡連青副団長、宮下は22年度浦里村青年会長で郡連青副団長、24年度郡連青団長、南條は別所青年会長で24・25年度郡連青評議員であった。

小県郡連合青年団は当初、団長は小県郡長の安藤兎毛喜であったが、1922年度からは自主化され青年会長の中から選出されるようになった。1921年から30年までの間で、郡連青の役員（団長、副団長、幹事、評議員）となったのは71名であるが（長島 2012：28）、このうち自由大学を聴講しているのは、信濃黎明会員でもあった4名のほか、堀込義雄（神川）・山浦国久（神川）・山辺聖（神川）・矢島二郎（神川）・細田延一郎（豊里）・中島忠次（塩尻）・石井清司（泉田）・石井泉（泉田）・赤羽光利（泉田）・小泉謙介（泉田）・塩沢平八郎（中塩田）の11名で、計15名であるのが知られる。このうち宮下は24年度の団長、細田は25・26年度の団長、石井清司は27年度の団長、山浦は28年度の団長を務めている。また、堀込、山浦、細田、石井清司は28年に上田自由大学が再建される時の中心メンバーになっている。なお、郡連青では、1923年から各町村の青年団代表が別所温泉常楽寺に集まり5～6日間泊まり込みで学習する幹部修養講習会を開催し、自由大学とともに、青年たちの「社会的教養」を積むうえで大きな役割を果たしていた（長島 2008：44-45）。

各町村の青年会は1924年から25年にかけてピークを迎える『時報』の刊行に関わっていた。自由大学の筆記ノートを残している馬場直次郎も『塩尻時報』の編集責任者となっている。神川村の場合は、青年有志による「路の会」が主体となり24年11月に時報『神川』を創刊し、27年に発行主体は神川青年会に移行している。この「路の会」メンバーは、金井正・山越脩蔵・堀込義雄・山浦国久・矢島二郎・金井栄らで、ほとんどが村青年会の会長・副会長を務めた幹部であり、自由大学の運営者や聴講者でもあった。そして時報の編集に関わり、意見を投稿し、農繁期を除いて月1回程度集まり

議論をしていた（渡辺 1994）。

このように自由大学の聴講者には、小学校教員のほか、地域の青年会運動にかかわっていた青年たちが比較的多く、その中には郡連青の役員となる者も少なくなく、『時報』の編集・刊行や論説の執筆に関わっていた。また、信濃黎明会の普選運動や軍備縮小運動、23年9月の県議会選挙での理想選挙活動などに関わる者もいたのである。自由大学の学習運動は、青年団運動や『時報』の刊行、信濃黎明会の運動などに関わりをもちながら進められていたことが知られる。

各地に自由大学が設立されると、その連絡機関として自由大学協会がつくられ、1925年には機関誌『自由大学雑誌』が刊行された。25年1年間に11冊発行しただけであったが、その定期購読者のリストは『自由大学雑誌発送簿』から知ることができる。自由大学の聴講者だけでなく、講師など関係者のほか、雑誌購読だけの者もいた。聴講者以外の者は自由大学運動に興味・関心があるか、趣旨に賛同していた人たちで、いわば自由大学の理解者といえることができる。上田・小県地域の『自由大学雑誌』購読者は191名であったが、このうち聴講者は71名（37.2%）で、講師であるタカクラ・テルを除くと購読者は119名（62.3%）であった。購読者の中には、聴講者でもあった上田市長の勝俣英吉郎や戦後市長となる浅井敬吾、女性では上田市の清水ちよ、永井一子、花岡たかよらの名前もあるが、上田蚕糸専門学校長の針塚長太郎、農民美術に関わった画家の倉田白羊、信濃黎明会結成の原動力となった川辺村の小林泰一、信濃黎明会の幹事長であった塩尻村の沓掛喜、信濃黎明会の支援で県会議員に当選した塩尻村の沓掛正一、信濃革正党⁽³⁸⁾の支援で衆議院議員に当選した和村の深井功らの名前もあり、農村青年や教員、官吏だけでなく、地域の有力者にも自由大学の理解者が広く存在していたことが知られる。

5. 「自由大学の理念」の形成

それでは、「自由大学の理念」とはどのようなものであったのか。

自由大学についての基本的な考え方は、土田杏村が起草し、1921年7月に公開された「信濃自由大学趣意書」に示されている。趣意書には、「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受くる機会を得んが為めに、綜合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と、その趣旨が記されている。この趣旨からも知られるように、まず何よりも「学問の中央集権的傾向を打破」し、現に「産業に従事」している人びとの立場から新しい形態の大学を創造することにあつた。こうした見地から土田は、機会あるごとに自由大学についての自己の見解を積極的に披瀝し、自由大学運動を理論的側面から支えていった。しかし、その「自由大学の理念」は、柳沢昌一が指摘するように、「先行する運動を後追いつる形で、諸外国、国内の類似の活動との比較の中でその意味を確かめつつ、しだいに展開されたいった」ものであつた（柳沢 1987：235）。

信濃自由大学の第1期講座が開かれている最中に執筆した「我国に於ける自由大学運動に就いて」（『文化運動』1922年1月号）は、土田が自由大学運動について初めて広く世に紹介した論文である。

かれは、冒頭の部分で、「自由大学の運動は日本で起きたものです。しかも長野県で経験して来た大学拡張運動の自然の発展としてかうしたものを産んだのであります。西洋にさうした類似の運動があるかどうか、そんなことはまるで知らない。『自由大学』といふ名も、それらの勇気に富んだ青年の中から、自然に湧き出て来たものであつて、強ひて誰が命名したとも言へない」（土田 1922a：13）と述べているように、この運動は、土田の主導性によって生まれたものではなく、青年たちの中から

生まれたことと、自由大学運動は大学拡張運動であると規定していたことが知られる。

土田がこの時点で、「自由大学は一個の大学拡張運動である」（土田 1922a：12）としたのは、かれの念頭にあった、自らの文化学研究の普及と民衆への啓蒙を目指す日本文化学院の大学拡張運動の枠組みの中でとらえていたからであった。このことは、山越脩蔵の依頼で第1回哲学講習会を開催するときにも、「文化学院設立のための宣伝演説」を計画していたこと（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1920年9月6日、山越 1978：11）、また、この論文でも、日本文化学院を創設した理由についてふれ、「その一は徹底的に文化学の研究をすること、その二はかうした大学拡張運動の中心になること」と書き、この「大学拡張の運動の方は物になりさうです」（土田 1935b：310）としていることから、その延長線上で自由大学をとらえていたことがうかがえる。

信濃自由大学の第1期講座が1922年4月に終了すると土田は、この年の夏以降、この第1期の経験をふまえ、また、イギリスのポール夫妻（Eden & Ceder Paul）の『創造的革命』（Creative Revolution. A Study of Communist Ergatocracy, 1920）、『プロレットカルト』（Proletcult-Proletarian Culture, 1921）の2著作などに学びながら、自由大学のとらえ方や教育観も転換していくことになる。

土田は、「階級自由教育（プロレットカルト）の新潮流」（『創造』第4巻第8号、1922年8月）、「シイデア・ポウルの社会思想研究」（『文化』第4巻第4号、1922年9月）でポール夫妻のプロレットカルト論を解説・論評している。そのうえで公表されたのが「八月五日市民自由大学主催の懇談会席上談」という後記がある「自由大学運動の意義」（『文化運動』1922年10月号）という論文である。

土田は、冒頭、「私は此に自由大学運動の意義に就てと題しましたがかうした運動が、外国にあるかどうかは知らない。唯、地方の自由大学から得たヒントによつて、少しお話したいと思ひます、地方自由大学は、現に長野県の上田市の近くに信濃自由大学があります、之は民衆自身の要求によつてなされたものです、がその手段方法は我乍ら教へられる処が多くありました」（土田 1922c：27）と述べているように、自由大学の意義をとらえる拠って立つところは民衆自身の要求であり、現に存在する自由大学から得ていることを示唆している。そして、「この運動を理論的に考へたい」とし、「吾々は永遠に死ぬ迄成長する事だあつて、社会制度はどうしても吾々を永遠に教育する事ではなくありません。然るに現今の社会では大学を出ると教育は終つたと自分も思ひ又社会も思つてみます」と述べているように、生涯にわたる教育の必要性を説き、自由大学聴講の時間を「労働時間の一部に入れて」聴講の時間を見出すべきで、これは「民衆の要求によつて実現さすべき」であるとし、ポール夫妻のプロレットカルト論に言及して、「この運動は今や全世界の民衆の要求となつてゐる」と述べている（土田 1922c：29-30）。ここには、のちに自由大学運動の意義として全面的に展開されるテーマが提示されている。それゆえ、当初の自由大学運動を大学拡張運動の枠内でとらえる見方を否定し、「従来大学拡張運動の一として夏季大学が所々に行はれてみましたが、之は要するに温情主義の表現であります。教育上の温情主義は夫れ自身無意義であります。この自由大学運動は真の教育であつて、今迄の学校教育は僅にその一部であります。然して今迄の大学拡張運動をそのまま自由大学運動にする事は全く意義のない事であつて、在来の社会教育と云ふ概念は学校教育を本義と考へポーツとしてみて設備がはつきりしてゐません。それは自然学校教育本位となつてゐるからであります」（土田 1922c：30）と述べている。

こうして土田は、第1期の自由大学の経験とポール夫妻のプロレットカルト論を媒介として自らをとらえていた既成概念を克服し、自由大学運動をプロレットカルト運動としてとらえる方向へ転回していくことになる。

信濃自由大学の第2期講座が終わる1923年4月前後からプロレットカルト論に関わるいくつかの論文を発表しているが、ここでは「プロレットカルト論」（『中央公論』第38年第7号、1923年7月）を中心に、土田の教育改造の論理がどのようなものであったのかを見ておきたい。

かれはまず、「プロレットカルト運動に多くの囑望を置く」とし、この運動によって今こそ「我国の教育に大変革を與へ得る——随つて現代人の懷抱する教育、教育の制度、教育の精神、学校等の概念の考へ方に、全然変革を與へ得る時が来た」と述べたうえで、自己のプロレットカルト論の主張はポールの著作から学んだものというより、「地方の新らしい青年達と交つて居る間に、自然に其の雰囲気の中から與へられたものである」（土田 1924b：7）ことを強調している。そして地方農村青年のおかれて居る教育・文化状況を問題にし、地方青年達は、立身出世や英雄主義の書物や修養雑誌の影響を受け、「青年の道徳的修養の機関」である青年団や処女会に組織されて、「外来の過激思想を排斥して我国固有の国民道徳を推奨」され、また、青年となる前の小学校教育では、「国民的精神」を目的として行われており、「すべての人間を現代社会制度の中へ織り込んで了ふ為めのカルト」、すなわち「ブルジョアカルト」が施されていると批判する（土田 1924b：8-17）。別の論稿でも、地方青年は、「今更こきおろして見たところで始まらない」ような青年団や処女会、修養会に組織され、また「徹底的のブルジョアカルト、現体制支持の宣伝教育を受け」る小学校教育の影響、さらに「概ね小学校長の古手」である「半官修養技手」ともいべき社会主義の影響などによって、「徹底的のブルジョアカルトを施されている」と述べている（土田 1924a：65-67）。そのうえで土田は、ブルジョアカルトがいかなる制度を作ってきたかを明らかにする。かれによれば、「今の学校はすべてに向て公開せられて居る。其の修学の精神能力をさへ持合せるものならば、どれだけ高い教育をでも受ける事が出来る」とされているが、実際には「其の教育の精神能力を持つよりも前に、其の教育に堪へるだけ、多額の経済的資力を持合せなければならない」と批判し、しかも「現在の社会にあつては、個人の教育と収入とは相関々係を持」ち、「高い教育を受けたものが高い収入を受けるものと極められて居る」とし、「教育の上に於ける実質的のデモクラシイ」を要求しなければならないとする（土田 1924b：20-22）。しかもその「学校教育は、すべて国家の教権により、周到の指図を受け」ているとし、小学校の場合、「其処で教へる教科目、教材、教科書を始めとして其の教育の目的、精神までが、すべて国家の教権により決定せられて居る」ことを指摘し、「教育が国家の教権により支配せられる事は、却て民衆の教育に障害を與へる」と批判し、「教権の手を解放せられてこそ教師と学生との関係は人格的となる」し、教育が国家の教権を離れる事は、教育自身を自由にこそすれ、何の危険をも其の上に及ぼすものではない」として、「国家の教権」からの教育の自律を説いている（土田 1924b：25-29）。

この「国家の教権」からの教育の自律の主張は、ポール夫妻をはじめとする「マルクス派のプロレットカルト論者」のプロレットカルト論と土田のそれとを分ける原理であった。土田は、マルクス派の論者が「プロレットカルトは飽くまでも社会主義的教権の手にある可きものと考へ、プロレットカルトなる語さへ、真の意味の教育といふよりは、さうした社会主義的宣伝教育と解せられて居る」ことに対し、これは「現在のブルジョアカルトの弊害の根本原因が何処に潜むかを忘れ、其の原因を再び繰返すものに過ぎない」と批判している（土田 1924b：29）。土田は、「教育」と「宣伝」とを峻別したのである。

そして最後に、ブルジョアカルト批判をふまえて教育を根本から変革する構想を提示している。1つは、生涯にわたる自己教育の提唱で、かれは次のように述べている（土田 1924b：31-32）。

「教育とは、人格の自律を完成する為めのものだとするならば、教育は青年である十数年の間だけ行はれて其れで止む可きものではない。又同時に人間の生活の中に、教育を受ける期間と、生産的労働に従事する期間と、截然たる區別を生ぜしむ可きものでもない。学校とは、民衆が其れ々々の生産的労働に従事しつつ、生涯を尽して永遠に、或は学び、或は討論し、又或は研究する為めの、其の機関である。」

教育は生涯にわたる営みであるという視点から、働く民衆の自己教育こそ教育の「本幹」であると

し、「教育や学校の本来の形が成人教育であり、現在の所謂学校教育は、其の一部を占める変態の形にしか過ぎない」（土田 1924b：33）と述べている。

もう1つは、教育機関の民衆化の提唱である。かれは、生涯にわたる教育の機関は「現在の集中主義、官僚主義を打破して、地方化せられ、民衆化せられ、至るところの地方に設立せられる」もので、また「其の機関は教権としての国家の管理を離れ、其の地方の民衆自身が経営するもの」でなければならぬとされ、さらにそのような「教育機関の経営者は彼等民衆だから、彼等は其の地方的個人的要求に随ひ、其れ々々特色を異にした施設をし、且つ其の就学する学科の自由課程、相互的討論、図書館を利用するの自学等、出来る限り自由の制度を作る事が出来」る必要があることを説いている（土田 1924b：33-34）。

そして土田は、こうした生涯にわたる民衆の自己教育の動きとして「自由大学運動」が「地方の青年達」によって「起し始め」られていることを紹介し、「其の運動の量は微力であつても、其の意義は革命的なものだと思ふ」（土田 1924b：37）と、自由大学運動のもつ意義を述べている。

このように土田は、「プロレットカルト論」において、人間を既存の社会制度に無難に織り込むための装置となっている教育制度に対して、民衆自身の運営する生涯にわたる自己教育の機関を下から創りあげていくことで変えていこうとする構想を提示するとともに、その民衆の自己教育運動としての自由大学運動に教育変革への可能性を見ていたのである。

この当時、イギリスでは、WEA（The Workers' Educational Association, 労働者教育協会）が、各種の労働者組織と大学とを教育の下に一つの組織としてまとめ、基礎教育後の教育として、教養教育（liberal education）と一般教育（general education）を提供し、とくに「オックスフォード大学と連携することで、イングランドの伝統的な大学教育により近い、学術的にもより高いレベルの教育機会を労働者階級の人々に提供」していた（土井 2013：17、26）。労働者は、討論や小論文作成を通じて知を拓く学問的自己教育をおこなっていた。この労働者の教養教育を展開し、「学問的自己教育の文化（autodidact culture）」を担っていたWEAに反対していたのがポール夫妻であった。土田は、このWEAに論及することはなく、ポール夫妻のマルクス主義的なプロレットカルト論を批判し、夫妻とは異なる独自のプロレットカルト論を展開したのである（岡本 2021：38-43）⁽³⁹⁾。

土田杏村は、その独自のプロレットカルト論をふまえて「自由大学の理念」を確立していく。

信濃自由大学の第3期講座の開講前の1923年10月に刊行されたパンフレット『信濃自由大学の趣旨及内容』に「自由大学に就て」、23年11月に長野県下伊那郡飯田町に創設された信南自由大学のパンフレット『信南自由大学趣旨書』に「設立の趣旨」、そして24年3月に起きたLYL検挙事件への対応として伊那自由大学が8月に刊行したパンフレット『伊那自由大学とは何か』に「自由大学とは何か」を發表し、自由大学とは何かを明らかにしていった。

土田によれば、教育の目的は人格の自律性を確立することであり、「教育とは、其れを受ける事により、実利的に何等かの便益を得る事にだけ止まるものでは無いと思ふ。吾々が銘々自分を教育して、一步一步人格の自律を達して行くとすれば、其れが即ち教育の直接の目的を達したのである」と述べている（土田 1923a：1）。そして、「生きるとは人間として生きることだ。より理想的に生きることだ。しかし自分をより理想的に生かして行く主体は、自分以外の何者でも無く、自分は自分以外の何者からも絶対に支配せられないところに、人間としての無上の光りが輝く。此の人間の本分を益々はつきりさせ、人間として生きることが、即ち自己教育である。自己教育が即ち人間として生きることであり、人間として生きることが即ち自己教育である」と述べて、その自律的人格は自己教育によってつくられ、主体的に生きていくことが自己教育の営みであるとした（土田 1923a：1）。

このように土田は、自己教育をあらゆる活動の基礎においていたがゆえに、「今日のあらゆる社会に於けるモットオ」となっている「デモクラシイ」についても、「先づ第一に教育に於てのデモクラ

シイを要求しなければならない」とする。なぜなら、「財産や政治発言権やの上に於てのデモクラシイも、其の基礎に教養のデモクラシイを置かないでは、何の意味をも為さない」からである（土田：1923a, pp.4-5）。現在の学校教育制度においても、それに「参与する機会を決して平等に付与せられて居ない」とし、「大学教育を受ける為めには、其の精神的能力以外に、莫大なる経済的資力が必要とせられる。其資力の無いものは此の教育を受けることが出来ず、此の教育を受けないから社会に於ての地位も自づから高められることが出来ない。すべての社会的不平等は、教育の不平等を根本の原因として運命的に決定せられ、其の結果の派生するところ止まることを知らないのである」と述べる。この教育機会の不平等については、信南自由大学の「設立の趣旨」の中ではより強調するかたちで、コメニウスの創見した学校系統の形式だけを無批判的に踏襲している現状を批判し、教育「制度の形式は、すべての民衆に教育の機会を与へ、最高学府としての大学は其の門戸を何人にも開放して居るではあろう、併し其の教育を受ける為めには、人は莫大の経済的資力を必要とする。其の莫大なる教育費を持たないものは永遠に高い教育を受ける機会を持たず、結局高い教育は有資産者のみの持つ特権となるのである」と述べられている（土田 1923b：1）。

土田は、教育の眼目は「人格自立の精神」であるとし、その教育は生涯にわたる自己教育であることから、「其の最も高い程度の教育は、労働しつつ学ぶところの学校に於ていなければならない」とする。そして、生涯にわたって働きながら学び、その機会が平等に保障されなければならないとする教育制度の理念を示したうえで、被教育者と教育者の相互作用の中で教育が行われる学校の理念を自由大学の可能性に託し、次のようにまとめている（土田 1923a：6）。

「我々の学校は、すべての点に於て我々自身によつて組織せられ、支持せられる。其れは終生的の学校である。労働しつつ学ぶ学校である。其の教育程度は最も高いところにまで達する。我々は特定の教育者を持つであらう。併し所詮は我々すべてが何等かの方面に於て教育者であり、何等かの方面に於て被教育者である事を自覚して居る。徒らに就いて学ぶが我々の学校の本義では無い。我々の学校は討論もすれば、談話もするであらう。さうした独立の学校は、理想的に組合の形式を持つ。其の組合は前後左右に、積層的に教育組合の聯盟を作る。下より上への聯盟組織、其れはピラミッド形の一の独立した教育組合社会をつくる。此の全国の学校の理念を今より後我々は『自由大学』と呼ぼう。」

土田は、「自由大学とは何か」の中で、簡潔に「自由大学とは、労働する社会人が社会的創造へ協同して個性的に参画し得るために、終生的に、自学的に学ぶことの出来る、社会的、自治的の社会教育設備だといふことが出来る」と説明している（土田 1924c：4）。いいかえれば、自由大学は「民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学」であって、それは現存の学校制度とりわけ大学制度が「莫大な経済的資力を必要」とし「有資産者のみの持つ特権」となっているものとは対照的なものであり（土田 1923b：1-2）、「あらゆる社会的独占の原因」となる「教育の独占」の排除と「教育の自治」が求められるものとされた（土田 1924c：4-8）。したがって自由大学の組織は、「被教育者本位」に「自治的」に運営され、「講師の選択」をはじめすべてに「学ぶことの自由が完全に擁護せられ、教育の自治が十分に実現せられて居る」ものとされたのである（土田 1924c：8）⁽⁴⁰⁾。そして土田は、自由大学における自己教育について、「教育の意義は自己教育にあるが、併し我々の生活創造は個人の孤立によつて達せられず、社会を組織して個人が相互に影響し合ふことにより、反省の機会を得、創作の資料を持ち、其の創造を豊かならしめることが出来るやうに、自己教育は又他よりの教育を必然的に要求する。何人も他への教育者であると同時に、他に対しての被教育者なのである」と述べていたように（土田 1923a：3）、被教育者が教育者となり、被教育者同士が学び合い影響し合うという双方向の関係をもった教育が行われるとしたのである⁽⁴¹⁾。

また、土田は、「教育の自律性」を主張し、「教育活動は他の経済的、政治的等の活動と並立した

自律的範囲であり、随つてすべての組織や制度の上に於ても其等から自律しなければならぬのである」と述べている（土田 1923a：2）。かれが「プロレットカルト論」の中で、「教育」と「宣伝」とを峻別したことはすでにふれたが、「自由大学とは何か」の中でも、信南自由大学の「設立の趣旨」で「我々の大学の教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ、また社会主義的でも無く其等の批判を自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得るを目的とするものである」と規定したことに「今の私の考へも其れと異なるものでは無い」としている（土田 1924c：5-6）。したがって、自由大学と社会運動との関係についても、「人間は、たゞ一つの社会的集団にのみ加担するものではないから、自由大学の会員たると同時に、他の何等かの社会運動団体の会員たる場合はあり得る事であり、且つ自由大学は会員のかゝる行動に何等の規定をも加へるものでは無い」が、「自由大学は教育のための一機関であり、其れ以外に何等の目的をも持つものでは無いから、自由大学として或る特定の社会運動に加担せず、随つて他のいかなる社会運動団体とも秘密の提携をなす如きことは過去に於て絶異であつたし、且つ将来に於てもあり得ない」と、社会運動からの自律を説いたのである（土田 1924c：9）。

これまでみてきたように「自由大学の理念」は、土田杏村という知識人と金井正・山越脩蔵という農村青年との〈出会い〉と相互交流の中から自由大学運動が生まれ、その実践をふまえ、ポール夫妻のプロレットカルト論を批判的に摂取しつつ、形成されたものであった。土田が構想した「自由大学の理念」をまとめると、おおよそ次のようになる。土田は、民衆の立場から近代日本の教育体系を根底から批判し、民衆が労働しながら生涯にわたって学習する新しい形態の学習機関を創造しようとしたのである。土田によれば、教育の目的は人格の自律を確立することであり、それは生涯にわたる自己教育によってつくられるとし、自己教育とは主体的に人間として生きることであるとす。しかし、現存の学校制度は形式的には教育の機会均等が保障されているようになっているが、実際には高等教育を受けるためには多額の経済的資力が必要でありその結果、教育を受ける程度によって社会的不平等が生じていること、しかも小学校教育から国家の教権によって教育の目的や内容は統制され、体制擁護の精神を培う教育が行われていることを批判し、このような近代日本の学校制度に対して、民衆自身が運営する生涯にわたる自己教育の学習機関を下からの連盟組織によって創りあげていくことで変革しようとする構想を提示したのである。土田は、自由大学は労働する民衆が社会的創造へ協同して個性的に参画できるように主体的に学び運営する学習機関であり、講師の選択や教育課程（学科）の編成をはじめ、相互的討論、図書館を使用しての自学など、教育の自治がつかぬかれ、学習の自由が保障されるとし、また、自由大学は教育のための一機関であり、特定の社会運動から独立した教育が行われなければならないとし、教育の自律性を説いた。そして、自由大学では、教育者と被教育者の相互作用の中で教育は行われるとし、教育者が被教育者を一方的に教えるという関係ではなく、教育者と被教育者が相互に影響しあう双方向の関係にあること、また、被教育者が教育者となり被教育者同士が学び合うという関係性をもった教育が行われる場であるとの教育の理念を提示したのである（42）。

6. 自由大学協会の成立と『自由大学雑誌』の刊行

長野県上田・小県地域に生まれた自由大学運動の試みは、その後、長野県内や新潟県・群馬県など全国各地にひろがっていった。すなわち、1922年8月には新潟県北魚沼郡堀之内村に魚沼夏季大学（翌年魚沼自由大学と改称）、22年11月には福島県相馬郡原町に東北文化学院（福島自由大学）、12月には長野県下伊那郡飯田町に信南自由大学、新潟県南魚沼郡伊米ヶ崎村に八海自由大学、24年12

月には長野県松本市に松本自由大学、25年12月群馬県前橋市に群馬自由大学、26年10月には新潟県北魚沼郡川口村に川口自由大学がそれぞれ設立され、宮城県・京都府・青森県・兵庫県などでも自由大学設立の動きがみられた。こうして自由大学が各地につくられるのにもとない、24年2月に信濃自由大学は上田自由大学、信南自由大学は伊那自由大学と名称をあらためている。

各地に自由大学が設立され、その連絡機関として自由大学協会がつくられた1924年は、自由大学運動の全盛期であった。この年には、上田、魚沼、八海、伊那の4自由大学で18講座が開講されている。

自由大学運動を全国に拡大していくことは、「信濃自由大学趣意書」(1921年)の中で、今後の計画として「この自由大学運動を全国に波及して」「全国の青年と提携すること」が示されていたが、土田は、信濃自由大学が開講した直後にも、山越脩蔵に宛て手紙の中で「これを拡張して全国的の運動にしたいものだと思う。教育運動として」と書いていた(山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1921年12月18日、山越 1978:35)。そして、自由大学が各地に設立されていく中で、連盟機関の設立へ意欲を示していった。

土田は、1924年4月に八海自由大学の渡辺泰亮に宛てた手紙の中で、「信州で三年間やつた実験を中心として、全国の自由大学聯盟をつくる計画 중이다。さうなつたら君の方も是非加盟して貰ひ、単に夏だけといふではなしに、もつと数回連続的に開くことの出来るものにしようではないか。この聯盟をつくるため、信州の連中は一生懸命になって居る」と書いている(渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年4月13日、佐藤編 1981:81)。この連盟機関設立の具体化が図られていったのは、24年1月に信南自由大学に出講した山本宣治が、その設立を土田杏村に提案してからであった。かれは、土田に宛てて、「飯田の報告と、自由大学の連盟策に就て私見お耳にいたい(きいて貰へば宜しい丈、あへて難渋の咽喉を煩はして論戦に及ばずとして)。かへつてから一応伺はうと思ふが、大兄の健康と時間との御都合も承りたし」と書き送っている(土田杏村宛山本宣治の手紙、1924年1月15日、佐々木・小田切編 1979:206)。同じ時期に八海自由大学の渡辺泰亮に宛てた手紙では、「自由大学の聯盟の機関紙のやうなものの必要が感じられます。官憲の思想圧迫に対抗する示威といふ意味でなく、唯相互の協力運動(講師の選択やりくり、必要な読物の配給、出版屋には不可能なパンフレットの準備等)にだけでも大いに有意義かと思はれます」と、いくつか具体的な提案を書いている(渡辺泰亮宛山本宣治の手紙、1924年1月18日、佐藤編 1981:117)。土田は、山宣からの手紙に対して、「自由大学の連盟策は是非伺ひたいものです。『お目にかかりたいのだが、今の様子では』と松方式に申し上げますが、今漸く快復期に向ひつつあるため、もう一寸どなたへも目にかから内ことにして居ます。お手紙では口角泡をとばす分には一向支障ありませんから、是非お聞かせを願ひます」と、返事を出しているが(山本宣治宛土田杏村の手紙、1924年1月26日、佐々木・小田切編 1979:208-209)、これ以後、連盟機関設立の構想は、土田杏村と上田自由大学関係者の手で具体化されていった。

土田は、8月3日、伊那自由大学の横田憲治に宛てて手紙を書き送り、「自由大学協会」の構想を披瀝している。すなわち、「今年あたりは是非相互の連盟をつくりたいと思ふがいかがですか。自由大学協会とか何とかいふ様なものをつくり、それは会員を共通とし、毎月、会費を十銭位づゝ徴集し、信州の二箇所、越後の二箇所を合すれば会員が少くとも八百名は得られませう。さうすれば、機関紙を出すことも出来ます。機関紙が出来れば会員の熱も大いに違って来ると思ひます。そして講師はお互ひによく融通して一方の帰りに他方へ行くといふ様な具合にして、なるべく計費を節減し、また講師の時間の妨害をしないやうにしたいものです」と、具体案を示し、そのうえで「打ち合せ会を一度上田で開きたい」旨を伝えている(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年8月3日、山野編 1973:17-18)。打ち合わせ会のことは上田自由大学の猪坂直一からも横田に伝えられ、「自由大学の今後の方針に於ては、土田さんから種々と心配して来られて居りますし、又土田さんも高倉さんも(中略)近い

うちに各地の自由大学（今のところ、上田、飯田、越後の堀内及び八開）の関係者相会して、徹底的に協議したらどうか、と言って居られます。そこで場所ですが、矢張り交通の関係上、上田が良くは無いかと言ふのです。如何でせう。御地よりも貴兄なり平沢兄なり或は其他適当な方なり、今月の十五日頃までに都合が出来ませうか」と書き送っている（横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年8月3日、山野編 1973：18-19）。

こうして自由大学協会の設立準備会は、1924年8月15日、長野県別所温泉のタクラ・テル宅で開かれた。この設立準備会には、上田自由大学から金井正・山越脩蔵・猪坂直一、魚沼・八海両自由大学より渡辺泰亮、それにタクラ・テルが出席した。協議の結果、(1)連盟機関を「自由大学協会」と名づける、(2)機関雑誌を発行する、(3)「自由大学協会規約」の決議、(4)協会の専務幹事に猪坂直一を推薦、の4項目が決定された⁽⁴³⁾。こうして自由大学協会は、上田・伊那・魚沼・八海の4自由大学（のち松本自由大学を加えて5自由大学）が加盟して発足したのである。

自由大学協会の活動は、講師の斡旋と機関雑誌の刊行、各自由大学間の連絡が中心であった。

講師の斡旋は、専務幹事の猪坂直一を通して出講を依頼する方法がとられた。土田杏村は、伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙の中で、「冬の講義の承諾を確定的に得たいと思ひます。それで自由大学協会が確立した以上、専務幹事から一括して囑託し、出講してくれる月をきり、それを表につくって見て各自由大学へ配当する様にしたいと思ひます。それにつき猪坂君から至急講師へ協会の成立したことを報告し、講師に依頼することになって居ます」と書いている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年9月3日、山野編 1973：22）。この猪坂を通しての講師依頼は、伊那自由大学の24年10月からの講師に対してなされた程度で、それ以外の自由大学はそれぞれ独自に講師依頼をしており、必ずしも土田が意図するようなかたちにはならなかった。

機関雑誌の刊行は、協会の発足当初から準備がすすめられたが、1925年1月に『自由大学雑誌』の名称で、月刊雑誌として刊行された。この雑誌の編集には猪坂直一があたり、発行兼編集者となった。25年12月までに11冊を刊行したが、10月号は猪坂が病気となったため休刊している。発行部数は1000部で、その半分は上田自由大学で受け持ち、あとは伊那、松本、新潟の自由大学で消化してもらうという計画であった（猪坂：1976、p.8）。その購読者は、『自由大学雑誌発送簿』（1925年1月現在）によって知ることができるが、全国で382名の購読者リストが記載されている。道府県別の内訳をみると、長野県は上田・小県地域191名、郡外21名で計212名、県外では、青森県の57名が突出して多いほか、京都府の17名、東京府の14名、北海道の11名など31道府県と1植民地（台湾）の170名の名前が確認できる。ただし、伊那自由大学の横田憲治や平沢桂二・須山賢逸、魚沼自由大学の林広策、八海自由大学の渡辺泰亮、松本自由大学の唐澤正平ら各地の自由大学の運営者の名前はなく、その理由は不明であるが、おそらくこれら運営者のもとへは別に一括して雑誌が送られたものと思われる⁽⁴⁴⁾。

『自由大学雑誌』には、土田杏村「自由大学へ」「自由大学の危機」、高倉輝「自由大学会員諸君に」、新明正道「自由大学の精神」など自由大学の立場を明らかにした論文をはじめ、高倉輝「露西亜文学研究」、由良哲次「ナトルプに於ける社会的の意義」、土田杏村「日本民族は何処から来たか」「古代社会史雑考」、新明正道「ジンメル断片」、安田徳太郎「フロイド心理、夢」、佐竹哲雄「カントの本質」など講師の論文、猪坂直一「上田自由大学の回顧」や渡辺泰亮「魚沼八海自由大学便り」、唐澤澤平「松本自由大学便り」、「彙報」欄による各自由大学の記録や情報、「消息」欄による講師の情報の提供、新刊紹介などが掲載された。この誌面内容から考えて、『自由大学雑誌』には、自由大学の理念や国家の側からの成人教育に対する批判など自由大学運動を普及するための役割だけでなく、各講師の論文掲載にみられる講義録としての性格、「彙報」や講師「消息」欄などにみられるように各自由大学間の情報共有・交流、講師と会員との相互交流を図る役割も果たしていたことが知ら

れる。中寫洋は、「機関誌の発行を介して主体的な自己学習への転化の可能性を創出し、受講生と講師との間の双方向の学び」を可能にする先駆的な試みが、短期間ながら、この『自由大学雑誌』の刊行及びその構成・編集の中になされていたことを評価している（中寫 2010：58-59）。

土田杏村は、創刊号に「自由大学へ」と題する論文を載せ、『自由大学雑誌』は「日本最初のプロレットカルトの雑誌だ。成人教育の機関雑誌だ」と述べた（土田 1925a：1）。そして、自由大学について、「自由大学は全く僕達会員の要求の中から出たものだ。其の組織、方法など、此れ亦同じく僕達の事情に相応するやう、僕達によつて案出されたものだ。其れは何処の国からの借り物でも無い」と、自由大学は民衆によって創設されたものであることを説き、「自由大学は恵まれた学校だ。先づ其の講師の顔触れを見るがよい。関東関西の少壮学徒の粹を集めて居るでは無いか」と述べて、これまで出講した講師の名前を挙げたうえで、「今若し此れだけの勢揃ひで出来上つた法文科大学があるとしたら、其れこそは確に日本一の法文科大学だ」とし、「其の光榮ある法文科大学が僕達の自由大学なのでは無いか」と、自賛している（土田 1925a：2-4）（45）。

しかし、この『自由大学雑誌』も、誌代（1部15銭）回収の停滞や印刷所への借金の増加、さらに猪坂の病氣も重なるなどによって経営難におちいり、1926年以降は休刊せざるを得なくなった（猪坂 1976：8-9）。

自由大学協会は、25年9月20日、25年秋からの開講を前に、各自由大学の計画を協議するため、長野県別所温泉花屋ホテルにおいて幹事会を開催した。この幹事会には、専務幹事の猪坂直一、魚沼自由大学から加藤金治、上田自由大学から山越脩蔵、それにタカラ・テルが出席したが、そこでは、(1)各自由大学の方針経営方法の件、(2)今期の講座及講師の予定及交渉の件、(3)協会機関誌の編集及び経営の件、(4)次回協会幹事会開催の件、が協議された（猪坂 1925d：15）。

しかし、その後の自由大学協会は、機関誌の刊行を継続したほかは、経営難からほとんど活動しえなくなっていた。土田杏村は、横田憲治に宛てた手紙の中で、「協会の協議会に集まる人の少ないのも、要するに各自由大学にはそれだけの計費がないからでありますから、致し方ありますまい。（中略）今年は私も全力を注ぐことが出来ませんでした。来年からは、経営にも雑誌にももっと力を注ぎたいと思つて居ります。何にせよ、万事が計費の問題ですから、それを解決しなければいけない様です」と、書いていた（横田憲治宛土田杏村の手紙、1925年10月21日、山野編 1973：57）。しかし、協会の中心であった上田自由大学が経営難から講座を中断せざるをえなくなるとともに、自由大学協会もまた自然消滅のかたちで活動を停止していったのである。

7. 上田自由大学の講座中断

上田自由大学は、各地の自由大学の中心的存在として学習運動をすすめてきたが、自由大学運動が全盛期を迎えた1924年ころから聴講者の減少にともなう経営難に直面するようになった。

土田杏村は、山越脩蔵に宛てた手紙の中で、「自由大学の方はもう安心ですね。大いに自由にやってくれたまへ」と書いていた（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1924年2月22日、山越 1978：41）。

だが、土田の楽観的な評価とは裏腹に、関東大震災後の不安定な経済状況は、自由大学の経営にも影響を及ぼしつつあった。1924年4月の時点での状況を猪坂直一は、伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙の中で、「経営は不相変困難です。約百二十円ばかり不足のやうです。でも今年が一番好成绩なんです。実は此の三、四月の多忙期に際して三講座ブツ通し幕合ひなしと云ふ有様なんですから無理は無理です。聴講者は三十四五名に減つて居ります」と書いていたが（横田憲治宛猪坂直一の手

紙、1924年4月1日、山野編 1973：12)、25年5月になると状況がさらに悪化したことが知られ、「上田も本年は不景気で平口^{ママ}しましたが、どうやら辻褃を合せました。年六回は重荷過ぎるとすれば越後の様に三四回に止めてもよいと思ひ居ります」と書くにいたっている(横田憲治宛猪坂直一の葉書、1925年5月4日、山野編 1973：47)。

その創設当初から、自由大学は「経費の全部を会員の持ち寄る小額の会費によつて支弁するのを原則」としていた(猪坂 1925a：18)。この原則は、自由大学が他のいかなる団体からも干渉をされず、独立した教育機関として活動するための必要条件であった。しかし、平均40名に過ぎない聴講者の聴講料から講師謝礼その他の経費を除くと経営はけっして容易ではなかった(46)。すでに指摘したように、23年10月に「信濃自由大学ノ維持及ビ発展ヲ図ルヲ目的」として信濃自由大学会を設立し、会員からは1ヵ年12円の会費を、臨時会員からは1講座3円の聴講料を徴収することにしたのも、自由大学の経営の安定をはかるためであった(47)。そして24年10月からの第4期講座の開講にあたって運営者たちは、「願れば設立以来、自由大学は多くの困難と闘つて来た。殊に経済的に何らの基礎をも有しない自由大学は、此点に最も苦しめられた」と述べ、「我等は当地方の青年諸氏が、本大学の会員となつて、一は永久に本大学を支持し、一は各自の修養に資せられむ事を、第四期の開講に当り切に希望する次第である」と訴えた(「上田自由大学一班一第四期一」1924年)。だが、この地域の養蚕業の停滞と不安定の傾向の継続にともなつて、自由大学の聴講料は聴講者にとって負担になり始めていた。たとえば青木猪一郎は、その日記に、「月々参円と云ふ大枚の聴講料が仲々大袈裟だ」(1923年11月10日条)、「自由大学で高倉さんの「ドストエフスキイの研究」がある筈だが金が無いので中止、悲しい事だ」(23年12月1日条)と書いている(天田・山野 1975：41)。こうして自由大学の聴講生はしだいに減少し、特権的の大学を批判する自由大学の理念とも矛盾するような事態が顕在化するようになったのである。

だが、聴講者が減少したのは、自由大学の講義内容がマンネリ化し、聴講者の学習要求を汲みとることができなかつたことも原因していた。すなわち、その講義内容は主として哲学・文学など人文科学系の学問であり、これに対しては、聴講者の側からも、「自由大学の講義が難解に過ぎるといふ不平、講義科目が偏し過ぎるといふ批難、それは我等の常に耳にするところである」と指摘されていた(NK生 1925：21)。運営者の側からも、講義科目については「次期から陣容を新たに形而下の問題を多く取入れる事にしたい」と述べ(横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年4月1日、山野編 1973：12)、第4期講座では社会学や政治学など社会科学系の学問を多く取り入れることも行われたりした。講義が「難解」であるという問題に対しては、恒藤恭のように教科書を作成して使用するという努力も行われたりはしたが、聴講者の自学自習を援助するところみは積極的になされることはなかつた。土田杏村は、自由大学を初めて紹介した文章の中で、「講義を大学式にベラベラしやべるのでは何の役にも立たない。予め研究する書物を一二種定め置き、其れを講習員は長い間研究して置いて、さて講習の日に其れの要点を話すとか、其れの相互研究会を開くとかする。又講習員が平素読んで居て疑問になつて居る点を講習前に講師へ書き送り置き、講習の時に其れの解答を話す」というように、新しい授業のありかたを提起していたが(土田 1921a：15-16)、そうした授業のあり方が模索されることはなかつた。また、講師の選択については、土田やタカクラにほとんど全面的に依存し、講座の内容も講師の裁量に任せられ、猪坂や山越などのリーダーとなつた青年たちも、また一般聴講者の側からも講師選択や講座の内容、教育方法に希望を出すことはほとんど行われなかつた。こうして農村不況の中に生きる青年たちの学習要求にじゅうぶん対応できず、聴講者の減少をきたしたと考えられる。

上田自由大学は、このように聴講者の減少による財政上の困難に直面したが、また、講師難にも直面した。自由大学の講師の多くは、土田杏村やタカクラ・テルを除くと、恒藤恭、出隆、山口正太郎、

新明正道、今中次麿ら大学の新進気鋭の研究者であり、渡欧留学する人も少なくなかった。たとえば、自由大学に好意的な講師の1人であった恒藤恭は1924年3月から26年9月まで、第1期から第3期まで3回出講した出隆は26年1月から27年9月まで、第2期・第3期に2回出講した山口正太郎は24年3月から25年7月まで欧州諸国へ留学している。さらに波多野鼎・佐野勝也が1925年に九州帝国大学へ、新明正道が26年に東北帝国大学へ転勤したことも重なり、新しい講師の補充が必要となっていた。はじめ講師の斡旋は土田杏村の努力にまつところが大きかった。土田は、1922年8月に山越脩蔵に送ったと思われる手紙では、「此の事業（注、自由大学のことー引用者）は永久的□□で、二年三年で完成せらるものではありませんし、私も□□全力を打ち込んでその仕事にあたって見るつもりです」と、自由大学に「全力」であたる意思を伝えていた（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、年不詳8月15日）。しかし、かれの病気の悪化は、上田自由大学への出講も2回にとどまり、1922年10月が最後となった。それ以降は、講師の斡旋や連絡その他のやり取りは手紙の往復で行われていたが、自由大学に理解をもつ講師をえることは次第に困難となっていた。

そして病気の土田に代わり大きな役割を果たすようになったのが、1923年10月から「骨お埋めるつもり」（タカクラ 1951：42）で別所温泉に移り住むようになったタカクラ・テルであった。タカクラは、土田とともに伊那自由大学の横田憲治や八海自由大学の渡辺泰亮と手紙の往復をしながら講師の斡旋にあっている。また、山越脩蔵に対しては、第4期講座の開講を前に、講師の調整ができたことをよこび、「自由大学の講師大分旨く行きさうで何よりに存じます 何しろ今年は一つうんと馬力をかけてやりませう」と書き送り（山越修造宛高倉輝の手紙、1924年9月19日）、自由大学協会の機関誌『自由大学雑誌』の創刊号が刊行された際には、「自由大学雑誌評判がよくて何よりでした。二号はぐっと好いものにしたいと思ってます。必ず御執筆願ひます。将来経営の方は猪坂兄に任せるとして自由大学その他の根本の方針に就ては主としてあなたにやって頂きたいものです。何とぞよろしく御願申上げます」と書き送り、山越と猪坂との役割分担を提案している（山越修造宛高倉輝の手紙、1925年1月22日）。

山越は、今後の自由大学のあり方について、各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会がつくられたものの、講師のやりくりが難しく、事務局も大変であったことから、自由大学に関心があり大学院に在籍する若手の研究者を自由大学専属の講師とし、「専属の講師五六名を置いて、各大学を廻りその外に従来のように大学に居られる先生方の都合の出来る方々を適宜に来講していただいてもどうか」という提案を土田にしたところ、土田から次のような手紙が送られてきた（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1925年5月15日、山越 1978：43）。

「自由大学もこの儘ぢゃあいけません。何れは君の言はれる様な研究所をつくり、専任の講師を得なければだめです。其れは必らずしなければならぬ事です。今の様に臨時に雇ひ講師を得るでは心細い次第です。文化学院は僕の生涯に起す自信が僕について居ますが、此れはそがぬつもりです。自由大学の方のは、何から仕事をはじめめるかが大分問題になります。今のところ私の考へでは、全く自由な、一つの独立した大学をつくる方が、目立つ仕事ではないかと思つて居ます。大した金はいりません。教授二千円俸給位のもの五人あればよいのです。あとはだんだん増加して行きます。そして一方で大学をつくって置き、他方では個々の自由大学を指導して貰へば此れが何よりよいと思つて居ます。地方へ経費を負担させることは考へ物でせう。といふのは、地方も今は教育費の重荷に堪へないで居るからです。何にせよ、自由大学の将来については大いに考へなければなりません。僕ひとりですべての事を空想して居ます。一体が日本の教育制度全体がいけないのです。これからはじめて改造していかなければなりません。」

土田は、山越の提案に賛成し、専任の講師を置く自由大学の設立構想を示したが、これが具体化されることはなかった。この手紙を最後に、土田から山越に宛てられた手紙は途絶えることになった

(48)。

猪坂は、山越が将来構想として、「現在の自由大学はまだ僕等の理想の第一段階に過ぎない、僕等は自由大学に権威ある図書館を設けたい、完全なる講堂も造りたい、更に専属の講師も得たい、これらは僕等の為事の第二段階として必ず実現させなければならない事だ」と言っていたとし、「これ程の希望は達せられないとしても、図書館だけはどうか工面しても是非得なければならぬと僕も思ふ」と、『自由大学雑誌』に書いていた(猪坂 1925a : 17-18)。だが、聴講生の自学自習に必要な図書館を設けることは、聴講者が減少した自由大学にとって財政的にも困難なことであった。

自由大学は、「被教育者本位」に「自治的」に運営されることを理念としていたが、さまざまな問題点はほとんど改められることもなく、いわば理念と実態とは乖離したまま講座を重ねてきたといえる。

そのうえ自由大学の運営者たちもそれぞれ事情をかかえるようになっていた。金井正は、自由大学よりも農民美術に力を注がざるを得なくなっていた。1922年末に神川村大屋に北欧風三角屋根の専用建物が建てられ、農民美術は順調に発展していたが、突然転機が訪れる。関東大震災である。震災によって農民美術の最大の販路である東京が壊滅したため、日本農民美術研究所は1924年末から農閑期の講習だけでなく通年の講習も開始し、同時に全国各地での地方講習会を活発化させ、それを基盤として全国に農美生産組合を設立する方針を立て、同年9月には月刊誌『農民美術』を発刊する。また、25年9月には日本農民美術研究所の財団法人化が認可され、農林省の副業奨励補助金を得ることに成功する。この農民美術の事業を進めていくために金井が、研究所の経営に専従しなければならない状況になったのである(清水 2016 : 76-78)。

自由大学創設の大黒柱として活躍してきた山越脩蔵も、銀行の重役であった父元三郎が退職の際に出資金代わりに経営を引き受けた製糸工場が不振となり、その経営に専念するようになった(小崎 1974 : 63)。また、上田自由大学の専任理事、自由大学協会の専務幹事として運営を担っていた猪坂直一も、蚕糸雑誌社の仕事のほか、埴南農蚕学校の教員、25年には信濃日日新聞の主筆となるなど忙しくなり(猪坂 1967 : 36)、また体調が優れなかったことも重なり、「自由大学への努力を失っ」ていった(筆者宛猪坂直一氏の手紙、1972年6月23日)。

こうして上田自由大学は、1926年3月の第5期講座の閉講を機に、ついに中断せざるを得なくなった。

自由大学の熱心な聴講者でもあった勝俣英吉郎は、1924年7月に上田市長に就任すると、教育・文化行政に重点を置き、市営運動場の建設、博物館の設置、市立図書館の充実、上田市史の編纂などに尽力した。不振をかこっていた図書館に対しては図書館経費の思い切った増額と自由画教育の協力者の一人である岡崎袈裟男を図書館員に登用し、図書館発展への道を開いたが(是枝 1987 : 82-85)、もう1つ力を入れたのが上田市民大学の開講であった。この市民大学は、「常識ヲ養ヒ人格ノ向上発展ニ資」することを目的とした「市民教育機関」にするというもので(「上田市民大学設立ニ付テ」)、24年8月の夏期講習会(早川直瀬「経済学」、白石喜太郎「行政学」、倉田白羊「美術瑣談」)のあと、9月の藤沢直枝「郷土史」から本講座を開講し、12月のタカクラ・テル「文学論」は上田自由大学との合同開催であった(49)。自由大学が中断した26年5月からは会員組織による3期3か年継続の上田市民大学として再出発し、上田市立図書館を会場に、主として早稲田大学の教員が講師として出講した。第1期では金子馬治、二木保幾、田中穂積、西村真次、林癸未夫、吉江弧雁、遊佐慶夫が講師となっている。市はこの事業に600円の補助金を出すなど、市民大学の運営に本腰を入れているが、これは自由大学の方式が市政の中に組みこまれたことを意味する。また、これは上田自由大学が中断したことも関係していたと考えられている。すなわち、「自由大学を継承しなければならないという思いが勝俣市長にはあったのではないか」(上田市誌編さん委員会編 2001 : 67)とされている。こ

の上田市民大学は1931年3月まで続けられたことが知られている（上田市誌編さん委員会編 2001：65-69；同編 2002：110-118）。

8. 上田自由大学の再建

1920年代の後半をつうじて継続した農村不況は、1929年に始まる大恐慌によっていっそう深刻化した。ことに商品化率100パーセントの養蚕－製糸業を主要産業とする上田・小県地域では、生糸価格・繭価格の暴落によって、深刻な状況が生じた。ふたたびこの地域の繭価をとってみれば、3.75キログラムあたりの平均価格は、1926年の9円50銭から、27年－6円41銭、28年－6円77銭、29年－7円51銭と下落し、30年には3円14銭の安値に落ち込んだのである（上田市史編さん委員会編 1970：402）。この「繭価暴落ニヨル農家収入ノ激減ハ農民ノ生活ヲ脅威」し、「農家経済ノ破綻」をもたらしたのであって、29年12月現在の、長野県下農家1戸あたりの負債額は、平均868円にのぼり、年間所得の約2倍に達していた。ことに小県郡の場合には、1163円と県下最高の負債額であり、この数字によっても恐慌の打撃がより深刻であったことが知られる（長野県内務部農商課：1932、pp.3-7）。農業恐慌下の小県郡浦里村の状況は、「昭和五年突如トシテ襲来シタル農業恐慌ニヨリ、一般農産物価ノ下落、殊ニ繭糸価ノ暴落ハ本村農家ニ甚大ナル打撃ヲ与ヘ一戸当リノ収入ハ五百円ニ激減シ、負債総額ハ百十五万余円（一戸当リ一千四百三十七円）ヲ算シ、之ガ重圧ト所得ノ減少トハ村民生活ヲ脅威シ、更ニ浦里村民ニ依ツテ設立セラレタル越戸銀行（資本金二十万円）・浦里倉庫株式会社（資本金十万円）等ノ破綻、及び村内頼母子講ノ全面的休止等相継ギ、人心ノ不安焦燥ハ、遂ニ左翼農民組合ノ発生ヲ見ルニ至リ、青年訓練所ノ潰滅トナリ、村税ノ滞納数千円ニ及ビ各種ノ支払ハ全ク停止シテ、本村ノ前途実ニ憂慮ニ堪ヘザル状態ニ陥レル」（農林省経済更生部1937）という記述に、その一端をうかがうことができるが、この恐慌下の惨状は、浦里村にかぎらず、県下の農村に共通する現象であった。

この農村不況の深刻化が民衆の意識をもゆさぶることに県当局は危機感をいだいていたのであって、社会教育主事丹沢美助は、「数年打続ク農村不況は農家の生活を脅威し延いては其の思想に大なる影響を及ぼし、農村不安の実情は真に憂慮に堪へざるものがある」と、その危機感を表明していた（丹沢 1929）。それゆえ県当局は国民の思想「善導」に系統的に取り組んでいった。丹沢は、「男女青年団、青年訓練所、図書館、青年体育等は勿論、一般民衆の思想、宗教に向つても全力を傾注し、健全なる思想の養成に努力しつつある」と、県の県民教化の状況を述べている（丹沢 1929）。

この時期、国家の側からは、地方官庁を軸に宗教・教化団体を動員した「教化総動員運動」が展開された。長野県でも、「国家観念ヲ明徴ニシ国民精神ヲ作興シ、経済生活ノ改善ヲ図リ国力ヲ培養スル」の「二大目標ニ向テ全県一斉ニ歩調ヲ一ニシテ一大教化運動ヲ興」すべく、この運動を推進した（文部省社会教育局 1930：265）。それは、不況の原因を国民の思想的墮落に帰し、「百弊の由つて生ずる根本を成すものは民心の弛緩是れなり」（文部省社会教育局 1930：2）という認識を根底に、経済危機の打開と国民の思想「善導」を一挙にたくらむものであった（尾川 1968）が、村落支配層がこの教化総動員のもとに結集していったことは、たとえば『本原時報』紙上において本原村助役清水実が、「我邦現下の情勢は、世局重大にして、思想上経済上、共に危機に瀕し、不安は愈々深刻の度を加へ来らんとす。今にして国民の猛省なくんば、前途真に深憂に堪へざるものあり。而して之れが匡救の方途は、固より多々ある可しと雖も其の根柢としては『一つは国体観念を明徴にして国民精神を作興する事』『一つは経済生活の改善を図り国力を培養する事』の二点に帰するものなりと思惟

す」と述べ、この「二大項目を根柢として之れが励行に各自相戒めて時局に処するの自警自覚の下に、全村拳つて、歩調を一つにし之れが徹底を期する可く努力せられんこと」を訴えていたことにみることが出来る（清水 1930）。このような村落支配層をとおしての教化は、村に少なくない影響を及ぼしていた。

また、国家による国民教化の重要な柱の1つであった文部省主催「成人教育講座」は、1926年以降全国的拡張が図られていった。上田・小県地域では、1926年、27年、30年、31年と上田市に開設されている（文部省社会教育局 1932）⁽⁵⁰⁾。深刻化する農村不況の中で、状況を打破する何らかの指導原理を求めようとする青年の中には、それを「成人教育講座」に求める場合も少なくなかった。青年のひとりには「ときあたかも厳寒の砌凍る朝大地を踏みしめ、薄暮の吹雪と戦いながら、希望と堅き信念をもつて、この辛辣な農村不況打開の一助にもと」受講している（つちや生 1931）。

上田自由大学に始まり、伊那自由大学、松本自由大学と広がった自由大学運動は、県内の青年たちに影響を与え、地域の青年会や青年有志が「自由大学」の名称をつけて自主的に講師を招いて学習する動きがみられた⁽⁵¹⁾。しかし、その一方で、長野県内では、おなじ「自由大学」の名称を用いながらも、農本主義的立場から農村青年の教化を目的とするものもあらわれていた。

更級地域では、長野県更級農学校長矢田鶴之助が組織した農村教育研究会をを母体に1926年2月、おもに同校卒業生を対象とする「信濃農村自由大学」が設立されている（『更農』第45号、1926年3月13日）。この自由大学は、「農村文化振興ノ為メ適切ナル高等教育ヲ施ス」ことを目的として掲げていたが（「信濃農村自由大学々則」）、「大いに農村問題を研究し地方開発人心作興に資す」る目的で始められたもので（『更農』第56号、1927年2月25日）、「農村社会教化ノ別働隊」（『長野県更級農学校沿革誌』）の役割を担うものであった。講座は、26年3月から41年3月まで継続しているが、農業・農村問題、移殖民問題、思想問題に関する内容の講座が多く生まれ、初期の講師には永田稠（日本力行会長）、那須皓（東京帝国大学教授）、木村正義（文部省書記官）、白石喜太郎（長野県社会課長）、満川亀太郎（東京拓殖大学教授）、田中穂積（早稲田大学教授）、針塚長太郎（上田蚕糸専門学校長）などが招かれている（小平 1995：84-90）。また、上高井郡では、1928年9月、綿内村青年会など南部4カ村青年会が、綿内村小学校長柄沢褒作の影響を受けて、「冬期自由大学」を設立している。この自由大学は、「疲弊困憊の極に瀕せる農村の現状に鑑み一つは以て農村振興の指針を与へ一つは以て農村青年の自覚を促し真に質実剛健なる青年を養成する」（「趣意書」）ことを目的とし、県から補助金を受けて1942年まで継続しているが、講師には江渡狄嶺、浜田修蔵（社会教育主事）をはじめ大川周明、橘孝三郎などが招かれたのである（『綿内村青年団創立三十週年記念誌』1953年）。

上田自由大学が中断した前後には、このように自由大学運動に対抗して「自由大学」を呼称するものもあらわれ、国民教化による囲い込みがすすめられていた。

だが、長野県では、深刻な農村不況を反映して、鋭角的な農民運動・無産政党運動が展開された。いま小作争議件数についてみれば、1926年に26件であったのが、27年－50件、28年－63件、29年－59件、30年－67件、31年には75件と、恐慌期に入ってから激増しているのが知られる（長野県内務部農商課 1932）。1930年11月21日の長野県会で県会議員宮下周は、農村が「如何ナル最大級ノ文字ヲ以テシテモ到底形容スルコトノ出来ナイ困窮ノドン底ニ呻吟シツトアル状態」のもとでは「憂フベキ思想問題ヤ其ノ他幾多ノ不祥事件ガ相次で起キハシナイカト云フコトヲ憂慮イタスノデアリマス」と発言したが（『昭和五年十三回長野県通常県会議事日誌』）、その「憂慮」は現実化していたのである。

宮下の出身村である浦里村をはじめ上田・小県地域では、1927年の大霜害で桑園は壊滅的な被害を受けた。県下では、27年4月に長野県小作組合連合会が組織され、大霜害・金融恐慌下で農村モラトリアム運動を展開した。

翌28年4月14日には、三・一五事件で痛手を受けた農民運動の再建のため、タカクラ・テル、青柳藤作（長瀬）、山本虎雄（青木）を中心に、上田・小県地域6組合によって組織された上小農民組合連合会が結成された。そして、29年4月の村議選では公認候補を各村で当選させて政治的進出をはかる一方、納税延期・農会廃止・借金支払延期・金利質屋利子引下げなどの要求を掲げた不況対策運動を活発に展開した。この上小農連は、30年11月には全農全会派上小地区委員会となり、県下最左翼の農民組合運動を展開していったのである（上條 1973：96-101、上小農民運動史刊行会編 1985）。

こうして上田・小県地域では農民運動が活発に展開された一方、この地域の青年たちの多くは、厳しい不況の現実に「農村受難」の想念をいだき、ニヒリズムをはらみながらも”急進化”していた（鹿野 1973：122-135）。状況打破への方策をさぐっていた青年たちの意識状況は、小県郡連合青年団が1928年3月の長野県連合青年団の研究大会に、「近時農村の行き詰まれ留根本的原因及之が解決方法如何」という議題を提出したことに示される。この提案理由はいう（天田 1972、所引）。

「農村経済は益々行き詰まりつつある状態である。此の目前の事実を如何になすべきか。之が解決者は机上の学者、政治家ではない。実生活の上に体験を持つ吾々自身でなければならない。斯るが故に此問題を一片の言葉の遊戯でなく実際の立場に立つて研究してみたいと思ふのである。」

深刻化する農村不況に対する農村青年たちの反応は、こうして鋭角的にならざるをえなかったが、それとともに小県郡連合青年団は”急進化”していく。すなわち、長野県連合青年団の動きと歩調を合わせて、青年訓練所廃止運動や青年団の「自主化は、当然認められるべきものである。思想的に危険などということはない」（『殿城時報』第28号、1929年7月1日）として青年団自主化運動を、のちには電灯料値下げ運動を激しく展開していったのである。

上田自由大学は、このような状況を背景に再建され、講座を組織していく。その運営を担ったのは、激しい社会的実践をおこなっていた小県郡連合青年団の幹部の青年たちであった。自由大学が中断してから2年が経過した1928年3月、「信濃自由大学は、過去四年間継続され、我等は非常な恩恵をうけて来たのであるが、その後種々な都合によつて二年間中止のやむなきにいたつていた。しかしこの大学の閉鎖は、地方民衆のこの上もない不幸だといふのでその復活を希望するものが多かつた」（『神川』第21号、1928年3月1日）として再建されるが、そこには状況打破に動き始めた青年たちが、その社会的実践の「思想的な根拠を求めて」再建したといわれている（タカクラ・テルより聴取、1972年8月14日）。再建を呼びかけたのは、山浦国久・堀込義雄・細田延一郎・石井清司らの青年たちであったが、山浦は1928年度の小県連合青年団長で27年・28年度の神川青年会長であり、堀込は24年・25年度の郡連青幹事で25年・26年度の神川青年会長、細田は25年・26年度の郡連青団長、石井は27年度の郡連青団長であったように、いずれも小県郡連青の幹部の青年たちであった。それに全面的に協力したのがタカクラ・テルであった。タカクラは、自由大学再建の直前である1927年11月の小県郡連合青年団幹部修養講習会において、「農村の青年は社会のあらゆる方面に精通し一旦社会にある現象等起こつた場合此を批判して置く事の出来る程度の智識を養つて置かねばならぬ」と述べていたが（宮崎新一・他 1928）、この発言は、自由大学の再建と直接結びつくものではないにせよ、再建の中心にいたのが青年団幹部クラスの青年たちであることを考えると、その間の事情を示唆しているように思われる。

1928年2月、上田自由大学の再建を呼びかける手紙（上田市立図書館所蔵）が、山越脩蔵・山浦国久・堀込義雄の連名で出された。この手紙は、半紙に謄写版刷りしたもので、それには同じく謄写版刷りの「信濃自由大学趣意書」、土田杏村「自由大学へ」、恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君」、新明正道「自由大学の精神」が同封された。このことは大正期の自由大学を引き継ぐものであることを示していた。

「拝啓

毎日お寒いことでありますが貴兄にはお変わりも無き事と祝福申し上げます。

扱て突然で大変失礼であります私共は今回信濃自由大学の復活に就いて是非貴兄の御助力をお願いいたしたくて斯の手紙を差上る次第であります何卒失礼の段は御容しございます。

既に御承知の事と存じますが信濃自由大学は別紙趣意書に依って設立せられ四年間経営が続けられてきました。その間私共はその恩恵を受けて大いに啓発される場所があったのであります。然るに種々の支障から休まねばならなくなつて二年間開講を見る事ができませんでした。ところが地方文化開拓の為には唯一の機関たるこの大学の閉鎖は地方民衆の此上もない不幸損失であるといふのでその復活を希望する人達が少くありません。私共は是等の有志諸君と共にこの有意義な文化運動機関の再興を熱望してやまないであります。

それで経営方法等にも考慮いたしたいのでありますが要するに多数の賛成者の御助力に待つより外仕方ないのであります。

何卒別紙講師の説等も御参考としてお読み下さいまして御賛成御助力をお願いいたします。

尚右経営の為には五十人以上の正会員を得て年額五円乃至拾円(額は会員数の多寡によって相異)の会費により五日間、若しくは三日間の講座を五回乃至八回開く予定であります。

昭和三年二月二十二日

山越 脩蔵

山浦 国久

堀込 義雄

様

」

この手紙に名前が見られるように山越脩蔵は、呼びかけ人のひとりになっていたが、自由大学の運営には参加しなかった。自由大学からおりた理由を、のちに次のように回想している(山越 2006: 196)。

「これは私個人の考へであつたが、自由大学も数年連続し来たしそれと私個人の種々の事情もあり又個人的にこの事業を独占すべきものでなくこの様な大事業は、なるべく多勢が関係し、又広い社会との接触面を持つからべきものであるから此辺で後継者にバトンを渡すがよいと思つたので同村の有能な後輩山浦国久、堀込義雄君等と猪坂君等に渡した。」

次いで3月にはいり準備が整つた段階で、下記に示すような講座再開を知らせる案内状(上田市立図書館所蔵)が会員に配布された。案内状には猪坂直一の名前も見えるが、かれもまた再建された自由大学には参加しなかった(52)。大正期に運営の中心に立っていた人びとは、再建後のそれには関係しなかったのである。

「拝啓

漸く春のけはひの感ぜらるゝ様になりました。

さて御存じのこととは思ひますが、上田自由大学はかつて四年間、わか地方文化開発のために開講され、私共の啓発さるゝ所多大だったのであります。その後二年間種々の都合により中止の状態でありました。その後再興希望の方多くよりより話題に上つたのであります。今度漸く熟し、こゝに再び開講することとなりました。何せ継続会員によりてのみ維持し発展し得ることございます故、何卒御助力御讃成下さいまして改めて正会員として御加入願ひとうございます。暫定規約といたしましては毎年十一月から翌年三月までに三回内至五回の講座をひらいて、主として文化科学について聴講研究いたしたく、会費は年額五円として之を三回に分納していただく様にいたしたいと思ふのであります。(臨時会員には一講座二円負担していただきます)

つきましては第一回講座を佐によって開講いたしたいと思ひますが、御知人多数御誘ひ合せの上

御出席願いたく、初日に第一回納入分金二円御持参下さいます様願ひ上げます。

規約その他の更生は第一回講座開講の際御相談願いたく存じます。

一、第一回講座期日 昭和三年三月十四、十五、十六の三日間

一、毎日午後六時半より

一、講師 高倉輝先生

一、科目 日本文学研究

一、場所 上田市新参町 上田図書館楼上

尚正会員申込は神川学校堀込義雄来る十三日迄に願います。

昭和三年三月四日

石井 清司

細田延一郎

猪坂 直一

堀込 義雄

山浦 国久

様

」

この案内状や、上田毎日新聞や北信毎日新聞、信濃毎日新聞、時報では神川村の『神川』、塩尻村の『塩尻時報』などでの広報のあと、再建第1期第1回講座が開かれた。

第1回講座は、3月14日から3日間、タカクラ・テルが講師となって「日本文学研究」を講じた。このとき、会場の上田図書館に集まったのは60名で、当時の新聞記事によれば、婦人数名も加わり「盛會をきはめた」とある。そして、その講義内容は、「世界の人類を語学上より分類して日本文学に及ぶまでを述べたもの」であったという（『北信毎日新聞』1928年3月16日）(53)。中沢鎌太の筆記ノート「自由大学筆記其七」には3月14日の講義の一部が残されているが、それによれば、「日本民族とは何か、言語は何か、文学は何かと云ふことに就いて述べる」とあり、「エルンスト・ヘッケルと云ふ人が出て民族間には語彙が移るが文法は移ることが出来ぬと云ふた 之れは一の定説となった 民族を決定するものは文法だと云ふことになった」と述べたのち、言語を「印度独逸（印度ゲルマン）語族」「ウラルアルタイ語族」「セミチツク語族」「印度支那語族」「マレイ、ポリネシア語族」の5つに大別して民族による言語の違いを述べている。そして、「ウ、ア民族に共通する原始宗教（注、が一欠落か、引用者）ある」とし、「今の日本は暖国であるから太陽の有難味はないがよく原始宗教を伝いてゐる」、「古事記や日本書紀の中心をなす岩戸嶽はシヤアマニズムの祭典其まゝである」、「鳥井、注連縄はシヤアマニズムの特徴で外ニはない」などと説明する講義であった。中沢鎌太は、日記には「新しい面白い話であった」と、講義の感想を書いている（「中沢鎌太日記」1928年3月16日条、天田・山野 1975：48）。中沢の感想からは、タカクラのどの話が具体的に「新しい面白い話」であったのかはわからないがおそらく、ウラル・アルタイ語族の原始宗教に共通するものが古事記・日本書紀にもあるとの話などが新鮮なものであったと思われる。

この時期、タカクラは、常楽寺友月庵から古平家、そして27年3月には柏屋別荘主人齋藤房雄の好意で建てられた思温荘に住居を移している。タカクラの家には自由大学に参加した青年たちや周辺の農民たちが集まった。「一年分の小作料を支払うと、たちまち家族の食料がなくなる。貧農小作人が、当時、わたしを取りまいていた。いやでも、わたしは、農業の問題に新しい目を向けないわけにはいかなかった」と、回想している（タカクラ 1981：4）。その中でタカクラは、上田に滞在したことのある大原幽学を知り、農村共同組合こそが農村改造の道であると考えようになる。そして浦里村の越戸共同経営組合に関わる。その後、上小農民組合連合会の結成に関わり、農民運動に活動の重点を移していく中で、自由大学の講義内容も「文学論」から上田自由大学では「日本文学研究」、伊那自由大学では「日本民族史」へと変化する（山野 2008：108-112）。タカクラは、次のように回想

している（タカクラ 1973）。

「わたしは、ロシア文学・フランス文学・イタリア文学などの代表的な作者の作品を、具体的に紹介して、文学ぜんたいにたいするみとおしをそれらの勤労者にもってもらおうと思って、始めました。ところが、そうしてやっていくうちに、それらにたいする会員たちの驚くような熱意に、すっかり圧倒されると同時に、会員たちは別のもっと熱烈な要求をもっていることを、わたし自身がひしひしと感じないわけにはいかなくなりました。」

タカクラは、一段と厳しくなる農村不況の中で生活する農民たちの学習要求を汲みとり、それに応えるかたちで自由大学の講義内容を組み替えていったのである(54)。

28年11月7日には、三木清の開講を前に、上田図書館でタカクラも参加をして準備相談会が開かれている（『上田毎日新聞』1928年10月5日、10月10日）。

そして第2回講座が三木清を講師に開講された。かれは11月19日から3日間、「経済学に於ける哲学的基礎」を講義したが、会場の上田市海野町公会堂には25名の聴講者が集まった（「上田自由大学会計簿」）。上田毎日新聞は、講義の様子を「定連として何時も欠席されたことのない上田小学校の清水千代先生外二十余名の聴講生が恵比寿講の雑踏を外に最後迄熱心に主としてマルクス主義に就てを聴いて八時半参会した」と報じている（『上田毎日新聞』1928年11月21日）。また、聴講者の小学校教員・武舎功は、「教育の中に階級性があることや、唯物史観の骨子を話された」と回想している（武舎功より聴取、1976年7月23日）。このときの三木の講義は、タカクラの回想によれば、「講義の題目は『哲学論』というのでしたけれども、内容はけつしてそれまでの哲学の講義ではなく、ひじょうに多く政治的なものをふくんで」いたといわれる（高倉 1946：81）(55)。この時期の三木清は、『唯物史観と現代の意識』（1928年）をだし、また、羽仁五郎とともに『新興科学の籟のもとに』（1928年10月創刊）を刊行するなど、マルクス主義に接近していた時期であり、そのかれを講師として招いたところに、この時期の自由大学の聴講者の意識動向をみるができる。

だが、その後の講座の開講は、再建時に構想していたようにはゆかなかった。1929年3月14日にはタカクラ・テルの講義が予定されていたが、中止されている（上田自由大学「自由大学期日変更ノ件通知」1929年3月12日、『上田毎日新聞』1929年3月14日）。その理由は、29年3月1日の上小農民組合連合会第2回大会に招かれて来田した山本宣治が、3月5日に東京で暗殺され、山宣と親戚関係にあったタカクラが急遽、葬儀のために上京するという事件があり、それが影響したのである。

その後、29年12月からは第2期講座が生まれ、第1回講座にタカクラ・テル「日本文学研究」、第2回講座に安田徳太郎「精神分析学」、第3回講座に三木清「社会問題研究」の講座が計画された（『北信毎日新聞』1929年12月4日）。

その第1回講座は、12月6日から4日間、タカクラ・テルが「日本文学研究」を講義し、28名の聴講者があった（「上田自由大学会計簿」）。中沢鎌太の筆記ノート「自由大学筆記其七」によれば「之れより古事記の研究を致します」とあるように、「古事記」のあらましを説明した講義であった。その中には、「神武天皇それに似たものはあつただらうけれどもそう云ふものはない 神話だ それ以後の天皇は皆なかつたであらう 崇神天皇迄は系図のみで話がない 崇神天皇の時の話と云ふのは伊須気比売の伝説を少し変いて持って来た」という記述もあり、神武天皇の存在に否定的な説明をしているのが知られる。「古事記」の説明のあと、文学に関連して、「民族移転の時に、必ず郷愁がある。それが個人的の感情でなくて民族の哀愁で民族的の哀愁である。よく文学に顕はれてゐる子守歌の上によく表れてゐる。日本人ニ最初ニ□□□は無常感である これは民族移転の哀愁と最もよく結び易い仏教では無常感は大なる位置を為してゐるのではないか我文学では重要なものとなつた 芭蕉の俳句に表れた『さび』『しほい』『ひびき』『にほい』」といったことが語られたことが知られる。このタカクラの講義を聴講した中沢鎌太は、日記に、「海野町の公会堂ニ自由大学が開かれこれニ参る。

高倉輝先生の日本文学史である。参るときは年老いた為めか思ひであったが、参って見れば中々愉快であった。高倉先生の話は実ニ面白く且分り易い」（「中沢鎌太日記」1929年12月6日条）と書き記し、講義は好評であったことが知られる。当初の講義の予定では12月8日までの3日間であったが、1日延長され、中沢の日記によれば、「今晚迄と云うのであったが明晩までる筈だった為め未了であった」とある。また最終日の9日には「今日も自由大学に参る。終了した。今晚は少し遅れて参った。茶話会があった」（同前1929年12月9日条、天田・山野 1975：48）とあり、講義の終了後、茶話会があったことが知られる。

次いで第2回講座は、30年1月に安田徳太郎の「精神分析学」が開講されたが、その開講案内状は次のようなものであった。

「上田自由大学の第二回講座を左の如く開講仕り候間同好の士多数御誘合はされ御出席相成度御通知申上候

◇精神分析学

京大講師医学博士 安田徳太郎氏

◇精神分析学はプロレタリアの生み出した唯一の興味ある学問である

二十四日 ヒステリー分析、夢の解釈

二十五日 リビド説、神経症

二十六日 芸術社会等の精神分析、マルクス主義とフロイト主義

◇新しく会員となられる方は全員金壹円五拾銭御持参被下度候

昭和五年一月十八日

」

案内状には「プロレタリア」の文言が使われていて当時の自由大学の雰囲気をつかうことができる。この安田の講義は、1月24日から3日間おこなわれ、44名の聴講者があって終了した（「上田自由大学会計簿」）。この講義を聴講した中沢鎌太は、「診らしい学問だと面白く聞いた」と、日記に書き（「中沢鎌太日記」1930年1月24日条、天田・山野 1975：49）、数少ない女性の聴講者であった深町（旧姓三井）広子⁽⁵⁶⁾は、その講義内容について、「どなたでも、フロイドの精神分析の一通りは面白くわかった筈です」と述べ、さらに、夢の話で、夢には色がないという話に対して「先生、私のゆめにはいつも美しい色が見えるのですけど」と思い切って質問をしたら、「即座に先生は『あー そう それは願望の成就ですね』にっこりされておわり」ということがあったとし、また、「どなたか安田先生に質問したら、小児病的と言う批^{ママ}諭があった。私はその時左翼小児病と言う言葉を覚えたのです。（中略）青年たちの間で簡単に小児病的と言う言葉がやりとりされてい」た、と講義時の様子を回想している（深町 1974：41-42）。

なお、安田は、1月27日、浦里村青年会・処女会合同講演会で「現代の母性問題」を講演している（『浦里村報』第85号、1930年2月20日）。

第3回講座は三木清の「社会問題研究」が予定されていたが、開講されなかった。その理由は不明である。30年2月20日投票の第17回衆議院総選挙に対して、タカクラ・テルを委員長とする東信無産派選挙対策委員会は、上小農連委員長の青柳藤作を候補者として擁立することを決定し、42回の演説会を開くなどの選挙戦を行った。この選挙期間中、三木清は東信無産派の事務所を訪れ、応援を約束している（松本 1988：112）。しかし、上田自由大学には出講せず、その後、三木は、2月14日から16日まで伊那自由大学に出講している。こうして第2期の講座はタカクラ・テルと安田徳太郎の2回の講座を開講して終わった。

この時期の聴講者は、(1)小県郡連合青年団の幹部クラスの青年たちで、再建発起人となった堀込義雄⁽⁵⁷⁾・山浦国久⁽⁵⁸⁾・細田延一郎・石井清司のほか、山辺聖（神川）・矢島二郎（神川）・宮下周（浦里）⁽⁵⁹⁾・石井泉（泉田）⁽⁶⁰⁾ら、(2)大正期からの聴講者である松前七五郎・中沢守平・中沢鎌太・清

水千代・花岡たかよ（以上、上田）・青木猪一郎（殿城）・山岸忠（長瀬）・等々力直泰（川辺）ら、そして(3)上小農民組合連合会の組合員の青年たちで、井沢讓・宮下芳勝・井沢国人（以上、浦里）・横沢要（神科）・久松定勝（泉田）や全協交運分会の井沢政則（上田温電、浦里）らの3つに大別できる。なかでも農民組合運動に関わっていた貧農層の青年たちが参加するようになり、タカクラによれば、「自由大学に、知識より分析を多く要求するようになり」、それは「『知識』から『実践』の方向へ進」むことになった（小林利通宛タカクラ・テルの手紙、1972年3月23日）。青年たちは、自由大学の学習と青年団運動や農民運動など地域での実践とをむすびつけてゆこうとする動きもみられたのである。

しかし、農業恐慌の深刻化と生活難の継続は、自由大学の継続を破綻させ、講座の継続を困難にした。自由大学の聴講者の生活を支えていた養蚕－製糸業は、恐慌によって壊滅的な打撃をこうむり、1講座2円程度の聴講料を出して講義を聴く青年たちはほとんどいなくなったのである。タカクラ・テルは、自由大学の経営が困難になった原因の1つを、こう回想している（高倉 1937：60-61）。

「自由大学の運動わ、昭和四・五年頃から次第に衰えて来た。その第一の原因わ農村の激しい不況であった。養蚕の中心地帯である長野県の農村わ、繭値の下落によって、特別の苦境に落ちた。すべての農家がひどい負債のために実際餓死の一步手前に追いやられ、各地に小作争議その他の闘争が頻発した。月月二円乃至三円の会費お出して講義の聞ける農民が殆ど無くなった。そこで、会員が次第に少なくなって、とーてい経費の維持が出来なくなった。私の講義だけが最後まで聴講者が多かったので、初めその会費おほかの講義の費用に廻したりしていろいろ工面おしていたが、それもしまいに続かなくなった。」

じじつ第1期第1回講座は60名の聴講者があったため、会計報告は収入120円に対し支出59円96銭で50円4銭の余剰金を記録している。けれどもその黒字は長くは続かなかった。その後は講座を開講するごとに財政状況は悪化し、第2期第2回講座のときには14円53銭の不足が生じ、それを借入金（塩尻村の蚕糸家佐藤嘉三郎から100円借り入れした）で補う状況になっていたのである（「上田自由大学会計簿」）。

だが、自由大学の継続が困難になったのは、農村不況による経済的破綻だけでなく、講師として、また講師の斡旋に努力するなど自由大学を支えていたタカクラ・テルが、活動の重点をしだいに農民運動に移していったことも大きな要因であった。1929年3月に山本宣治が暗殺された直後、タカクラは、「山本の死が今の社会及び階級闘争の戦野に一体どう云ふ意味を有つかと言ふ事は、山本の死その物より、それを後の者がどれだけ有意義な踏台とするかと言ふその度合で決する事である」と述べて（高倉 1929：46）、山宣亡きあと、この地域の農民運動に関わっていった。上小農連は、3月15日、上田市公会堂で「山本代議士追悼大演説会」を開いたが、タカクラの「山本の一生及び凶刃に倒れたる最期より葬儀に列せる事実の報告」の演説に、聴衆は慟哭したという（『北信毎日新聞』1929年3月16日）。30年2月の第17回衆議院総選挙では、東信無産派選挙対策委員会委員長となり、上小農連の青柳藤作の擁立をはかったが、供託金が確保できず断念している。5月1日には、山本宣治記念碑除幕式がタカクラ宅の庭先で行われ⁽⁶¹⁾、その後、上田駅構内で北信労農団体協議会主催のメーデーが開かれ、上田公園までデモ行進が行われたが、これがこの地域での本格的な最初のメーデーであった。メーデー解散後、上田市公会堂で記念講演会が開かれ、タカクラが記念講演を行っている（上小農民運動史刊行会編 1985：115-131）。この時期のことをタカクラは、「わたしの考え方・立場・行動がしだいに大きく変わっていきました。つまり、しだいにしんげんに共産主義者としての道をおるくことになりました。具体的には、しだいに、労働者・農民といっしょに労働争議や小作争議をたたかうようになり、いっしょにその組織活動に全力をあげるようになりまして」と回想しているが（タカクラ1973）、かれがふかく労働者・農民の運動にかかわっていったことは、自由大学の継続をほと

んど不可能にした。さらに自由大学にタカクラがふかく関わっていたことから、官憲当局の圧迫を受け、公開形式による講座の開講が困難になっていたことも要因の1つであった。それは、タカクラが「北信左翼論壇の暁将」(「二・四事件ニ関スル概況」、長野県庁文書『昭和八年事務引継書』)として官憲当局の監視を受けていたことも影響していたが、1931年から32年にかけての西塩田村小作争議のころには、タカクラは「始終刑事に尾行され」、農民たちが学習会を開くときには「五・六人くらいでグループを作り納屋とか蚕室に集まって」おこなわざるをえなかったように(深町英夫の証言、小林1973:32)、非合法化せざるをえなかったのであり、学習形態としても自由大学の有効性は消滅していたのである。

こうして1930年1月の安田徳太郎の講義以降、自由大学の講座はとだえた。31年4月に会員に送付された次の通知は、そのことを示している。

「春暖の候となりました。御変わりございませんか。

さて昭和五年度の自由大学講座を、是非一回か二回は開らきたいと思ひ、苦心いたしました、高倉輝先生の御都合どうしても就かず、その他の事情もあり、遂ひに今期の開講をあきらめねばならなくなりました。誠に残念でもあり済まなくも思ふのでありますが、今冬十一、二月の候においては、是非とも開講いたしたいと念じております故、悪からず御諒承の上お待ち下さる様願います。

右お詫び傍々

昭和六年四月九日

上田自由大学幹事

通知には31年の「十一、二月の候においては、是非とも開講いたしたいと念じております」と書かれたが、しかし実際にはすでに講座を組織できる状況にはなかった。しかも自由大学の大きな柱であったタカクラ・テルは、30年11月に始まった西塩田小作争議にかかわり(上小地方農民運動史刊行会編 1985:186-240)、自由大学からは遠ざかっていった。こうして上田自由大学は、30年1月の安田徳太郎の講義を最後に、31年には幕を閉じたのである。

おわりに

長野県上田・小県地域でほぼ10年間にわたって学習運動を展開した上田自由大学の歴史がどのようなものであったのか、をみてきた。

上田自由大学の運動の推進力となったのは地域で新しい文化創造を起こし人間解放の場を築き上げようとしていた金井正、山越脩蔵、猪坂直一らの青年たちと、民衆教育への情熱から協力した土田杏村やタカクラ・テルらの知識人であった。そして、デモクラシーの機運のもと、あたらしく知的活力をみせはじめていた農村青年たちが、この地域の主要産業である養蚕業のゆきづまりの傾向が明瞭となった中で、青年団運動や「時報」の編集、あるいは信濃黎明会の活動に関わるとともに、自己と地域をどうしたらよいかを学習をとおして未来をさぐるうとした場が自由大学であった。

自由大学運動は、日々の生産活動に従事する民衆の立場から近代日本の教育体系を批判し、新しい形態の民衆の教育機関を創造しようとする地域民衆の自己教育運動であった。それは、教育機会にじゅうぶん恵まれることなく教育を受ける権利を奪われていた青年たちが自らの手で学習の場を創造していった運動であることを意味していた。すなわち、地域の中で生活する民衆が、自分たちで費用を負担し合い、自分たちが学ぶ場を創造し、そこで情熱をもって学問を学び、自分で考え判断力をもった人間となることを目標とし、「民衆的アカデミズム」(小宮山 2008:120-121)を創造しようとしたのである。

自由大学で最も多くの講座を担当したタカクラ・テルは、「今日の日本の大学」は、「必ずしも真理を攻究する所ではない、学問の府ではない」、「大体に於て、今あるところの組織を元として生活に必要な方法を授ける所、即ちブルジョワの教養機関、或は職業授産所と見て差支へない」と批判し、「真理に飢ゑたる魂に対して健全なる糧を齎らす可き機関が必要である」とし、「自由大学を斯くの如き性質のもので有らせたい」と述べ、既存の大学を批判しつつ、学問を求める熱望をもった青年たちに応える教育機関として自由大学を構想していた（高倉 1924：11-13）。このように自由大学をとらえ、聴講者の「飢ゑたる魂」に応えようとしていたタカクラは、一段と深刻化する農村不況下で生活する青年たちと交流する中で、農民運動に関わるようになるとともに青年たちの学習要求の変化を汲みとり、再建された自由大学では講義内容を変えてゆく。すなわち、大正期には「文学論」を講義していたタカクラは、昭和期には「日本文学研究」へと変えていったのである。

上田自由大学は、「個人主義的な立身出世主義とも実利主義とも無縁な、社会性を背後にもった自己教育機関であった」が（長島 2006：114）、その性格には変化がみられた。大正期には地域民衆の学問的教養を身につけるための学習運動として展開され、信濃黎明会の普通選挙運動や青年団運動に関わりをもつ青年たちが多く受講していたが、再建後の昭和期には自由大学での学習を地域の変革に結びつけてゆく学習運動としての側面がみられるようになり、農村不況の状況打破を求める青年団運動や上小農民組合連合会などの農民運動に関わりをもつ青年たちが受講していったのである。しかし、その後の発展をみる前に自由大学は、急激にファシズムへと傾斜する社会情勢と農村青年の生活を支えていた養蚕業の不況の深刻化などの要因にわざわざ消滅してしまったが、この学習運動をつうじて、タカクラ・テルを軸にして、「ブルジョア的自由の拡大をめざした自由大学関係者と、社会変革を求めた農民運動のあいだに、ある種の統一戦線が」存在したことは（鹿野 1974：113）、注目されねばならない。上田・小県地域は、1933年の二・四事件で弾圧を受けるまで、農民運動がもっとも活発に展開された地域の1つとなったが、自由大学運動は、そうした活動を許してゆく基盤の1つを形成していく役割を果たしたのである。すなわち、この地域の農民運動の「最も有力な指導者たちが自由大学の中から出た」（高倉 1937：59）ばかりでなく、農民運動を側面から援助した人びとのなかには自由大学の聴講者も少なくなかったのである（小林 1973：31）⁽⁶²⁾。

このように上田自由大学の存在は、この地域の農民運動に影響をあたえていったが、また、ファシズムへの抵抗の姿勢をくずさなかった人びとや、アジア・太平洋戦争中もリベラルな姿勢をもちつづけた人びとを生み出していた。たとえば、農民美術や自由大学の運動にかかわり、その後唯物論研究会に参加し、戦争中は戦争への批判を内にもちつつ神川村長となり、敗戦のまぎわには長野刑務所で獄死したマルクス主義哲学者戸坂潤の身元引受人となり、戦後は共産党に入党した金井正の軌跡は（小崎 1974）、そうしたあり方の1つを示している。小学校教員で青年団運動にかかわりながら自由大学を聴講し、1928年の自由大学再建の中心メンバーの1人となり、戦争中は積極的に戦争推進の発言はせず、戦後は公選による神川村長となり、菅平硫黄採掘反対の住民運動の先頭に立って鉾毒から神川水域を守り、その後革新系から立候補して上田市長になった堀込義雄の軌跡も（長島 2012a）、その1人といえる。このような人びとは、決して少なくはなかった。そうしてこのような人びとを生み出した自由大学の存在は、敗戦直後にこの地域の民主的エネルギーを噴出させてゆくための素地をつくったといえる。たとえば、1945年12月に山越完吾や小宮山量平らが中心となり、タカクラ・テルの協力のもとに、上田自由大学を復活させたのは、そのことを示している（山野 2020）⁽⁶³⁾。また、かつての自由大学の聴講者の中には、1946年4月の戦後最初の総選挙で共産党から立候補して当選したタカクラに、思想的立場を超えて投票した人びとが少なくない。

上田自由大学を聴講した人びとが、自由大学での学びを通して身につけた「社会的教養」を、その後どう発展させ、生きていったかを明らかにしていく作業は続けられており⁽⁶⁴⁾、自由大学に学んだ

人びとの人間像がより豊かに明らかにされていくものと思われる。いずれにせよ、この上田自由大学の歴史は、大正デモクラシー期の地域民衆の文化創造がどのようなものであったかの一事例を示している。

注記

- (1) 自由大学運動の研究は1970年代以降に活発化したが、50年間にわたる研究史については、拙稿「自由大学運動研究の軌跡」(2021年、<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/jiyudaigakukenkyunokiseki.pdf>)を参照。
- (2) 小林泰一が1920年3月に作成した「小県立憲青年団」の趣意書案には「一、本団ハ政治・経済ト地方自治其ノ他社会諸般ノ状態ヲ調査・研究シ、地方自治ノ振興ヲ計リ、憲政ノ美ニ努メ以テ帝国ノ発展ヲ助成スルヲ以主眼トスノ一、本団ハ青年同志ヲ以テ組織シ不偏不党タルモノトス」とあり、小林をはじめ、山越脩蔵(神川村)、杳掛喜(塩尻村)、中沢守平(殿下村)、清水良平(本原村)ら各村の青年会長クラス14名の賛同者があった。小林が起草した信濃黎明会の綱領は、「一、世界ノ文化的大勢タル人類解放ノ新気運ニ協調シ人類ノ自己実現ヲ尊重スノ一、吾人青年ハ真理ト正義ノ使徒ルコトヲ確信シ現代日本ノ正当ナル改造運動ニ参与ス」と、東大新人会の綱領からとっているが、東大新人会の支部としてではなく、小県立憲青年団の延長線上に立憲主義・民本主義の立場から普選運動を展開する団体として結成された。信濃黎明会の結成から信濃革正党への改組にいたる信濃黎明会の活動については、拙稿「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向ー信濃黎明会の活動を中心にー」(『自由大学研究』第9号、1986年)を参照。
- (3) 金井正については、その生涯を要領よくまとめた小崎軍司「農民哲学者・金井正ー大正デモクラシーを超えた人ー」(『思想の科学』別冊9、通巻247号、1974年11月)、農村青年としての自己形成を跡づけた柳沢昌一「自由大学運動と〈自己教育〉の思想ー〈農村青年〉の自己形成史ー」(大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造』早稲田大学出版部、1981年)、農民思想家としての金井の全体像を明らかにした長島伸一「金井正の思想と行動(1)ー大正デモクラシー期を中心にー」(『長野大学紀要』第34巻第2号、2012年)、同「金井正の思想と行動(2)ーファシズム期を中心に(第1部、第2部)ー」(『長野大学紀要』第35巻第2号、2013年、第35巻第3号、2014年)、清水一明「金井正ーある在村知識人の軌跡ー」(『放送大学日本史学論叢』第1号、2014年)などがある。金井の主要な論稿や関係資料は、大槻宏樹編『金井正選集ー大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言ー』(早稲田大学教育学部大槻研究室、1983年)に収録されている。

柳沢昌一は、金井正が20代半ばから後半にかけて著した2つの論文、「社会主義管見」(1910年)と「霊肉調和と言ふ意義に就て」(1915年)を検討し、「金井は、自己を社会に開かれたもの、さらにまた、社会を創造していく主体としてとらえ返しながら、より広汎な『社会観念ノ実現セル個人』の形成を促進する運動を展開することを通じて社会を変革していこうとする志向、そしてそこに自らの〈主体性〉をかけていこうとする志向を確立」したとし、神川村を拠点として展開された教育・文化運動は、金井にとって「創造的主体形成の運動の一環として位置づけられていた」と指摘している(柳沢 1987: 223)。
- (4) 山越脩蔵の主な論稿や関係資料は、大槻宏樹編『山越脩蔵選集ー共生・経世・文化の世界ー』(前野書店、2002年)に収録されている。
- (5) 山本鼎の生涯や業績については、小崎軍司『山本鼎と倉田百羊』(上田小県資料刊行会1967年)、同『山本鼎評伝』(信濃路、1979年)や神田愛子『山本鼎物語』(信濃毎日新聞社、2009年)など

を参照。

- (6) 会見の席上、山本鼎は、金井正と山越脩蔵に対して、「君達はオブローモフではありませんか」と切り出したという。山越によれば、「吾々は”オブローモフ”と言われても何のことか解らない聞き返すと『ロシアでは、知識はあり、金はある、暇はふりだが、さて自分の力量によって仕事をしようとする元気がなく、あてどもなく彷徨い歩く人間のことをオブローモフと言っている。君達も日本の中のその様な部類に属してはいないでしょうか』と説明した。金井さんは直ぐに『価値ある仕事さえあれば、めらわずに実行しますよ』と反論した」と、回想している（山越：1972a、p. 56）。山本がロシアの文豪ゴンチャロフの代表作『オブローモフ』を話題にしたのは、2人が小説の主人公のように無気力な気質ではないことを承知の上で挑発したと言える（長島 2012c：71）。
- なお、金井と山越が山本を招いて会見した場所は、料亭「喜久與」であったが、のちに金井は、伊勢宮の神職合議所に近い場所であったことから、自由大学の講義を終えたタカクラ・テルや土田杏村、大脇義一らを招いて労をねぎらったと言われる（大谷 2009：47-49）。
- (7) 自由画教育運動については多くの研究があるが、さしあたり、拙稿（山野：1982）のほか、上野浩道『芸術教育運動の研究』風間書房、1981年）、金子一夫『近代日本美術教育の研究－明治・大正時代－』（中央公論美術出版、1999年）、最近では岡田匡史「山本鼎から学ぶこと－自由画教育運動と現在の美術教育－」（『地方教育史研究』第35号、2014年）などを参照。
- (8) 農民美術運動については、都築邦春「民間工芸運動論の研究－山本鼎の『農民美術』について－（Ⅰ）（Ⅱ）」（『秋田大学教育学部研究紀要（教育科学）』第24号、1974年、第25号、1975年）、山口眞理・三橋俊雄・宮崎清「山本鼎の日本農民美術運動－大正・昭和前期における農村工芸振興の内発性に関する研究－」（『デザイン学研究』第42巻第2号、1995年）、石川義宗「上田市の農民美術から見える地域の芸術的潜在力」（『長野大学紀要』第40巻第2号、2018年）、市川寛也「『農民美術』の成立背景と受容をめぐる一考察－地域社会における文化創造の視点から－」（『美術教育学研究』第53号、2021年）の論文をはじめ、農民美術100年の特集を組んだ『人形玩具研究』第30号（2020年）所収の論文などがある。
- (9) 土田杏村の生涯や業績については上木敏郎『土田杏村と自由大学運動－教育者としての生涯と業績－』誠文堂新光社、1982年）を、また、土田の思想の全体構造を明らかにした山口和宏『土田杏村の近代－文化主義の見果てぬ夢－』ペリかん社、2004年）を参照。
- (10) 山越脩蔵「信濃自由大学（未定稿）」は、従来から知られていた「草稿・信濃自由大学」（『自由大学研究』第2号、1974年、に収録）の原本のコピーが発見され、「草稿」との対照表とともに長野大学編『上田自由大学とその周辺』（郷土出版社、2006年）に全文収録されたものである。
- (11) 土田杏村は、東京高等師範学校研究科に籍を置いていた1915年に書いた「彼の人達」という一文で、「彼の人達と全く絶縁して静寂と孤独の中に私の生命を愛育しようとした私の行為は全然誤謬である。自分の病気が治つたなら出来るだけ早く私は彼の人達の仲間に加はらねばならない」と述べ、「彼の人達の中へ、ただ彼の人達の真直中へ」と決意を書いている（土田：1935、p.73）。かれにとって「彼の人達」とは「貧民」であり「職人」や「車夫」であるが、その後の土田の生き方の方向を示すものであった。土田は、「私はただの一人でも彼の人達から手紙を貰ふことが出来ないか」（土田 1935：69）と、民衆との交流を求める願望を記していたが、1920年になって土田のもとに長野県神川村の見知らぬ農村青年山越脩蔵から届いた手紙は、「彼の人達からの手紙」ではないことを承知しながらも、山越の手紙の向こうに少なくとも民衆を見ていたように思われる。「彼の人達の中へ」という土田の熱い想いは、1915年当時はまだ具体的な行動となってあらわれていないが、かれの内部では持続されていたといえる（平野 1981：88）。

土田に手紙を書いたもう1人の農村青年が、埼玉県入間郡南畑村（現・富士見市）の渋谷定輔で、

山越が手紙を送ってから3年後の1923年のことであった。土田がどこかに書いた「農村青年について」の文章を読み、土田の農村青年観に対する批判の手紙をしたためて送ったのである。渋谷によれば、土田の農村青年観は信濃自由大学を踏まえたとらえ方で、「哲学の問題とか。農村青年でも、働きながらも一流の英知をみがくことができるんだということを書いているので、それは私の現実と違うという意見を、便箋で十数枚書いたんですよ、なまいきにも」と(渋谷・小川 1979: 72)、土田の考察は「現実から離れた知識人の机上論」(渋谷 1974: 36)と映ったからであった。それから1週間後、思いがけなくも土田から返事が来て、その手紙には、僕は「大学院まで進んで、いまなお研究をつづけている一学徒であるが、君は貧乏で小学校もやっと出た百姓の子だという。しかし“真理を体得する”ということは、最高の楽譜を出て知識を得たからといってそれだけでできるものではないことを、君の手紙を読んで切実に感じた。どうか僕のよい友人として、今後長く交際してくれ給へ」と書かれてあった(渋谷 1974: 36)。以後約5年間、のべ50通以上の手紙の往復が行われた。また土田は、1924年春、渋谷から送られてきた詩群に感動し、平凡社に出版を推薦したことから、詩集『野良に叫ぶ』(平凡社、1926年)の出版となり、土田は自ら序文の筆をとっている(安田 1981: 68-69)。

安田常雄は、「渋谷の、齒に衣をきせぬ批評は、杏村にとって異質な感覚を伴って受けとめられたと推定される」とし、その理由を、「杏村が自由大学運動で直接知り、接していた〈農村青年〉と渋谷定輔とは、共通の時代的同質性をもちながらも、本質的に極めて異質であったからである」と述べている(安田 1981: 69-70)。そして、共通の時代的同質性とは、山越脩蔵と渋谷定輔とは、2人とも農家の若い実際農民であったこと、そして2人とも農業労働をしながら思想・文化学問への渴望をもっていったこと、土田との出会いの端緒が2人とも自発的に土田に手紙を書くことから始まったことの3つで、この3つの共通性の基底にあるのは、「一般的な大正期〈農村青年〉の知的渴望であるが、具体的には「ものを考える態度をつくり、自分の生活で、自分の到達した範囲の“哲学する態度”を確立しよう」とするもので、端的には「人格の形成」であり、「哲学を中心に人間の能力のなかにある、すべての学的な世界を探究し、バランスの取れた人間を育てる」ことであった(山越脩蔵談話、渋谷・蒲池 1976: 81)。一方、異質性とは、第1に、山越と渋谷との経済的生活の隔絶性で、年300円の小遣いを自由に使い、書籍を1000円購入できる山越や金井正の現実と、土木工事の重労働による報酬が1日35銭の渋谷とは、比較すべくもなかった。蚕種製造の村落中農上層と低生産力地帯の自小作貧農層との階層的距離である。第2に、山越の思想態度における知的観念性と、渋谷の肉体的全体性との違いにあった。この異質性について渋谷は、「山越さんたちのはどちらかという観念的な、精神的な知的渴望だけれども、たしにとっては知的な精神的な部分だけでは満たされない、肉体的存在としての生きる欲求といえますか、生きている人間の自己形成のされ方の全体的欲求といえますか、そういうふうにとらえるんです」と語っている(渋谷・小川 1979: 70、安田 1981: 191-192)。

このように山越脩蔵と渋谷定輔との間には同質性ととも異質性をみることができ、山越にとって、また渋谷にとっても、土田杏村と出会い、土田を「つきあいの徹底した対等性をもつ人」(安田 1981: 70)と認識したことから、その後も土田に対する人間的信頼は揺らぐことなくつづいた。

- (12) この5月9日付の手紙については、山越脩蔵の「土田杏村の手紙と上田自由大学」では6月1日付となっているが、柳沢昌一も指摘しているように、手紙の内容、文末の日付などから、5月9日が正しい(柳沢 1980: 40)。

小県哲学会では、第3回講習会を1921年9月に開催し、土田杏村にフッサールの講義を依頼することを相談し、金井正が土田との交渉にあたることになっていた(金井 1921: 54)。柳沢昌一

は、この決定のことを山越は土田に手紙で連絡したものと考えられ、それは、5月9日の手紙の中に、「哲学会のこと甚だ光栄に存じます。」「今後は益々研究を順序立てることにし、従来のは先づ哲学概論をやった様のもとし、これから本当の専門研究に向ひませう。」「小県哲学会は地方で出来た、恐らくは最初の哲学会でせうから、方法を皆んな新式にやって見たいと私も大いに意気込んで居ります。」とあり（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年5月9日、山越 1978：21-22）、「ここには小県哲学会に対する杏村の強い熱意が感じられる」としている（柳沢 1987：231、柳沢 1980：36）。しかし、山越脩蔵は、「哲学会のこととあるのは、自由大学の構想と、小県哲学会とを混同したように書かれている。あまり忙しいので、混同されたものと推測される」、と述べている（山越 1978：22）。金井正からの依頼の手紙に対する返事は、山越宛ての6月30日付けの手紙にあり、「九月の講義の方は確かに承知しました。金井君の手紙がいつまでも『未決』とかいた箱の中に残って僕の側にあるのですが、御返事がおくれました。兎に角承諾の旨だけ申し伝えておいて下さい。」と、書いている（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年6月30日、山越 1987：24）。土田の21年9月の動向をみると、上木敏郎によれば、9月8日はタカクラ・テル（高倉輝）と同道で東北の石巻に向かい、13日、京都から来る妻千代子を宇都宮で待ち合わせ、日光・塩原等に遊び、16日に東京に出て20日まで旅を続けており、土田が上田へ行った記述はなく（上木 1968：94）、小県哲学会の第3回講習会は開催されなかったとみられる。

なお、宮城県石巻町での土田とタカクラの講演は、石巻文化協会主催の思想講演会で、9月10日と11日に石巻町会議事堂で行われ、土田が「唯物史観説の徹底と文化主義の徹底」、タカクラが「聖者の心」という題で講演している（『河北新報』1921年9月11日）。

- (13) 山越脩蔵は、猪坂直一宅に事務所を置くことにしたのは、神川村では交通その他で不便なことから、金井正は農民美術運動に専念していること、山越も金井と協同の富而合名会社の蚕種製造販売部の責任をもっていただけを理由にあげている（山越 1976：24）。

なお、信濃黎明会では、修養部長の山越は、哲学講習会の成功で自信を得ていたことから、会員の修養として哲学の研究を主張していたが（猪坂直一より聴取、1971年11月3日）、猪坂は、「社会科学一般、特にマルクス、エンゲルスなどの研究を欲し」ていたため、「意見に若干のくい違ひ」が生じ、「修養部の活動は頓挫して」いたという（筆者宛猪坂直一の手紙、1972年3月31日）。

- (14) 金井正、山越脩蔵、猪坂直一と土田杏村の4人の会合については、猪坂は1921年2月の第2回哲学講習会の際の一夜であったと回想し（猪坂 1967：37）、猪坂の回想に依拠した山野も2月としたが（山野 1976：126）、誤りであり、ここで訂正しておきたい。また、山越が7月23日と回想している（山越 1976：25；山越 1978：27）のも記憶違いで、柳沢昌一は「8月22日ないし23日」としている（柳沢 1987：234；柳沢 1980：38）。なお、上木敏郎は8月23日午前としている（上木 1982：82）が、23日の午後6時から田中王堂と安成貞雄が発起人となった土田の歓迎会が東京・京橋日吉町で開かれており（上木 1968：86）、当時、上田駅から上野駅までは約7時間かかっていることから、会合があったのは22日夜の可能性が高い。

- (15) 当時、小学校教員であった池田正雄より聴取（1976年3月25日）。なお、長野県全体では、小学校卒業者のほぼ10%が中学校へ進学している。中学校進学率は、1920年-7.2%、22年-8.4%、24年-10.4%、26年-11.1%となっている（長野県編 1989：504）。

- (16) 「信濃自由大学開講に就いて」（上田市立図書館蔵）は、「信濃自由大学趣意書」のほか、講師を承諾ないし交渉中の講師一覧を掲載し、聴講料については「全講座を聴講せらるゝものは一学期（六回の講義）に付き金拾五円」「特定の講座を選んで聴講せらるゝものは一講座一回の講義に付き金四円」としており、開講の時期については、「自由大学最初の講座は文学士土田杏村氏の哲学の講義によつて大正十年十月中旬より開かれます」と記載されている。

(17) 信濃自由大学の第1期第1回講座の開講が10月18日から11月1日に変更になった事情について、猪坂直一は、「信濃自由大学第一期第一回の講座が新聞とくい違っては恒藤先生が急に時日の変更を希望して来られた事と蚕糸専門学校（現信大繊維学部）講堂は聴講者の数が少ないのに寒さに向う際夜間の講習の勉強には不相当と思い神職合議所に変更した事は確かです。（蚕専の校長が文化講座という事に好感をもっていなかったのも事実です）」と、書いている（筆者宛猪坂直一の手紙、1972年10月5日）。

(18) 恒藤恭と上田自由大学の関わりについては山崎年彦「上田（信濃）自由大学—その開始」（『法学雑誌』第23巻第4号、1977年）が詳しい。また、恒藤の生涯と業績については、関口安義『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、2002年）を参照。

(19) 猪坂直一は、「上田自由大学の回顧(五)」（『自由大学雑誌』第1巻第5号、1925年）でも、次のように回想している（猪坂 1925a：15-16）。

「七日間、この二十時間ばかりの講義によつて、僕等がどんなに啓発されたかは今更言ふまでもない。僕は毎晩M君と一緒に帰途についたが、自分の知識の天地が非常な勢ひで開拓されて行くやうに感じ、実に嬉しくつて溜らなく、なぜ僕等はずっと早くから自由大学を興さなかつたのだらうなどと語り合つたものである。（中略）

法律哲学の講義で憶ひ出すのは、Yといふお爺さんが、素晴らしい熱心さで聴講して居られた事である。このY翁は、もう六十何歳かで、家は百姓である。而も自分で栽培した人参や葱やを、時々上田の青物市場へ持ち出しては売つてあるといふ人である。このY翁の熱心振りは、実に驚くべきものであるが、尚ほ白紙を沢山持つて来て、講義を一句も洩らさじと鉛筆で（時には矢立の筆で）大汗になつて筆記して居られるのには一同仰天したものである。そして休憩時間といへば、盛んに恒藤氏に質問を連発する。恒藤氏は又微笑み乍ら懇切にそれに答へられる。僕等はよく世の老人が時代に後れて行くのを軽蔑してゐる。しかしY翁を見る時、いつも僕は自分の学問に対する不熱心さを思ふ。そしてこいつは油断がならぬと云ふ気がするのである。実際この老人ばかりではない、自由大学へはかなり老人が多く見える。市長のK（注、勝俣英吉郎—引用者）氏の如きももう六十を越して居られるが実に熱心な一人である。多くの青年がボンヤリしてゐる間に、老人がドシドシ新しい知識を求めてゐる。成人教育が盛んになつたら、僕等青年も生意気なことを言つてはゐられまい。」

(20) タカクラ・テルの表記は、高倉輝→高倉テル→タカクラ・テルと変わっているが、ここではタカクラ・テルで統一する。なお、タカクラが自由大学運動に関わつた時期の思想形成については、拙稿（山野 2008）を参照。

(21) 土田杏村が出講できなくなったことについて土田は、山越に宛てた手紙の中で、次のように書いている（山越脩蔵宛土田杏村の手紙、1921年12月12日、山越 1978：32-33）。

「一月はどうしても行かれない。といふのは産児制限をしたいものだから、妻が一月に臨月で、これだけはどうにもならぬといふ訳。それも一月がややおくれるかどうかもわからないので、二月の中旬に僕を願ひたいと思つて居る訳。これだけ事情を申しておいたら、お許しが願へるかと思ふ。」

土田の代わりに出陣が決まったことは、12月18日付の土田の葉書に、「一月は今中（注、今中次麿—引用者）君が行かれない、でも、出陣君が哲学史の講義にしてくれることになって居る。もう恒藤君から御通知のことと思ふが、これは一月ときまつた」と、あることから知られる（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1921年12月18日、山越 1978：35）。

(22) 土田杏村の病状は3月には健康を快復し、山越脩蔵に宛てた手紙で、「もう大丈夫になった。五月には元気で行くよ。どうも僕には信州は鬼門だね。この一ヶ月は棒にふるにはあまりに惜しい—

月だった。これだけあれば自由大学なり、哲学会なりで、随分講義が出来たのにね。みんなにおわびをいってくれたまへ」と書いている（山越脩蔵宛土田杏村の葉書、1922年3月22日、山越 1978：39）。

(23) 恒藤恭は、1921年11月29日の手紙で、「今日京都大学研究室世良寿男氏に面会し自由大学についての見聞なり御地の事なりをいろいろ話しました。そして諸兄が同氏の来講を切に希望してをられる旨をつたへた上、勧誘につとめましたところつひに承諾してくれました。但し同氏ハ哲学研究室の事務の都合上、春休みでなければ当地をはなれる事が困難でありますので、三月廿七八日ごろ開講、四月の三四日ごろまでの期間にしてほしいとの事です。それで若しその期間で御差支へがないやうでしたら直ちに、小生から同君承諾の旨の報道があったからとて、改めて御交渉下さい」と猪坂直一らに書き送っている（金井・猪坂・山越宛の恒藤恭の手紙、1921年11月29日）。

(24) 細田延一郎は、1896年に小県郡豊里村の農家の長男として生まれ、1915年に上田中学校を卒業したが、のち自由大学の講師となる松沢兼人とは同級生であった。自由大学には21年11月の恒藤恭の講義から受講している（細田延一郎より聴取、1976年3月25日）。その経緯を次のように回想している（細田 1978：158）。

「一年志願兵をやって帰ってきて毎日農業をやっていましたが、いったいわれわれは毎日何のために生きているのかということを考えましてなあ。ところが上田自由大学ができて学問する便宜をあたえてくれる。（中略）これによって人生はいったい何のためにあるのか。社会はいかにあるべきかを探求してみたい。（中略）何か勉強し社会的にも活動してみたいというようなことから勉強を始めたわけです。」

(25) 中田邦造は当時、京都帝国大学文学部哲学科に在籍していた（梶井編 1980：247）。中田の講義は「西田博士の哲学の研究に就て」で、3月29日から4月1日までおこなわれた（細田延一郎「筆記帳 自由大学講義二号」）。

中田は、土田杏村の「哲人村としての信州神川」（『改造』1921年7月号）を読み、神川に惹かれ、21年8月、夏期休暇中に1か月間、山越脩蔵宅に滞在した（倉沢 1982：310）。滞在中、山越は、中田から「西田博士の哲学概論や倫理学の根本問題などのノートを借用して、夏の忙しい寸暇をみて引き写し」たり、「論文の中に出て来る引用原文の読解によくはないかとの金井の提案」で、金井正とともにドイツ語の文典の教授を受けたりした（山越 1978：27）。中田の方でも、山越から哲学書を借りており、京都に帰ったあと中田は、山越に宛てて手紙を書き送り、「信州の秋はもはや余程深くなったことでせう。米や果物等の収穫も遠からず百姓生活の興味はいやが上にも豊かなことと思ひます。恐らく独逸語におけるみのりはそれ以上であらうと喜んでみます」と、ドイツ語の習得をよろこぶとともに、「おかりしたリッケルト今年中お願ひしておきたい。今他のものを見てみますから、すぐにとりかゝれない。出来るなら、あれは十一月の読物としたいと思つてみます」と記している（山越脩蔵宛中田邦造の手紙、1921年9月12日）。

世良寿男の講義が2日間で中断したとき、たまたま中田が上田に来ていて、世良の講義を傍聴していた。そこで山越は、猪坂直一に相談して急遽の対策として中田に代役を依頼したのである（山越 1978：77）。山越が中田に依頼した背景には、このように中田との間に親しい関係があったからである。

(26) 「芸術の日」が開催された日について、山越脩蔵は1922年3月3日としているが、中川一政の葉書を紹介した「上田自由大学の頃(六)」では、2月12日に行われることになっているとし、3月3日は「芸術の日」のポスターの裏の記載によったが、「今日となつては記憶がないので、その間三月三日に延期したのではないかと憶測する外ない」と記している（山越 1973：76）。この「芸術の日」に参加した中沢鎌太は、「午後上田劇場の芸術の会に参る。芸術に関する話し、蓄音機それ

に近代劇を見て九時過ぎ帰る」と、日記に記しており（1922年2月12日条）、2月12日に開催されたことがわかる。中沢は、「芸術の日」に参加したことがきっかけとなり、22年12月のタカラ・テル「文学論」から自由大学を聴講するようになる。

- (27) 松本自由大学を設立した唐澤正平は、猪坂直一とは上田蚕糸専門学校の先輩で1921年、上田蚕種株式会社技師長から長野県技師に転じ、22年には県蚕業取締所松本支所長となった。自由大学運動に共鳴し、会場に苦勞していたことを知った唐澤は、猪坂からの相談もあり、当時上田支所長であった榊澤精一に働きかけたと思われ、信濃自由大学第2期講座からは県蚕業取締所の教室を借りることができるようになった。その後、松本周辺地域の養蚕関係の青年たちと1924年12月に松本自由大学を設立している。松本自由大学は25年1月から4月まで5回講座を開講したが、4月に唐澤は群馬県への転任を命じられた。東筑蚕業同業組合など地域の養蚕関係者は留任運動を行ったが、4月18日に唐澤は松本を去った。新聞報道によれば、唐澤の転任は「官界に身を置きながら自由大学講座の創設に努めを睨まれたものに依るらしく」と報じている（『信濃日報』1925年4月18日）。

その後唐澤は、蚕業取締所技師のかたわら群馬・勢多両郡の養蚕関係の青年たちと25年12月に群馬自由大学を設立している（『上毛新聞』1925年11月27日、12月3日）。松本自由大学、群馬自由大学については拙稿「唐澤正平と自由大学運動－松本自由大学と群馬自由大学－」（本書〇～〇頁）を参照。

なお、大正から昭和初期にかけての日本蚕糸業の飛躍的な発展には蚕品種の改良とりわけ1代交雑種の開発とその普及伝播の果たした役割が大きいと言われているが、その1代交雑種の普及を側面から支えた技術革新の1つに、蚕児雌雄鑑別法の実用化があり、それは唐澤正平の努力によるものであった（清川 1980）。唐澤の著書に『實用蚕児雌雄鑑別法』（蚕糸雑誌社、1924年）がある。

従来、第2期講座から県蚕業取締所上田支所の教室を借りることができたのは、猪坂直一『回想・枯れた二枝』の「この年私の学校の先輩唐澤正平が上田蚕種会社技師長より長野県技師に転じ蚕業取締所長となったので、所長の権限で教室を提供してくれたのだ」という回想（猪坂 1967：45）に依拠して、記述されてきた。ところが、唐澤が1921年に長野県技師に転じ着任したのは蚕業取締所諏訪支所（上田蚕糸専門学校 1921：149）で、翌22年には蚕業取締所松本支所長となっている（長野県知事官房 1923：291）。唐澤が松本から群馬県に転任させられたときの新聞記事にも「（唐澤）氏は大正十一年上諏訪町より松本市に転任し」とある（『信濃日報』1925年4月18日）。自由大学の会場が蚕業取締所上田支所となった1922年当時の上田支所長は榊澤精一である（長野県知事官房 1923：288、榊澤 1938：117）。したがって唐澤が「所長の権限で教室を提供」したとは考えられず、猪坂の記憶違いと考えられる。また、猪坂は、唐澤が自由大学に教室を貸したことが岡田忠彦知事に知るところとなり、「その為か翌年松本へ転任させられた」と回想しているが（猪坂 1967：45）、岡田の長野県知事の在職期間は1921年5月27日から22年10月15日で（長野県編 1972：13）、自由大学の会場が蚕業取締所になったのは次の本間利雄知事のときであり、唐澤はすでに松本支所長となっている。したがって、この回想についても、猪坂の記憶違いがある。

- (28) 中沢鎌太は、1878年に小県郡城下村に蚕種製造農家の長男として生まれ、小県蚕業学校を卒業後、同校の三好米熊の助手をつとめたが、のち家業の蚕種製造にたずさわった。1922年農林省から篤農推賞を受けている。中沢は、青年時代から熱心なクリスチャンで、『福音新報』や『聖書之研究』を講読し、また、社会主義にも関心をもち、『平民新聞』の熱心な読者であった。現在中沢家には『平民新聞』の第2号から終刊号までが保存されている。上田自由大学には、1922年12月のタカラ・テル「文学論」から30年1月の安田徳太郎「精神分析学」まで数多くの講義を聴講し、聴講ノートを6冊（「自由大学筆記」其一から其七、うち其六は不明）残し、ノートは現在長野大

学で保存されている。

(29) タカクラ・テルは、『芸文』掲載の「ゴオゴリ評伝」で、プーシキンがゴオゴリの「外套」について、「ゴオゴリ。君は人世を洞察した」と評価したことに触れており（高倉 1919：76）、また、「死せる人々」の「賞賛」と「非難」についても詳細に言及しており（高倉 1920：51-55）、講義はこの『芸文』掲載論文をもとにしながら講義したことが知られる。

(30) 青木猪一郎は、1899年に小県郡殿城村に生まれる。豊里・殿城尋常高等小学校卒業後、1915年に父が開業していた殿城郵便局に勤務した。上田自由大学には小学校時代の恩師である六川静治にすすめられたのがきっかけで聴講するようになった。青年時代から文学に興味を持ち、『中央芸芸』や『秀才文壇』などの雑誌を購読し、タカクラ・テルの『女人焚殺』や『阪』などの作品を愛読したという。文学では特に短歌を志し、1920年に潮音社に入社した（1930年退社、64年再入社）。歌集には『峡の路』（1922年）、『山ざくら』（1973年）がある（青木猪一郎より聴取、1976年3月25日）。

(31) 山越脩蔵は、山本鼎や出隆・佐野勝也の安否を確認するため、東京・横浜に向かったときのことを、次のように回想している（山越 1982：377-378）。

「東京が壊滅状態だとの情報が入ったので、東京に働いている家族を持つ親戚に問い合わせると、様子が不明だから三日の夜行で上京させて状況を見る以外にないということであったから、協力する意味と、私としては先輩の、児童自由（注、画が欠落—引用者）運動、農民美術運動の山本鼎先生、自由大学講師の出隆、佐野勝也両先生の安否を確かめたかった。

調査は東京から横浜までであったが、全てが徒歩でなければならなかった。炎天続きの毎日であった。四日には雑司ヶ谷の縁者の安全であったのを確かめ、五日は沢山握り飯を造ってもらって、横浜に向う途中、佐野勝也先生の壮健であられるを確かめ、五日夜は蒲田の線路置きざりになった電車で蚊に攻められながら一泊し、翌朝は山本鼎先生の大森のお宅で皆さんの安全であられるのを確かめて横浜に向い、一日歩いて不入斗町の出先生のお宅までたどり着いた時は六日夕方であった。幸いに先生は御在宅で、『君達は信州から避難して来たのか』と驚かれた。吾々の目的をお話すると安心され、奥様ともども大変なご歓待をうけた。疲れきった苦労が一時に払拭され、翌朝は元気で帰郷することが出来た。」

出隆は、次のように回想している（出 1963：194）。

「自由大学の発起人で世話役の山越脩蔵、猪坂直一という青年が——青年といっても当時の僕とほぼ同年輩だったが、——関東大震災の数日後に、米・味噌などの見舞品持参で信州からわざわざ大森までたずねて来てくれたのを覚えている。」

また、佐野勝也は、山越宛の葉書で、「先日はわざわざお見まい下さいましてありがとうございました。その後漸く秩序も回復し、山の手一帯は殆んど平常情態になりました。野尻滞在中の御厚志も何とお礼のことばもありません。野尻でもこちらへお出での時も一向お構いできなかったことを妻も非常に残念がっています」と、お礼を述べている（山越脩蔵宛佐野勝也の葉書、1923年9月23日、大槻編 2002：134）。

(32) 『信濃自由大学の趣旨及内容』（1923年）による。パンフレット『信濃自由大学の趣旨及内容』に添えられていた「信濃自由大学入会勧誘状」には、入会と知人への入会の勧誘を依頼して、次のように書いている（『自由大学研究通信』第5号、1982年、に収録）。

「本期から信濃自由大学を組織して自由大学の永遠の発展を計りたいと思ひますから、どうぞ是非御入会を得たいと思ひます。尚又御友人知己等へも入会の御勧誘を願ひたいのであります。

一、入会はいつでも御随意ですが、特に第三期の開講に会の基礎を固めたいと思ひますから、

此際（遅くも十月末迄）御入会を得たいのであります。会則、自由大学の経営方針等は御入会を得て後、改めて御協議の上、訂正すべきところは訂正したいと思います。

一、委員数は最低五十名最高百名位の予定であります、殊に最低五十名を得なければ、自由大学の経営は甚だ困難に陥ります、其辺御含みの上御入会及び入会の御勧誘を煩はしたいのであります。

一、なるべく自由大学の講義へ連続御出席御希望の方を御勧誘願ひたいのですが、特に自由大学の事業に心から共鳴され、援助を^{おし}吝まれない^{ママ}特志家なれば、連続聴講の余暇を有せられないにしても、入会して頂きたいと思ひますから、然るべく御勧誘を願ひたいのであります。」

(33) 中田邦造は、この上田での講義の直後、1923年12月に1年志願兵として輜重兵第16連隊に入営している。24年12月には予備役に編入され陸軍補充令により招集され、25年4月に解除されたが、大学院に戻ることなく、4月10日に石川県主事となり、31年には県立図書館長になっている。

中田は、『公立図書館の使命』（石川県社会教育課、1933年）の中で、「教育の中核は自己教育にある。いかに設備の完全なる学校教育も、学ぶ意志なきものには無効である。それと共に教育が終生の問題なりとすれば、現実の問題として、自己教育を離れて可能性はない、と言わねばならぬ」と述べ、自己教育の重要性を説いていた（中田 1933：31）。そして読書を通じての自己教育の必要性を説き、1931年から青少年を対象に「読書学級」と「青少年文庫」を通じた読書指導の実践をすすめたことで知られる（福永 2006）。

(34) タカクラ・テルの講義風景の写真については従来、猪坂直一が年代を1922年とし（猪坂 1967：48）、小崎軍司の編集による『写真集 上田の百年』も年代を1922年としてきた（小崎・川上編 1976：96）また、小崎は会場を上田中学教室としている（小崎 1975：口絵写真）。写真では、タカクラの後ろの黒板の文字に着目すると、フランス語で「Dites á Votre Monseigneur」「daus son café guil」などの文字が判読できる。タカクラがフランス文学を講義したのは1925年12月の第5期第2回講座で会場は上田市役所である。しかし、タカクラが講義した内容はボードレールを中心にフランス文学の変遷を述べたものであったが（中沢鎌太筆記ノート「自由大学筆記」其七）、黒板の文字は文章で、「悪の華」などの詩ではないことが知られる。また、右側の小黒板には「1866」「ルスキイ、エスツニク」「Русски й」などロシア語の文字が判読できる。中沢鎌太の筆記ノートによれば、「1866、「罪と罰」 ルスキイ、エフ、ツニク（露西亜報知）に載げられた」という記載があり（「自由大学筆記其四」）、「ルスキイ、エスツニク」はロシア語で「Русски й бестик」すなわち「ロシア報知」のことで、「1866」が『罪と罰』の発表年を指すとすれば、筆記ノートの内容と小黒板の文字とがほぼ一致する。左の黒板のフランス語の文章がどの書物からの引用なのかについては、高倉太郎が筆者宛の葉書（2014年3月24日）の中で、「うろおぼえですが、思い出しました。私は日仏会館で調べた記憶があります。これはフランスの作家アンリ・バルビュス Henri Barbusse（1873～1935）の『クラルテ』の冒頭の部分ではなかったかと思ひます」と記している。しかし、『CLARTE』の原文に当たっても類似するフランス語は出てこないため、現状では不明であるが、右側の小黒板の文字が中沢の筆記ノートとほぼ一致することから、この講義風景の写真は、1923年12月の第3期第3回講座「文学論」で、12月5日の長野県蚕業取締所上田支所の教室である可能性が高いと考えられる。

(35) 遠藤恭介の筆記ノートは「出講師 哲学史 於信州自由大学」と表に書かれている。現在、上田市立図書館に寄贈されている。

(36) 松沢兼人については、桐野正晴・筋野通弘『松沢兼人論』（1982年、非売品）を参照。

(37) 小県蚕業学校を中退して農業にたずさわっていた和村の竹内省吾は、自由大学で学んだときの思い出を次のように書いている（天田邦子宛竹内省吾の手紙、1976年3月5日）。

「自由大学へは東部町東深井の中村^{めぐむ}愛君に引張られて行ったのです。この君は若くして物故しました。自由大学へは主に京大の教授の方々が多く出講されました。私達は基礎的教養がないので無我夢中で聞きましたけれど、後でマルクス主義の理解には役立ったと思ふて居ります。」

手紙に出てくる中村愛は同じ和村で小学校教員をしており、自由大学の熱心な聴講者の一人であったが、1925年に急逝している。竹内は、タカラ・テルのロシア文学も聴講していたが、「自由大学を聴いていたので、マルクス主義を理解するのに役立った」ことを語っている（竹内省吾より聴取、1976年3月25日）。

(38) 信濃革正党は、1924年5月の総選挙の際、上田・小県地域の信濃黎明会・憲政派・政友派・北信木堂会の有志によって結成されたもので、深井功を支援し、当選させた。信濃黎明会は信濃革正党に再編成され消滅した。なお、27年9月の県議選では小県郡では浦里村の宮下周を推薦し当選させている（山野 1986：20-21、26-27）。

(39) 岡本洋之は、土田杏村は「日本で教養教育機関たる自由大学の充実を期したにも拘らず、WEAに言及せず、WEAを批判したポール夫妻への批判を通じ、夫妻とは異なるプロレットカルト論を展開した」と指摘している。そして土田は、1918年版WEA年報を手にしながらか、自分が共感する、教育と政治理論宣伝の峻別を説くコールの論稿は読んでも、講義をもとに討論や小論文を作成する学問的自己教育の重要性を指摘したビートンやスケルトンの論稿など自由大学を運営するうえでの重要な論稿からは学び取ることをしなかったが、それは土田に「民衆へのリスペクトが弱く、彼が受講者から能力を引き出す方法に強い関心をもたなかった」からであると指摘している。この結果、「英国の労働者の様子に学んで民衆に対する自分のリスペクトを強固にする機会を失うとともに、自由大学運動は衰退が確実にになった」が、それに対して伊那自由大学千代村支部を創設した青年たちは、受講者の学問的自己教育を志向し、土田という「指導者を超越自力で、英国流学問的自己教育の文化を具体化する一歩手前にまで迫った」と評価している（岡本 2021）。

なお、松塚俊三は、1790年代から第2次世界大戦にかけての時代に、イギリスの労働者階級が、「ただひとり学ぶだけでなく、周囲の環境に積極的に働きかけるきわめて能動的、主体的な行為」、すなわち「他人の助力を請い、ネットワークを築き、さまざまな困難と闘」う、他の時代には特殊性を有していたことに注目し、この個性的時期を表現するキー概念としてautodidac cultureを強調して「独学の文化」と訳しているが（松塚 2006：269-271）、岡本は「学問的自己教育の文化」と表現している。

(40) 山口和宏は、自由大学の組織は、「被教育者本位」に「自治的」に運営されるという土田杏村の「自治的な自己教育論は、教育された結果をあらかじめ教育の前提とすることで成り立つという論点先取の議論になっており、論理的には成立しないパラドックス」だと論じ、そこに自由大学が「ごく少数の〈農村青年〉を組織したにとどまり、全民衆の自己教育機関にはなりえなかった」と指摘している（山口 2004：198-199）。

(41) 柳沢昌一は、この土田杏村の一文には、「自らの生の意味を〈意識化〉し主体的に生きることとしての〈自己教育〉と、他者との社会的関係の中で「社会的創造」への「協同」「に参加しつつ、その中で互いを〈自己教育〉の主体へと「生長」せしめ合う〈相互主体的〉な営みとしての〈教育〉とを、内在的な連関をもって照らし合う一対の概念として把握しようとする志向を読みとることができる。そこでは、強制と伝達の「教育」、他者を自らのめざす方向へと一方的に導こうとする〈領導〉の構図を超えた〈教育〉と〈自己教育〉との相互性が見通されている」と述べている（柳沢 1987：245）。

(42) 長島伸一は、自由大学運動100年記念フォーラム（2022年11月13日、長野県上田市で開催）の基調報告「自由大学の『理念』と『精神』とはどのようなものか」の中で、柳沢昌一の一連の論文

のうち特に「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」(社会教育基礎理論研究会編『自己教育の思想史』叢書生涯教育Ⅰ、雄松堂出版、1987年)で「自己教育」としての自由大学の理念を詳細に検討しているとして、柳沢の論文を紹介し分析を加えている。長島は、柳沢によれば、土田の考える自由大学の教育は、「強制と伝達の『教育』、他者を自らのめざす方向へと一方的に導こうとする〈領導〉の構図を超えた、〈教育〉と〈自己教育〉との相互性が見通されている教育」であるとし、「専門家から民衆へと一方的な伝達の回路と化し、自発性を〈領導〉する装置と化した教育の否定の上に立って、民衆自らの主体性に基づく自己教育運動による、下からの『自由連合』によって働く民衆の〈教育⇔自己教育〉の可能性を切り開こうとした」もので、それは土田の「自由大学の理念」の「到達点」であったと指摘している、と紹介している。そのうえで、長島は、土田の自由大学における教育のイメージは、「強制と伝達の『教育』」でも「他者を自らのめざす方向へと一方的に導こうとする」教育でもなく、そういう教育を超えた、「〈教育〉と〈自己教育〉との相互性が見通されている教育」であるとし、「この〈教育〉には受講者どうしの〈教育〉(受講者⇔受講者)も含まれている、と考えるのが自然で」あり、つまり「この〈教育〉には受講者どうしが、ある時には教師になり、また別のある時には受講者になる関係が予定されている、とわたしは考えて」いるとし、柳沢の「自由大学の理念」の分析を高く評価している。

(43) 「自由大学協会」設立準備会の出席者、決定事項は「自由大学彙報」(『自由大学雑誌』第1巻第1号、1924年1月)による。この準備会が開かれた期日は、従来、この「自由大学彙報」の記事にしたがって8月20日とされてきたが、土田杏村は、横田憲治宛の手紙で、「この間十五日に、越後の自由大学の委員が上田へ来たので、前打合会をやった様ですが、皆な大へんに熱心だったさうです」と書き(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年8月18日、山野編 1973:21)、渡辺泰亮も山本宣治に送った手紙で、「十四日から高倉さんの所へ来て伊那、上田、越後で自由大学協会を作るべく協議いたし、いよいよ基礎が確定いたしました」と書いており(山本宣治宛渡辺泰亮の葉書、1924年8月16日、佐々木・小田切編 1979:227)、8月15日に開催されたとみるべきである。なお、土田杏村は、『文化』に「八月末には自由大学の用務で何としても行かなければならぬ事があるのだが、此れだけは代理を頼んで、自分はやはり行かないことにした」と、この準備会への出席を断念したことを記している(『文化』第7巻第4号、1924年9月)。

(44) 自由大学協会『自由大学雑誌発送簿』(1925年、筆者所蔵)による。『新しい社会を求めて』(上田市誌^⑭ 近現代編(1))に記載されている「『自由大学雑誌』発送先」では、郡内187名、郡外21名、県外366名、合計574名となっているが(上田市誌編さん委員会編 2002:131)、誤りである。

全国の購読者リストのうち、京都府は土田杏村・恒藤恭・今中次麿・山本宣治ら講師の名前が多く、東京府はアルス・岩波書店・我等社などの出版社、吉野作造や片山ひろ子・陶山務らの名前がみられる。青森県は57名と多く、特に北津軽郡五所川原町周辺に集中している。五所川原町が41名で、北海道及び東京府に転居した2名を加えると43名、五所川原町以外の北津軽郡が7名、西津軽郡が5名、弘前市が3名で、計58名となる。間山洋八は、「^{へんすう}辺陬の地五所川原町に『自由大学雑誌』をきずなに、新しい知識を求める読書仲間が、お互いからだを温めあっていたことは特筆されてよい」と評価し、五所川原町を中心に自由大学運動に接する機会を与えた人物として、農民美術研究所にいた竹内藤吉ないし猪坂直一の学生時代からの友人可児良夫をあげている(間山 1981:510-512)。しかし、猪坂直一は、『自由大学雑誌』第1巻第4号の「編輯室より」に、「青森県の竹内俊吉氏の紹介で、五所川原町を中心に七十余名の会員が出来たのには寧ろ驚いてある、自由大学の所在地でも斯うは行かぬ段だ、編輯子たるもの奮闘努力せざるを得ない」と書いており、1920年からタカラ・テルと交流があり、25年当時五所川原に住んでいた竹内俊吉の可能性が高い。

各地の自由大学の運営者には一括して送られたと思われ、伊那自由大学の林源が横田憲治に宛て

た手紙には、「自由大学雑誌の方、僕の所では、上久堅村沼塩 木下貞治君 鼎村 長尾宗次君 松尾村 長江洪七君 百十七銀行 大平豁郎君 です。(中略)中塚君の所へ、自由大学雑誌二号 七部至急御送り下さい」とある(横田憲治宛林源の手紙、1925年3月4日、山野編 1973:42-43)。

(45) 土田杏村は、『自由大学雑誌』の創刊を『文化』で紹介し、次のように述べている(土田 1925c:62)。

「自由大学の歴史にも既に四週年の過去を刻んで居る。上田、伊那、魚沼、八海、松本の五自由大学は同一理想の下に全く堅実の途を歩んで来た。我々は今や既に『自由大学雑誌』を創刊する段階にまで達したのだ。我々の雑誌こそ真に地方に生れ、都会の文化と無関係に、我々地方人の実力が何処まで伸展し得るかを示すであらう。恐らく我々の雑誌ほど現在思想界の中堅者を執筆者として網羅し得たものはあるまい。そして其れ等の執筆者の大半は我々の大学の講師であり、献身的に自由大学運動を今日まで守り育ててくれたのだ。」

(46) 経費の大半を占める講師謝礼は、1講座80円ないし100円であった。土田杏村の謝礼は20円で、土田は単なる講師ではなく、内輪の存在であったことが知られる(「信濃自由大学会計簿」)。経費の不足分は、山越脩蔵その他の青年たちの寄附金や、タカクラ・テルが上田付近の町村青年団で講演して得た謝礼などによっておぎなった。猪坂直一によれば、自由大学熱心な聴講者でもあった上田市長の勝俣英吉郎から支援の申し入れがあったが、他の会員の意見もあり、断ったことがあったという(国立教育研究所上田調査団 1974:57)。

(47) 『信濃自由大学の趣旨及内容』(1923年)による。経営難は信濃自由大学だけでなく伊那自由大学の場合も同様で、横田憲治は、自由大学の経営難に対する一つの方策として、後援会組織をつくることを考えていたことが土田杏村の書簡から知られる。土田の手紙には、「経営については、上田も同様ですが、後援機関はよいことだと思ひます。一つ懸命になって拵へ上げて下さい」とあり、土田もその構想に賛成していることがわかる(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年12月13日、山野編 1973:35)。この後援会組織が発足した日時は不明であるが、おそらく1925年1月の役員改選のときに設立が決められ、遅くとも4月には「伊那自由大学後援会」として組織されたと考えられる。

(48) 上條宏之は、上田自由大学は、大学設立地である上田・小県地域と、講師側・土田杏村の居住地である京都との「空間的距離を克服し、両者の間に人間的信頼、精神的紐帯をつくりだすことなしには成立しなかった」とし、それには「手紙がきわめて決定的な意義をになった」と指摘している。山越脩蔵と土田杏村との文通と〈出会い〉が自由大学の具体化と創設に重要な役割を果たしたことは事実である。上條が指摘するように、「手紙は、手紙の書き手たちが双方の体験や感覚を内面化し思想に高め、相互に啓発しあったために、きわめて創造的な作用を果たした」のである(上條 1979:83-84)。そして、その後も、自由大学と土田との連絡は、手紙が基本的なメディアとして用いられた。しかし、土田との手紙が途切れるとともに山越の自由大学の取り組みも次第に後退していった。そこには、手紙に託された信頼関係によって成り立っていた自由大学運動の脆弱さを物語っているように思われる。

(49) 上田自由大学と上田市民大学の合同主催は、このタカクラ・テル「文学論」1回だけであったが、勝俣英吉郎が市長となってから市の施設を借りることができるようになり、自由大学の第4期・第5期講座は会場が上田市役所となった。

(50) 土田杏村は、成人教育講座というかたちで「文部省が直接に成人教育機関を経営」してきたことに対して、「教育とさへ言へば何でも文部省が自分でやるものと思ふのが抑もの間違ひだ」とし、文部省が経営するならば「定めし天降りの講義題目が選ばれるであらう」と述べ、さらに「今日の青年会の如き御用本位のものとなり、地方の青年は其の骨の髄まで腰抜けとなつて了ふ」と述べ

て、「我々は断じて成人教育を、文部省や内務省やの手に渡してはならない」と、国家の社会教育への関与を批判していた（土田 1925b：22-23）。

- (51) 上田自由大学や伊那自由大学、松本自由大学など自由大学運動に触発ないし影響を受けて長野県内では地域の青年会や青年有志によって「自由大学」が設立されている。

上伊那郡南部5か町村青年会では片桐資郎、北澤一郎、伊藤祥二らが発起人となり、「上伊那南部自由大学」を設立し、「今や社会的教育、成人教育の思潮が盛となり事実発達しつつあり、而かも民衆の啓蒙運動は目今の急務として其の必要を叫ばれつつある。民衆が労働しつつ学ぶ自由大学こそ、教育の本流である。敢て吾々が自由大学の設立を叫ぶ所以である」と、信南自由大学趣意書によく似た趣意書を作成して、1927年12月に河合栄治郎を招いて講座を開講している。また、上伊那郡連合青年会も、「中部自由大学」を設立し、1927年12月に河合栄治郎を招いている（小平 2012：207-215）。

東筑摩郡では、武藤清文、小林静明ら東筑摩郡連合青年会の元役員有志の集まりである紫青会により1926年12月に「中信自由大学」が設立され、河合栄治郎や藤森成吉、杉森孝次郎らが招かれたが、28年には終わりをつげたといわれる（松本市 1995：690）。また、東筑摩郡南部地域の青年たちのあつまりである同人会が25年12月に「南信自由大学」を設立し、26年1月から東筑摩郡農学校を会場に早川直瀬、タカクラ・テル、太田水穂、田川大吉郎らを招いて開講する予定であることが知られ（『信濃毎日新聞』1925年12月29日）、26年2月の第4回講座にはタカクラの「文学論」が開かれている（『信濃毎日新聞』1926年2月18日）。

上高井郡では須坂町青年会が1927年5月にタカクラ・テルの「文学論」による「自由大学講座」を計画し（『信濃毎日新聞』1927年5月9日）、埴科郡では埴科郡連合青年会が1928年1月から「青年大学講座」を開講しているが、30年2月からは「自由大学講座」に名称を変更して長谷川如是閑を、31年2月には清沢冽を招いている（小平 2012：223-225）。

このような上伊那中部自由大学や南信自由大学、中信自由大学などをどのように位置づけるべきか。小平千文は、県内各地に広がった「自由大学」を『長野県史』執筆部分では「自由大学運動のひろがり」としてとらえて叙述しているが（長野県編 1989：280-282）、『自由大学運動の遺産と継承』に掲載した史料紹介では、農本主義的自由大学を除いて、「自由大学の流れをくむもの」として紹介し、ほかに「上田自由大学の影響を受けた動きを伝えた記事」として松原夏季大学と佐久自由大学についての新聞記事を紹介している（小平：2012）。私は、上伊那中部自由大学や南信自由大学、中信自由大学などは、自由大学運動の中に位置づけるのではなく、「自由大学運動の影響を受けた青年たちの自主的な学習機関」としてとらえるべきだと考えている。

なお、上伊那郡伊那町に設立された「上伊那自由大学」については、土田杏村が横田憲治宛の手紙でふれており（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年8月3日、山野編 1973：18）、1924年9月に伊那町小学校で田中龍夫「物質観の革命」の講演会を行っている（『信濃毎日新聞』1924年9月5日）ことから、これまで自由大学運動を構成する自由大学の1つに数えてきた。しかし、設立の趣意が不明であることや、1924年8月の自由大学協会設立準備会には招かれず、自由大学協会に加盟もしていないことから、自由大学運動の1つとして位置づけられないと判断し、この上伊那自由大学も「自由大学運動の影響を受けた青年たちの自主的な学習機関」の中に位置づけるのが妥当だと考えている。これまでの判断を訂正する。

- (52) 猪坂直一より聴取（1972年6月17日）。猪坂は、土田杏村とともに「自由大学運動の最も大きな柱であった」タカクラ・テルが、「大正十四五年頃から著しく左傾し」たことに対して、「学習を超えた社会主義運動には批判的であったことは私だけではないと思う。このことは十三年以後の高倉氏にとっては或いは不満であったかもしれないが、われらとしては氏が追々自由大学から遠ざ

かっていく行くように思われて悲しかった」と回想しているが（猪坂 1967：60-61）、タカクラが農民運動に関わり始めるのは1927年10月の農民自治会南佐久連合会結成大会に参加する頃からであった。28年2月の最初の男子普通選挙となった第16回衆議院総選挙では、タカクラは労働農民党北信支部から立候補要請がおこなわれたが辞退し、一方猪坂は、信濃革正党などが推す小山邦太郎を支援しており（猪坂 1979：44-49）、思想的にも政治的にもタカクラと猪坂とは離れつつあった。猪坂が自由大学の再建に加わらなかった要因の1つと考えられる。なお、猪坂は、信濃黎明会の中心人物とされ、官憲当局から要注意人としてマークされていたが、1929年には「元矯激ナル容疑言動アリシ為メ要注意人トシテ編入セラレシモ終ニ思想穩健トナリ同名簿ヨリ削除セラル」と要注意人からはずされている（東京控訴院検事局 1929）。

- (53) 「上田自由大学会計簿」による。なお、新聞記事では、「五十余名」（『北信毎日新聞』1928年3月16日）、「六十余名」（『上田毎日新聞』同年3月18日）、「八十余名」（『信濃毎日新聞』同年3月18日）となっている。『上田毎日新聞』によれば、タカクラ・テルの講義は「日本文学史」で、「今回は日本民族の文学に影響し来たれる世界の民族とその言語学的関係を述べ本論は次回となった」とある。
- (54) 米山光儀は、「自由大学に出講した講師の多くは、既存の大学でも講義をしており、自由大学には自分が属する大学で行なっている講義をもってきていた。」「被教育者本位の組織であるはずの自由大学の講義内容も、その多くは既存の大学で培われた学問そのものだった。既存の大学とは異なる自由大学は、その教育内容も当然異なっていなければならないはずであった。しかし、自由大学は、組織として新しい学問を構築するような取り組みをするまでには至らなかった。」「そのなかであって、タカクラ・テルはそれとは異なる実践を行なった。タカクラは、被教育者がもっている顕在的・潜在的にな問題意識に基づき、既存の大学で学んだ知識を再構築・再構成し新しい学問を創っていった」と、タカクラの営為を高く評価し、そのタカクラの営為の中に「既存の大学を批判的に乗り越えていく可能性が秘められて」おり、「自由大学の未発の可能性」があったことを指摘している（米山 2006：69-70）
- (55) タカクラ・テルは、三木清が出講したのを「昭和六年」としているが、記憶の誤りである。
- (56) 深町広子は、殿城村の醸造家三井味噌の長女で、第2期のタカクラ・テル「日本文学研究」と安田徳太郎「精神分析学」の2講座を聴講したという。文学好きの少女であった彼女は、女学校時代からタカクラの作品を読み、自由大学に出席し、さらに女子青年団のために講演を依頼したところから、タカクラの家に入出入りするようになった。このタカクラとの出会い、自由大学との出席が、広子の生涯に農民文学の道を歩ませることになった（上原 1995：29-46）。日本プロレタリア作家同盟の上小地区同盟員になっている（上小地方農民運動史刊行会編 1985：315）。二・四事件後、タカクラが東京に移住すると、広子も上京、タカクラの紹介で神近市子とつながりができ、『婦人文芸』に「市助とアンゴラ兎」などの作品を発表するようになったが、1937年2月にさとう正二らと出した横書き・新カナヅカイの雑誌『地方文化』が「人民戦線」だとされて検挙されている（上原 1995：43；さとう1996：290）。
- (57) 堀込義雄は、当時、神川小学校の教員。長島伸一によれば、堀込は、思索と批判的・能動的態度とを重視し、資本主義を批判する社会主義思想の登場の背景を理解せず、それを「思想悪化」とすることにも批判を加えていたという。戦後、1947年に神川村の初代公選村長となり、52年6月には北信鋳業所による神川上流での硫黄採掘に対する反対運動の先頭に立ち、神川の水を鋳毒から守ることに成功し、59年の上田市長選挙では無所属の革新統一候補として立候補して当選している。長島は、「戦後の堀込の思想と行動の原点を、若き日の青年団運動や自由大学の学習活動に求めることは、あながち的外れとはいえないであろう」と、指摘している（長島 2012a：34-40）。

(58) 山浦国久は、1923年から31年まで豊殿公民学校、神川青年学校の教員を勤め、1927年から2年間神川青年会長を務め、28年には小県郡連合青年団長を兼務している。長島伸一によれば、教員時代の山浦は、社会主義思想を「危険思想」とみなし、青年団の「改造精神」は自己改造かを出発点に地域改造から社会改造へ進むべきだという考え方が併存していたが、31年以降の長野県社会教育主事補時代になると、農民組合に対する嫌悪を前面に出し、著書『更生村浦里を語る』（1938年）では山浦の先輩である宮下周が推進した経済更生運動を肯定的に紹介、社会事業主事を経て、42年には大政翼賛会長野県支部実践部長に就任し、翼賛運動を推進したことが知られる（長島 2012b：82-88）。

(59) 宮下周は、1922年に浦里村青年会長、22年・23年度の小県郡連合青年団副団長、24年度には同団長となっている。その後、27年の県議選では信濃黎明会が改組した信濃革正党の推薦を受けて当選し長野県会議員となり、29年には浦里村長に就任している。浦里村では、深刻化する農業恐慌を反映して尖鋭化する農民運動が展開されたが、これに自力更生を対置させた。31年に村独自の経済更生運動を開始し、12月に浦里村経済改善委員会を組織する。33年の二・四事件で浦里農民組合潰滅すると、9月には浦里産業組合青年連盟（産青連）を結成し、宮下村長と産青連の青年たちによって挙村一致体制による経済更生運動が推進されていった。33年3月には長野県経済更生指定村に指定され、36年10月には全国優良更生村として農林大臣表彰を受けている。そして40年11月には大政翼賛会長野県支部常務委員兼組織部長に任命され、実質的に天皇制ファシズムを地方で下支え、県民を戦争へ動員する先頭に立っていく（上條 1973：101-104；中村 1978：250-262）。

この宮下周の軌跡について、中村政則は、「宮下の反中央的・反都会的心情と農村改造への志向は、二〇年代における農村危機と関東大震災とによっていっそう増幅されていった」とし、「その当時、上田・小県地域の農村にも大正デモクラシー的文化状況が形成され、宮下も青年団自主化運動の先頭に立ち、地方分権を基礎とする地方自治の建設に挺身する動きをみせていた」が、宮下が村長に就任した直後に大恐慌が襲来し、農民運動は激化し、青年団運動の左傾化も始まったのを契機に、「宮下の思想は急速に反共主義の色彩をつよめ」、「大恐慌による農村疲弊の脱却策として、農村の自力更生が意識的に追求されること」になったとしている（中村 1978：259-260）。また、長島伸一は、「若き日の宮下は、『青年の自由な思想』が『社会の進歩発展』を担うものであり、青年団活動はやすやすと『政党や軍閥』などに絡めとられてしまう組織ではないと主張していた」が、農民組合運動を「空想的な社会変革」「妄想」と一蹴し、「農民組合に対する嫌悪が示すように、宮下は『世界の思潮』に対しては無関心で、他人の『思想の自由』に対しても寛容な精神を持ちあわせてはいなかった」とし、また、宮下の産業組合主義は「皇室中心主義」と結びついていたこと、国策であった満洲移民も積極的に推進したことなどを指摘して、「自力更生」への途は「若き日の思考の中に、1930年代前半期に開花することになる芽がすでに埋め込まれていた」と指摘している（長島 2012a：31-33）。これに対して庄司俊作は、「大正デモクラシーの旗手である宮下が村民の広範かつ強い期待を担って村長に就任、経済更生運動を主導したこと」、村長就任前から「町村行政・地方自治は農村生活の向上確立を自覚した村民の活動を拠りどころとして実現されなければならない」と主張しており、宮下が村長となり、経済更生運動を主導する中で自らの主張を実現したという面が色濃いこと、村づくりという観点から見たとき、浦里村の20年代と30年代の間には連続性があったことを指摘している。そして、宮下は農民組合から激しい批判を受けたが、村長として村づくりにかける宮下の姿勢は組合派にも開かれており、宮下は「非社会主義」ではあったが、社会主義や社会主義者というだけで排除することを「反社会主義」とすると、そうした立場はとっていないとし、「1920年代における進歩的な社会改良主義者としての宮下の思想と行動を考えなければ、浦里村の経済更生運動の基本的性格は説明できない」と指摘している（庄司

2008 : 212-214)。

- (60) 石井泉は、家業の蚕種製造を手伝う傍ら青年団運動に積極的に関わり、『泉田時報』への熱心な寄稿者であった。1930年に泉田青年会長になり、31年から32年には『泉田時報』の発行兼編輯人になり、31年度には小県郡連合青年団の評議員を兼務している。石井は、青年会長就任の挨拶文の中で、青年会は「従来の如き単なる修養団体に止まらず、現在社会に於けるあらゆる事象を批判、検討し、以ってその実践の指針に基き、社会に能動的活動をなすべき機運に到達している」と、青年会の性格と役割を述べ、電灯料値下げ運動に積極的に関わっていったが、運動が敗北に終わると、その敗因として「所謂階級意識の無かった事」をあげている。しかし、満州事変後、「転向」し、1934年には泉田村の産青連に理事として参加をする。戦後、1955年に村長となり、上田市との合併に力を尽くし、59年に市議員に当選し、中道会派の中核として議員活動を続け、73年には上田市長となっている（長島 2012b : 90-101）。
- (61) 山本宣治記念碑は、1929年3月15日に開かれた山本代議士追悼大演説会で井沢譲が「故山本代議士が、三月一日本聯合会第二回大会にせる講演が、故人最後の講演となり了したる故、これを記念するため当上小地方に代議士の碑を建設したき件」を提案し可決したことを受けて、上小農連が建設の準備を進めた。しかし、さまざまな圧迫で、建設地が決まらず、ようやく斎藤房雄の好意でタカラ・テルの屋敷地の一部を切りはなして、そこに建てられるようになり、碑の文面はラテン語で「VITA BREVIS SCIENTIA LONGA (命短し科学は長し)」と記すことだけが認められた。この山宣碑は、1933年の二・四事件後、警察は家主の斎藤房雄に対して碑の取り壊しを命じた。斎藤は、ひそかに出入りの車力に命じて碑を自宅に運ばせ、正面玄関の泉水のへりに裏返して埋め、粉碎した旨の始末書を警察にした。それから38年後の1971年10月、旧上小農民組合連合会・上田自由大学・小県郡連合青年団関係者によって、斎藤が保存していた山宣碑は安楽寺裏山道の小高い丘の上に再建されている（上小農民運動史刊行会編 1985 : 124-132 ; 倉沢 1987 : 170-185）。
- (62) たとえば、小県蚕業学校を卒業後、家業の蚕種製造にたずさわりながら、キリスト教信者となり、『福音新報』や『平民新聞』の読者でもあった中沢鎌太は、自由大学の熱心な聴講生で筆記ノートが6冊残している（中沢恵太より聴取、1977年3月30日）。その中沢は、1929年3月15日に上田市公会堂で開催された「山本宣治代議士追悼演説会」に参加し（「中沢鎌太日記」1929年3月15日条）、また、30年には上小農民組合の井沢譲の依頼を受けて東信無産派の委員を引き受け（同前、1930年1月16日条）、東信無産派の発会式にも参加をしている（同前、1月31日条）。
- (63) 戦後、千曲文化クラブで知り合った小宮山量平とともに共産党に入党した内山弘正は、小宮山と「農村に行って講演会や学習会を随分やったことがある」が、その中で、農民のなかに「進歩的な大正期からの伝統があることを聞かされ、また実際に行って感じた」と、回想している（内山弘正より聴取、1984年10月9日）。
- (64) 上田自由大学聴講者のその後の軌跡をあとづける作業は、上原民恵、長島伸一によって進められてきた。上原は、深町広子の生涯を明らかにし（上原1995）、長島は、宮下周、堀込義雄、山浦国久、石井泉、金井正の思想と行動を検討している（長島 2012a、2012b、2013c、2013、2014）。

引用・参考文献

天田邦子 1972 「戦前における長野県上小地方の社会教育」（お茶の水女子大学卒業論文）。

天田邦子・山野晴雄 1975 「青木猪一郎日記、中沢鎌太日記－上田自由大学調査報告(1)－」（『自由大学研究』第4号）。

- 猪坂直一 1925a 「上田自由大学の回顧(一)」(『自由大学雑誌』第1巻第1号、1925年1月)。
- 猪坂直一 1925b 「上田自由大学の回顧(五)」(『自由大学雑誌』第1巻第5号、1925年5月)。
- 猪坂直一 1925c 「上田自由大学の回顧(六)」(『自由大学雑誌』第1巻第7号、1925年7月)。
- 猪坂直一 1925d 「彙報」『自由大学雑誌』第1巻第9号、1925年9月)。
- 猪坂直一 1935 「土田さんと自由大学」(『紫野より』第8号、土田杏村全集第8巻附録)。
- 猪坂直一 1967 『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』上田市民文化懇話会。
- 猪坂直一 1976 「自由大学雑誌発行の回想」(『自由大学雑誌復刻版月報』自由大学研究会)。
- 猪坂直一 1979 『小山邦太郎の足跡』小山邦太郎先生伝刊行会。
- 井沢讓 1983 「自由大学関係者の証言(4)井沢讓氏に聞く」(『自由大学研究』第8号)。
- 出隆 1963 『出隆自伝』(出隆著作集7、勁草書房)。
- 上田蚕糸専門学校 1921 『上田蚕糸専門学校一覧』大正10年。
- 上田市史編さん委員会編 1970 『上田近代史』上田市。
- 上田市誌編さん委員会編 2001 『生涯学習と文化活動』(上田市誌¹⁸ 近現代編(5)) 上田市。
- 上田市誌編さん委員会編 2002 『新しい社会を求めて』(上田市誌¹⁴ 近現代編(1)) 上田市。
- 上田小県近現代史研究会 2008 『蚕都上田ものがたり－蚕種業を中心として－』(上田小県近現代史研究会ブックレットNo.15)。
- 上田小県近現代史研究会 2022 『上田小県における大正デモクラシー』(上田小県近現代史研究会ブックレットNo.29)。
- 上原民恵 1995 『深町広子と上田自由大学』(上田小県近現代史研究会ブックレットNo.1) 上田小県近現代史研究会。
- N K 生 1925 「自由大学の二途」(『自由大学雑誌』第1巻第8号、1925年8月)。
- 遠藤恭介 1968 「一冊のノート」(『土田杏村とその時代』第7・8合併号)。
- 遠藤恭介 1978 「回想」(浜田陽太郎・石川松太郎・寺崎昌男編『近代日本教育の記録』下巻、日本放送出版会)。
- 大谷文子 2009 『セピア色のアルバム』週刊上田新聞社。
- 大槻宏樹編 1983 『金井正選集－大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言－』早稲田大学教育学部大槻研究室。
- 大槻宏樹編 2002 『山越脩蔵選集－共生・経世・文化の世界－』前野書店。
- 大脇義一 1968 「信州自由大学の思出」(上木敏郎編『土田杏村とその時代』第7・8合併号)。
- 岡崎袈裟男 1919 「自由画展覧会と児童の本性」(『信州』第1巻第6号、1919年7月)。
- 岡本洋之 2021 「土田杏村の彼方に青年たちが見た『学問的自己教育の文化』－英日比較教育史のなかの自由大学運動と長野県千代村の人々－」(『日英教育研究フォーラム』第25号)。
- 尾川昌法 1968 「危機における日本帝国主義の思想」(『日本史研究』第97号)。
- 梶井重雄編 1980 『中田邦造』(個人別図書館論選集、日本図書館協会)。
- 金井正 1921 「二つの催青」(『芸術自由教育』第1巻第6号、1921年6月)。
- 鹿野政直 1973 『大正デモクラシーの底流』日本放送出版会。
- 鹿野政直 1974 「絹の道と青春」(朝日新聞社編『思想史を歩く』下巻、朝日選書)。
- 上木敏郎 1968 「若き日の土田杏村(二)」(『成蹊論叢』第7号)。
- 上木敏郎 1982 『土田杏村と自由大学運動－教育者としての生涯と業績－』誠文堂新光社。
- 上條宏之 1973 「恐慌下農民運動と経済更生運動の実態－長野県浦里村の場合－」(『季刊現代史』第2号、のち『民衆の近代の軌跡－地域民衆史ノート・2－』銀河書房、1981年、に収録)。
- 上條宏之 1979 「大正デモクラシーと上田自由大学－地域民衆の創出した”大学”－」(『伝統と現

- 代』第56号、1979年1月、のち『民衆的近代の軌跡－地域民衆史ノート・2－』銀河書房、1981年、に収録)。
- 清川雪彦 1980 「蚕品種の改良と普及伝播」(『国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告』46)。
- 倉沢美穂 1982 『別所温泉の高倉テルさん』倉沢美穂先生遺稿集刊行会。
- 棚澤精一 1938 「棚澤精一略譜」(『歌集句集 朝草』信濃毎日新聞社)。
- 国立教育研究所上田調査団 1974 「猪坂直一氏との対談」(『自由大学研究』第2号)。
- 小崎軍司 1974 「農民哲学者・金井正－大正デモクラシーを超えた人－」(『思想の科学』別冊9、通巻247号、1974年11月)。
- 小崎軍司 1975 『夜あけの星』造形社。
- 小崎軍司・川上元編 1976 『写真集 上田の百年』信濃路。
- 小平千文 1995 「農村教育研究会と信濃農村自由大学－その成立と思想－」(『長野県歴史館紀要』第1号)。
- 小平千文 2001 「地域社会と『時報』の発行－青年たちの社会改良〈変革〉の変遷－」(『信濃』第53巻第3号、2001年3月号)。
- 小平千文 2006 「上田自由大学を創設し運営した青年たち－金井正・山越脩蔵・猪坂直一－」(長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社)。
- 小平千文 2012 「60周年から90周年に至る間の長野県内における自由大学関係史料」(大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』前野書店)。
- 小林泰一 1925 「発刊に際して」(『川辺時報』創刊号、1925年6月10日)。
- 小林利通 1973 「幻想としての自由大学－解釈のためではなく変革のために－」(『自由大学研究』第1号)。
- 小宮山量平 2008 『自立的精神を求めて－季刊『理論』の時代－』こぶし書房。
- 故山口正太郎教授記念事業実行委員編 1935 『故山口正太郎教授遺稿』。
- 是枝英子 1987 「草創期の上田市立図書館について」(『図書館学会年報』第33巻第2号)。
- 佐々木敏二・小田切明德編 1979 『山本宣治全集』第7巻、汐文社。
- 佐竹哲雄 1968 「信州自由大学の思い出」(『土田杏村とその時代』第7・8合併号)。
- さとう正二 1996 『秋風急なり－医師随想百拾壹話－』コスモス通信社。ひ
- 佐藤泰治編 1981 『小出町歴史資料集』第1集(近代教育Ⅱ)、小出町教育委員会。
- 渋谷定輔 1974 『大地に刻む』伸人物往来社。
- 渋谷定輔・蒲池紀生 1976 「上田自由大学のころ 上－山越脩蔵・猪坂直一氏に聞く－」(『月刊社会教育』第20巻第11号、1976年11月)。
- 渋谷定輔・小川利夫 1979 「対談 青年と自己形成－『農民哀史』の著者と語る－」(『教育』第29巻第6号、1979年6月)。
- 清水一明 2016 「農民美術運動の史的検証－大正農村のユートピズムの行方－」(『放送大学日本史学論叢』第3号)。
- 清水実 1930 「新春の劈頭に当り教化総動員の実施に就て」(『本原時報』第84号、1930年1月1日)。
- 自由大学研究会編 1983 『自由大学運動と現代』(自由大学運動60周年集会報告集、信州白樺社)。
- 庄司俊作 2008 「現代転換期の農村と社会主義－長野県浦里村長宮下周の軌跡を通して－」(『キリスト教社会問題研究』第56号)。
- 上小農民運動史刊行会編 1985 『長野県上小地方農民運動史』上小農民運動史刊行会。

- 新明正道 1975 「自由大学の思い出」(『自由大学研究』第4号)。
- 高倉輝 1919 「ゴオゴリ評伝(三)」(『芸文』第10年第4号、1919年4月)。
- 高倉輝 1920 「ゴオゴリ評伝(六)」(『芸文』第11年第2号、1920年2月)。
- 高倉輝 1924 「自由大学に就て」(横田憲治編『伊那自由大学とは何か』、『自由大学研究』第4号、1975年、に収録)。
- 高倉輝 1929 「山本宣治のこと」(『社会及国家』第157号、1929年4月)。
- 高倉テル 1937 「自由大学運動の経過とその意義—農村青年と社会教育—」(『教育』第5巻第9号)。
- 高倉テル 1946 「知識の良心」(『世界』第9号、1946年9月)。
- タカクラ・テル 1951 「わたしのあるいてきた道」(『人民文学』1951年2月号)。
- タカクラ・テル 1963 「イデ・タカシくんと結びつき」(『出隆著作集月報』2、勁草書房)。
- タカクラ・テル 1973 「自由大学かんけいの書簡集」(『伊那自由大学関係書簡(横田家所蔵)』自由大学研究会)。
- タカクラ・テル 1978 「自由大学のこと」(『信州白樺』第29号)。
- タカクラ・テル 1981 「自由大学がわたしを変えた」(『自由大学運動六〇周年記念誌』)。
- 竹村民郎 1971 『独占と兵器生産—リベラリズムの経済構造—』勁草書房。
- 田嶋一 2019 「近代日本の青年の自立と教育文化(1)—1920年代における青年たちの自立への希求と自由大学運動—」(「青年の自立と教育文化」研究部会『青年の自立と教育文化』野間教育研究所紀要第61集、野間教育研究所)。
- 丹沢美助 1929 「わが信州の青年—本県社会教育を顧みて—」(『塩尻時報』第145号1929年1月20日)。
- 土田杏村 1920 「日本文化学院綱領」(『文化』第1巻第1号、1920年1月号)。
- 土田杏村 1921a 「哲人村としての信州神川」(『改造』1921年7月号)。
- 土田杏村 1921b 「社会主義とアナキズムの統一としての文化主義」(『文化』第3巻第1号、1921年10月号)。
- 土田杏村 1922a 「我国に於ける自由大学運動に就いて」(『文化運動』1922年1月号)。
- 土田杏村 1922b 「編輯雑記」(『文化』第4巻第1号、1922年5月)。
- 土田杏村 1922c 「自由大学運動の意義」(『文化運動』1922年10月号)。
- 土田杏村 1923a 「自由大学に就て」(『信濃自由大学の趣旨及内容』信濃自由大学事務所、1923年、『自由大学研究』第3号、1975年、に収録)。
- 土田杏村 1923b 「設立の趣旨」(『信南自由大学趣旨書』1923年、『自由大学研究』第3号、1975年、に収録)。
- 土田杏村 1924a 「修養技手の蜘蛛網」(『解放』1923年6月号、『教育の革命時代』中文館書店、所収)。
- 土田杏村 1924b 「プロレットカルト論」(『中央公論』第38年第7号、1923年7月号、『教育の革命時代』中文館書店、所収)。
- 土田杏村 1924c 「自由大学とは何か」(横田憲治編『伊那自由大学とは何か』1924年、『自由大学研究』第4号、1975年、に収録)。
- 土田杏村 1925a 「自由大学へ」(『自由大学雑誌』第1巻第1号、1925年1月)。
- 土田杏村 1925b 「自由大学の危機」(『自由大学雑誌』第1巻第2号、1925年2月)。
- 土田杏村 1925c 「直ちに新文化を建設する 自由大学へ—『自由大学雑誌』の創刊—」(『文化』第8巻第4号、1925年4月)。
- 土田杏村 1935 「彼の人達へ」(1915年5月15日、『土田杏村全集』第14巻、第一書房、所収)。

- つちや生 1931 「成人教育講座を受講して」(『室賀村報』第72号、1931年3月10日)。
- 恒藤恭 1923 「信濃自由大学聴講者諸君!!」(『信濃自由大学の趣旨及内容』信濃自由大学事務所、『自由大学研究』第3号、1975年、に収録)。
- 恒藤恭 1954 「学究生活の回顧」(金田一京助著者代表『学究生活の思い出』宝文館)。
- 土井貴子 2013 「アルバート・マンスブリッジの大学成人教育実践－労働者教育協会の設立を中心に－」(『比治山大学短期大学部紀要』第48号)。
- 東京控訴院検事局 1929 『秘 東京控訴院管内社会運動情勢調査』。
- 中嶋洋 2010 「学習メディアとしての『自由大学雑誌』の役割－雑誌の構成及び掲載論文・記事の分析から－」(『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第4号)。
- 長島伸一 2006 「自由大学運動と聴講生の学びの実態」(長野大学編『上自由大学とその周辺』郷土出版社)。
- 長島伸一 2008 「上田小県地域の青年団活動と『社会的教養』－『西塩田時報』を中心に－」(『長野大学紀要』第30巻第2号)。
- 長島伸一 2012a 「上田自由大学受講者群像(1)－宮下周、堀込義雄の軌跡－」(『長野大学紀要』第33巻第2・3合併号)。
- 長島伸一 2012b 「上田自由大学受講者群像(2)－山浦国久、石井泉の軌跡－」(大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』前野書店)。
- 長島伸一 2012c 「金井正の思想と行動(1)－大正デモクラシー期を中心に－」(『長野大学紀要』第34巻第2号)。
- 長島伸一 2013 「金井正の思想と行動(2)－ファシズム期を中心に(第1部)－」(『長野大学紀要』第35巻第2号)。
- 長島伸一 2014 「金井正の思想と行動(3)－ファシズム期を中心に(第2部)－」(『長野大学紀要』第35巻第3号)。
- 長島伸一 2022 『民衆の自己教育としての「自由大学」－上田・魚沼・八海・伊那・福島・上伊那・松本・群馬・(越後)川口－』梨の木舎。
- 中田邦造 1933 『公立図書館の使命』石川県社会教育課。
- 長野県編 1972 『長野県政史』第2巻、長野県。
- 長野県編 1989 『長野県史 通史編』(第8巻、近代2、長野県史刊行会)。
- 長野県知事官房 1923 『長野県職員録』大正11年。
- 長野県内務部農商課 1932 『長野県の不況実情』。
- 中村政則 1978 「経済更生運動と農村統合－長野県小県郡浦里村の場合－」(東京大学社会科学研究所ファシズムと民主主義研究会編『昭和恐慌』ファシズム期の国家と社会1、東京大学出版会)。
- 農林省経済更生部 1937 『全国優良更生農村経済更生計画及其ノ実行状況－長野県小県郡浦里村事例－』。
- 波多野鼎 1968 「自由大学の想出」(『土田杏村とその時代』第7・8合併号)。
- 平野勝重 1966 「山本鼎の業績と生涯」(『山本鼎研究資料』第1集)。
- 平野勝重 1981 「土田杏村と自由大学運動」(『学習指導研修』第4巻第8号、1981年11月号)。
- 深町広子 1974 「自由大学と私」(『自由大学研究』第2号)。
- 福永義臣 2006 『図書館社会教育の実践－中田邦造の読書指導と自己教育論－』中国書店。
- 細田延一郎 1978 「回想」(浜田陽太郎・石川松太郎・寺崎昌男編『近代日本教育の記録』下巻、日本放送出版会)。
- 堀込藤一 2011 『清冽なる流れ「神川」と生きて－父堀込義雄－』私家版。

- 前野良 1983 「回想－上田自由大学と今中政治学－」（『自由大学研究』第8号）。
- 松尾尊兌 1989 『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店。
- 松沢兼人 1964 『私の現代縦走』私家版。
- 松沢兼人 1982 「信州自由大学の土壌」（『自由大学研究』第7号）。
- 松塚俊三 2006 「独学の文化」（松塚俊三・安原義仁編『国家・協同体・教師の戦略』昭和堂）。
- 松本衛士 1988 「治安維持法と長野県」（『治安維持法と長野県』治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長野県本部）。
- 松本市 1995 『松本市史』（第2巻歴史編Ⅲ近代）松本市。
- 間山洋八 1981 『青森県読書運動明治大正史』津軽書房。
- 宮崎新一・他 1928 「青年団修養講習会報告(一)」（『塩尻時報』第131号、1928年2月11日）、
文部省社会教育局 1930 『教化総動員実施概要』。
- 文部省社会教育局 1932 『昭和六年成人教育・母の講座・労務者教育実施概要』。
- 安田常雄 1981 『出会いの思想史－渋谷定輔論－農民哀史の世界－』勁草書房。
- 柳沢昌一 1980 「信濃自由大学設立過程の再検討－農村社会運動と民衆の自己教育 その1－」
（『社会教育の研究－近代民衆史への模索－』早稲田大学教育学部社会教育専修大槻宏樹ゼミ報告書、第8号）。
- 柳沢昌一 1981 「自由大学運動と〈自己教育〉の思想－〈農村青年〉の自己形成史－」（大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造』早稲田大学出版部）。
- 柳沢昌一 1987 「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」（社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習Ⅰ 自己教育の思想史』雄松堂出版）。
- 山口和宏 1994 「自由大学運動における『教養主義』再考」（『日本社会教育学会紀要』第30号）。
- 山口和宏 2004 『土田杏村の近代－文化主義の見果てぬ夢－』ぺりかん社。
- 山越脩蔵 1921 「青年と青年教育者との対話」（『芸術自由教育』第1巻第3号、1921年3月）。
- 山越脩蔵 1921 「村と産業美術」（『芸術自由教育』第1巻第6号、1921年6月）。
- 山越脩蔵 1972a 「上田自由大学の頃」（『信州白樺』第7号）。
- 山越脩蔵 1972b 「上田自由大学の頃(二)」（『信州白樺』第8号）。
- 山越脩蔵 1973 「上田自由大学の頃(六)」（『信州白樺』第12号）。
- 山越脩蔵 1976 「上田自由大学」（『長野』第68号）。
- 山越脩蔵 1978 「土田杏村の手紙と上田自由大学」（『信州白樺』第29号）。
- 山越脩蔵 1982 「出先生の思いで」（出かず子編『回想出隆』回想出隆刊行会）。
- 山越脩蔵 2006 「信濃自由大学（未定稿）」（長野大学編『上自由大学とその周辺』郷土出版社）。
- 山野晴雄 1972 「上田自由大学運動研究ノート」（『民衆史研究』第10号）。
- 山野晴雄編 1973 『伊那自由大学関係書簡（横田家所蔵）』自由大学研究会。
- 山野晴雄 1974 「新潟県における自由大学運動(1)」（『自由大学研究』第3号）。
- 山野晴雄 1975a 「伊那自由大学の歴史」（『月刊社会教育』第19巻第9号、1975年9月）。
- 山野晴雄 1975b 「新潟県における自由大学運動(2)」（『自由大学研究』第4号）。
- 山野晴雄 1978 「教育県・長野－上田自由大学とその周辺－」（金原左門編『地方デモクラシーと戦争』地方文化の日本史9、文一総合出版）。
- 山野晴雄 1980 「住谷悦治・松沢兼人自由大学関係資料」（『自由大学研究通信』第3号）。
- 山野晴雄 1982 「民間教育運動－山本鼎の自由画教育運動を中心として－」（鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第3巻、日本評論社）。
- 山野晴雄 1986 「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向－信濃黎明会の活動を中心

にー」(『自由大学研究』第9号)。

山野晴雄 1993 「土田杏村と上田自由大学」(冨田博之・中野光・関口安義編『大正自由教育の光
芒』復刻版『芸術自由教育』別巻、久山社)。

山野晴雄 1994 「関東大震災後の社会情勢」(金原左門編『大正デモクラシー』近代日本の軌跡4、
吉川弘文館)。

山野晴雄 2008 「タカクラ・テルの1920年代ータカクラにおける「民衆」の発見ー」(長野県近代
史研究会編『長野県近代民衆史の諸問題』龍鳳書房)。

山野晴雄 2020 「戦後上田自由大学の再建と展開」(長野県近代史研究会編『長野県近現代史論集』
龍鳳書房)。

山本鼎 1919 『児童自由画展覧会趣意書』。

山本鼎・金井正 1919 『農民美術建業之趣意書』。

吉池勝 1921 「農夫と農民美術」(『芸術自由教育』第1巻第6号、1921年6月)。

米山光儀 2006 「タカクラ・テルと自由大学」(長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版
社)。

渡辺典子 1994 「一九二〇年代～三〇年代における青年の地域活動ー長野県神川村の『路の会』
による学習・教育を中心にー」(『日本教育史研究』第13号)。

* 本稿は、「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動ー上田自由大学を中心としてー」(『季刊現代史』
第8号、1976年)及び「昭和恐慌と自由大学運動ー上田自由大学を中心にー」(『長野県近代史研究』)
もとに大幅に加筆・修正したものである。なお、拙著『上田自由大学の歴史』(2022年、自由大学
研究・資料室)掲載のものに一部加筆・修正をした。